設

387
260

387-260
12005014575 89

2 103

佛教の大意

昭和廿七年一月廿日
帝國圖書館

387-260

佛教の大意

目次

第一　緒論……一
昨年一月以降――本日の講題――經典の大意と其の結歸に就て――講演の順序――說者と聽者の態度――先づ原理的說明
第二　佛教の本義……五
佛教の基礎――佛教の本義――佛たるべき方法――方法に二通り――第一義諦――世俗諦――二諦の意義
第三　佛教の原理……七
（1）世俗諦
先づ低級から――因緣果――因緣果は世諦の基礎――歐洲學者と佛教――因緣果の關

係――粗の例――原因のみにては果を結ばず――緣の作用――原因なして結果たらしむるものは緣――化學上から見た緣の作用――カタライザー――因緣所生は生滅の原則――生滅は空なる狀態――智愚の別――凡てのものには常態なし――空は變化狀態――人間と空氣――人間と牛――新陳代謝は生滅の原則に從ふ

（2）世俗諦から第一義諦へ……一九

低級と高級との聯絡は如何――先づ凡ての存在を否定せよ――物體は單に集緣結合のもの――元素――元素まで割れば凡て皆同じ――元素も未だ執着あり――アトム――原子――元素の根底破壞と原子量――物體は變化の順序原子のみ不變化――原子も生滅の原則に從ふ――プロトンとエレクトロン――原子はプロトンとエレクトロンの結合物――水素原子、ヘリウム、トリウム、ウラニウム――プロトンとエレクトロンは如何――ラジエイション――プロトン、エレクトロンは極微塵にして空中に遍滿す――凡てのものは因緣所生にして空なる狀態――生滅の原則と今日の物理學――世俗諦と今日の科學

（3）第一義諦……二九

第一義諦は一切を認めず――維摩と文殊の問答――默するに然かず――第一義諦は言語を超越す――第一義諦は不生不滅非因非緣非果――變化と不變化――空と非空――第一義諦の空と世諦の空――差別的觀念は低級――本來自體相無し――エレクトロンを認めるは世諦の範圍――第一義諦は凡て空なる相――第一義諦と世俗諦の作用は如何――吾人の受話器はラヂオの受話器よりも下等――電波はプロトンとエレクトロンの衝擊――人間の受話器と科學の定規――原理は科學の定規によられば嘘――世俗諦の究極も第一義諦も本來無性

第四　佛教と人生……四〇

（1）迷　と　悟

佛教は一切を正しく知る法――お經は虛妄人心を改へる寒暖計――迷悟の主體を知るには世俗諦――世俗諦から見た迷悟――世俗諦は迷悟を區別す――第一義諦から見た迷悟――第一義諦は物質も精神も認めず――精神の存在せざる證據――人體精神は單に其の結合期間――第一義諦は迷悟の區別を立てず

（2）煩惱卽菩提……四七

迷悟の同じき所以――煩惱菩提體無二――見眞大師は佛言に從ふ――佛教に發明無し
――見眞大師は維摩詰所說經になる――六十二見一切の煩惱惡不善業これ如來の種――見眞大師にして初めてこの言あり――和讃――本願圓頓一乘――罪障功德の體――煩惱と罪障――菩提と功德――功德の眞義――罪障は如何にして功德の體たるや

（3）信……五五

凡夫の悟を開く方法は如何――執着の有無と罪障と功德の別――信は一切佛法中最善の法――紙幣の流通は信用にあり――如來如實の言を斯くの如く信ず――百回を百圓と信ずるのみ――信はよく煩惱卽菩提の原理を了悟せしむ――眞宗は信の一念によつて往生極樂の緣を結ぶと說く――信はよく迷をして往生極樂の正因たらしむ

（4）廣略相入……六三

佛教は悉く差別と平等の兩面を持つ――第一義諦には分別なし――如來如實の言は廣略相入によつて知る――廣略の意義――世諦因緣法は廣相――根本不動の相は略相――廣略相入――一卽ち多、多卽ち――第一義諦と世諦は互に相入す――廣に執着する弊と、略に執着する弊――廣略相入には低級高級の別無し――廣略相入と人生活動――佛教信仰の眞價値――廣略相入は佛教の原理――明日は廣略迷悟の模樣――釋迦の無礙辯に兩面あるも原理は一つ

第五　經典の大意……七二

佛說は相手相應――十二部經――十二部經は經の說き工合による區別――Sūtra――Geyyam――Vyākaraṇam――Gathā――Udānam――Nidānam――Avadānam――Itivṛttakam――Jātakam――Vaipulyam――Adbhuta-dharmaḥ――Upadeśaḥ

第六　解深密經……七九

原字――十二部經總括のスートラ――原字の意義――玄奘譯と菩提流支譯――結と密との字義上の關係と經題の意味――法相宗に於けるこの經典の地位と其の說相――新譯――五卷八品――舊譯――五卷十一品――主要點――無自性相――三通りの見方――遍計所執――依他起性――圓成實性――佛說は一乘法のみ――高低は見やうにより等しく大乘經典

第七　勝鬘獅子吼經……八八

原字――經題――原字の意義――皇后の戶籍――在家の婦人中の傑物――求那跋陀羅

譯十五章――章題――この經の說相――勝鬘は女の除外例――自性淸淨章――十經は各矛盾相違し乍ら互に廣略相入す――印度原典を缺く――如來藏自性淸淨客塵煩惱所染――勝鬘經の骨子――如來藏と客塵煩惱――この經が一乘大方便方廣經としての眞價値――鏡と塵――鏡も塵も本來淸淨――難解の法――勝鬘の說法と佛の隨喜――二法の了知は勝鬘及同位の菩薩にして吾々凡夫には分らず

第八　說無垢稱經……九八

原字――玄奘譯――鳩摩羅什譯――この經と日本佛敎――原字の意義――幷マラキールティ――新舊各十四品――鳩摩羅什譯十四品――玄奘譯十四品――原典を缺く――この經の說相――一丈四方の部屋――病氣見舞と諸弟子の拒避――文殊の見舞許諾と維摩の一喝――八萬四千由旬の椅子と不可思議解脫――毛孔に四大海水を入る――菩薩不二法門――文殊の緘默と維摩の感嘆――不二法門は言說文字を超越す――如來種性とは如何――如來種性は不可思議解脫にして善惡を認めず――二乘は無上正徧智を證得せず

第九　入楞伽經……一一〇

原字――菩提流支譯――實叉難陀譯――原字の意義――求那跋陀羅譯――求那跋陀羅譯四卷、菩提流支、實叉難陀譯各十卷――楞伽島と肉食人種――怪物羅刹王羅婆那――釋迦羅婆那王を說伏す――この經には原本あり――初めの一卷は怪物相手、後の九卷は大慧相手――九卷の品題――偈頌一卷――この經の說相――有見――無見――斷常二見――內道と外道――一字不說――楞伽經と禪宗

第十　般舟三昧經……一一七

原字――巴利語の音――支婁迦讖譯――pratyutpanna の意義――この經の說相――Samādhi の意義――品題――日々の行狀を說く代表的經典

第十一　金光明最勝王經……一二〇

原字――原字の意義――義淨譯――原本有り――鎭護國家の妙典――十卷三十一品――この經の基礎は三品――辨天は財を施さず――鎭護國家の功德――四王の德の第一は武備

第十二　能斷金剛經……一二四

原字――玄奘譯――鳩摩羅什譯――菩提流支譯――眞諦譯――眞宗法門とこの經の地

位――原字の意義――この經の眞價――この經の難解なる所以――この經の說相――
如來は我執有情執無し

第十三　大薩遮尼犍子授記經……一二九

原字――授記の義――大薩遮尼犍子の義――この經の譯者――この經と諸宗派――尼犍子は外道――品題――說法の場所――外道も佛敎――耶蘇敎も佛敎――諸外道皆同佛法一橋梁――諸宗旨の未究極と佛說の尊重――王論品と其の說相――舍利弗と尼犍子の問答――日連と佛の問答――摩訶迦葉と尼犍子の問答――諸弟子不可得云々の疑を質す――一切のもの凡て佛敎一乘法

第十四　大方廣佛華嚴經……一三九

原字――佛陀跋陀羅譯と實叉難陀譯――般若譯普賢行願品――說明の困難――說法の場所と人間離れの所以――複雜廣大の法相――avatuṁsaka の義と華嚴との關係――品題――菩提樹下の說法――其の說相――普光明殿の說法と其の說相――三十三天の說法――夜摩天の說法――兜率天の說法――他化天宮の說法――普光明殿第二回說法――第三回說法――重閣講堂の說法――佛敎の構造に就て――說法聽聞者の戸籍帳――この經の主題は信――十迴法――普光明殿第二會の說相――第三會の說相――この經は廣略相入す――廣略相入は大乘經典の特徵――信卽成佛――釋迦佛の說法は一品のみ――如來現相品の說相――普賢菩薩が立役者――佛も菩薩も內證の智は同樣――普賢の原字――普賢の意義――普賢の願行――願は行を伴うて初めて成就――この經の結歸は普賢行――入法界品の說相――善財童子の發心と普賢菩薩――善財の質問と普賢の回答――普賢行の要點と阿彌陀如來の資本――智者は利用し愚者は害用す

第十五　妙法蓮華經……一五八

原字――鳩摩羅什譯――原字の意義――大乘佛敎に於けるこの經の地位――一乘の妙典――唯有一乘法――不可思議の奇瑞と諸弟子の勸請――二乘は方便にして假說的――唯一佛乘のみ――方便――四十餘年未だ眞實を顯はさず――今初めて眞實を顯はす――舍利弗の授記――摩訶迦葉等諸阿羅漢諸聲聞の授記――凡夫往生の證據――品題――信受說法者の功德――信受說法者を守護す――如來壽量品の說相――觀音菩薩普門品――普門の義と觀世音――普門品と妙法蓮華經の關係――普門品の說相――法華經全卷觀音の働き――一乘法と彌陀法と觀世音菩薩

第十六　大般涅槃經……一七〇
原字――原本無し――法護譯――涅槃經の特徴――說法の場所と時――涅槃の意義――佛の入涅槃と諸弟子の疑念――如來常住――長壽品と如來常住――武器を以て法を護れ――一切衆生悉有佛性――一闡提の意義――一闡提と佛性――一闡提に對する正說と邪說――一闡提が善根を生ずるは光明の緣――本能心即如來心は微妙な作用――煩惱心は菩提心たり得る基礎――涅槃經は釋迦一代の結經――眞宗の敎義と涅槃經

第十七　無量壽經……一七九
原字――無量壽經は眞宗の基礎――この經は釋迦出世の本懷――聽者は普賢大士の德に邊ふ――阿彌陀如來本願の本末――信疑の別――信は佛敎一貫の基礎――この經の終りの文句――釋迦如來の義務遂行と彌勒以下吾人の義務――如來の勅命――彌勒の責任――出世本懷經――一切諸佛說法義務經

第十八　結　論……一八七
三部に結歸――釋迦一代說法の結歸は法華、涅槃、無量壽――法華經は原理――涅槃經は原理の說明――無量壽經は實行方法――原理よりも實行――無量壽經は凡夫往生の秘致にして一切法の歸趣――敏速にたゞ彌陀の名號を聞信せよ

附錄　**紙面用著者眞筆『願信如實言』木版彫刻。用紙、最上支那紙。**

目　次　終

佛教の大意

大谷光瑞述

第一　緒論

昨年一月以降――本日の講題――經典の大意と其の結歸に就て――講演の順序――説者と聽者の態度――先づ原理的説明

昨年一月以降　昨年（昭和三年）一月に光壽會の講演を致しまして、それから昨年は例年の通り南洋へ行きまして、それから又ヨーロッパへ行きまして、暫らく光壽會の會員の方々にお會ひすることが出來ませぬ。三月十一日歸つて參りまして、例年の通り本部の講演を、本年は大阪の會場ですることに致しました。今日此の講演を申上げます。

本日の講題　全體此の本部の講演と云ふものは、私の微力な乍らも研究をした所を發表致します

るのであつて、昨年は吾々の信仰して居る所の、往生淨土論の註の講義を致しました。本年は何か書物に就てやらうかと思ひましたが、私の着きましたのが三月十一日でございまして、それからどうも始終用事が多うございます。ゆつくり本に依つて研究をするだけの時間が私の體にありませぬでした。それで此の度は書籍に就て講義をせずに、一般佛教の大意と云ふことに就て、自分の今日迄研究をして居る所を申上げようと思ひます。

經典の大意と其の結歸に就て

元來佛教の原理は往年上海で、光壽會のやはり本部講演として、三日に亘つて申上げましたことゝ大同小異のことではございまするが、今度佛教の大意の方は、先づ原理を申して、それから釋迦世尊一代の說法の中、最も吾々屢々讀誦讃嘆する所の經典に就きまして、其の經典の主なる所の大意を申上げて、さうして一代の說法はいづれに結歸すべきかと云ふ結論を申上げます。之を三日に亘つて申上げようと考へて居ります。

講演の順序

そこで本日は第一に佛教と云ふものはどう云ふものであるか、即ち往年上海で申上げた佛教の原理を、稍々ちゞめたものを申上げようと思ひます。明日、釋迦世尊の說かれた一切經典の中、最も主要なる所のものを選び出して、十一二經に就て申上げようと思ひます。皆申上げようと思ひますと、種類が千もありまするし、迚も三日や四日では申せませぬ。三年かゝつても四年かゝつても申せませぬ。さう云ふゆつくりした時間は言ふ方も有つて居りません。聽く方も有つて居りませぬ。極く簡單にそれが二時間で行けばよいがと思ひますが、まあ一つやつて見ませう。それが明後日に或は四十五分跨るかと思ひます。明日やつた鹽梅で、明後日殘りを申上げて、さうして結論をする、斯う云ふ順でございますから、三日間を左樣御心得を願ひたい。

說者と聽者の態度

第一申上げて置きます。今日だけ聽いて、明日明後日は聽かないと云ふ方は、今歸つて戴く。三日續いて聽いて戴いて、初めて完備した所の講演になるので、半分聽いて終ひを聽かずに置かれたら、ものが間違つて來ます。間違ひを申上げる譯ではありませぬが、半分聽いて歸られたら大變な間違ひが起ります。佛教の方では誤まつたことを信じたものは、正しい法を誹謗するのであると書いてある。三日間續いて聽かず

に途中でやめられると云ふことは、あなた方に此の佛法を謗らせることを、私がさせると云ふことになります。私に責任はございませんが非常に困ります。三日續けて說く者も聽く者も、熱心にならなければ、聽くべき者でも說くべきものでもありません。冗談事ではありませぬ。本氣になつて聽いて戴きたい。

先づ原理的說明

本日は其の原理的說明を申し上げます。此の原理的說明は、光壽會の方々は屢々聽いておいでになる。玆に來て聽いておいでになる御顏を見ましても、私の記憶にあるお顏が大部分であります。これだけの方は一遍や二遍ではございませぬ。何遍も聽いて居られます。聽いて居られる方は又かと言はれませうが、眞理と云ふものは何遍でも同じ事です。今日言つて明日は嘘と云ふやうなことは眞理ではありませぬ。晝夜二十四時間一セコンドも變らないものが眞理でございます。まあさう申しますと、くどいやうでありますが聽いて戴きます。

第二　佛教の本義

佛教の基礎——佛教の本義——佛たるべき方法——方法に二通り——第一義諦——世俗諦——二諦の意義

佛教の基礎

全體、此の佛教と云ふものは、毎度申上げます通り、科學を基礎として居つて、科學の基礎から心の學問卽ち哲學心理學等に亙り、つゞいて世道人心を裨益する形に於て、宗教の形を有つて居る。之は動かぬ所の道理でございます。此の道理によりまして、科學方面にも如何にして佛教の原理があるか。言ひ換れば佛教の原理は、如何にして科學であるか、此の點は屢々申上げて居ります。又今日もこれから申上げます。

佛教の本義

佛教と云ふものは何であるか、ものを知ると云ふことが本義であつて、知ると云ふことは、卽ち智慧と云ふものをそこへ生じて來る。智慧が一切のことの基礎になつて居る。それで知る、知り方がどこまで知るか。悉く知る。其の知り方は、極めて正し

く知る。誤まつて知つたら所謂誤信と云ふことになつて、害を起して益を起さない。正しく知つて、而も知らぬと云ふことは無いことにして置かぬと、「之は如何なことぢや。」「一向心得ませぬ。」これぢや役に立ちませぬ。何んでも心得て居らなければならぬ。

佛たるべき方法

そこで佛教と云ふのは佛の教であると同時に、佛たるべき方法を教へたものである。佛と云ふものは何であるか。ものを知つた所の人である。ものを知つた所の人になり得る所の教だ。斯う云ふことになります。

方法に二通り

大別を致しますると、ものを知るに就ては、ものゝ起つて來る所の原因、及び其のものゝ相と云ふものを、知らなければ可けませぬ。此の知り方に二通りある。之は毎度申上げましたが、又茲へ一つ書きませう。

第一義諦　Paramārtha Satya　最勝義諦　第一義諦

世俗諦　Saṁvṛiti Satya　世俗諦

二諦の意義

パラマールトハとサムヴリテイと云ふ、此の二つの説明で一切のものを現す。此のパラマールトハと云ふことの字義を申します。之は Paraṁa と artha の二つが重なつて、出來て居るのでありまして、パラマは最も勝れた、アルトハは義理、そこで之が一番高い所の道理である、一番上等の解釋の仕方と云ふことです。次にサムヴリテイと云ふ字は、common と云ふ義を有つて居ります。世俗通俗と云ふ字であります。だからサムヴリテイ、サトヤは通俗な道理である。そこでパラマールトハは極めて高級な所の道理であり、サムヴリテイ、サトヤは低級な所の道理である、斯う云ふことでございます。

第三　佛教の原理

(1)　世俗諦

先づ低級から——因縁果——因縁果は世諦の基礎——歐洲學者と佛教——因縁果の關係——籾の例——原因のみにては果を結ばず——縁の作用——原因なして結果たらしむものは縁——化學上から見た縁の作用——カタライザー——因縁所生は生滅の原則——生滅は空なる狀態——智愚の別——凡てのものには常態なし——空は變

化狀態――人間と空氣――人間と牛――新陳代謝は生滅の原則に從ふ

先づ低級から

そこで今度は、どちらから先に言ふべきであるかと云ふことになりますれば、物と云ふものは、やはり漸を以て進んで行かなければならぬ。最初から難しいことを言つては可かぬ。先づ學問をするには、小學中學大學と云ふ風に、やはり低級から高級に移つて行くのが、もの〻順序でございますから、そこで私は今日サムヴリテイ、サトヤの方から先に申します。

因緣果

此のサムヴリテイ、サトヤと云ふものは、どう云ふ工合の組織に總てのものを見るか、

Hetu　因
Pratyaya　緣
Phara　果

因緣果は世諦の基礎

凡てのもは、ヘツと云ふ種になるもの、それからプラトヤヤと名附ける、ヘツを助成する所の緣になるもの、それによつて、パハラと云ふ結果を結んで來る。

と云ふのは、木の實とか何とか云ふ字でございます。果實と譯して居るのもございます。果と云ふのは果物と云ふことです。此のヘツにプラトヤヤと云ふものが、引つ附かんとパハラは起らぬ。これがサムヴリテイ、サトヤの、基礎たる議論であります。此の議論は今申上げる通り、佛教と云ふものはサイエンスである、科學であると私は申します。一切の科學皆これでなければものは出來て來ませぬ。あなた方は農學の講義を御聽きにならうが、化學の講義を御聽きにならうが、或は又エンジニヤーの講義を御聽きにならうが、原因なくて結果が出ると云ふことは、誰もえう言ひませぬ。

歐洲學者と佛教

所がヨーロツパの學者は、此のプラトヤヤと云ふものに就きまして、科學者の一部分は知つて居ります。けれども一般ヨーロツパの學問では、プラトヤヤは言つて居りませぬ。所が佛教のサムヴリテイ、サトヤを說く時は、ヘツよりは寧ろプラトヤヤを言つて居ります。之が佛教の特徵で、ヨーロツパの學問よりも世諦たりとも、進步して居ると云ふ所以は玆にあります。

因緣果の關係

どう云ふ譯で、之がさう云ふ作用（はたらき）があるか。此のヘツの意味は、本來さう云ふ性質を有つて居ると云ふこと。所が本來其の性質を有つて居るものも、プラトヤヤの作用

を持たないと、どうしてもパハラ、實を結んで來ない。何故か。

粃の例

ヘッの時には、一例を擧げますれば、稻の粃のやうなもの。あなた方日本の方は、皆米を食うて居られる以上は、米と云ふものは、如何にして出來るか。私が申上げる迄もなく御存知の筈。此の種がどうして出來るか。成程種と云ふものは、吾々の食べる所の果實と同じ恰好をして居ります。皮が着いて居るか着いて居らぬかの違ひ。皮が着いて居ると、シヤガ〳〵して食べるのに工合が惡いからむいただけです。

原因のみにては果を結ばず

さうすると、其の種が食べる時の如く玆に置いてある。之が米になりますか。なりませぬ。若しもそれで米がそこへ出來るならば、米を作る水田は要らぬ。大阪の澤山の米屋さんには、皆稻が出來ねばならぬ。まだ昔から米屋さんの庫に、稻が生えたと云ふことを、聞いたことがございませぬ。どうして生える。土の中へ入れませんと可けませぬ。土の中へ入れると、どう云ふ作用があるか。なか〳〵入れただけのことでは可けませぬ。そこへ持つて行つて、色んなことをやらなければならぬ。水をかけてやらなければならぬ。或る時には水をぬいて、干してやらなければならぬ。或る時には又それに肥しと云ふものをやらなければならぬ。土にたゞ入れて置いては可かぬ。土を柔かにしてやらなければならぬ。色々なことをしてやらなければならぬ。そいつをやらずに置くと米の取れ高が少い。少いから地主と小作と喧嘩して、小作爭議となる。米が澤山取れて御覽なさい、爭議なんかありやしませぬ。兩方腹鼓を打つて喜びます。どつちが惡いか知りませんが、喧嘩して居ることは事實。そこでなか〳〵以て、粃が稻になり米になると云ふ譯に行きませぬ。そこが此のプラトヤヤの業(わざ)です。ヘッの因だけのもので、パハラの果が結ぶものならば、何の必要あつて田地と云ふものが要りますか。いつでも米屋の倉庫だけでよい譯です。さうはいかぬ。

緣の作用

種を土の中へ入れますと、シューツとした草になつて、二千程に數が增えますが、何が其の働きをするかと云ふと、プラトヤヤが働きをして居る。どう働くか、其の働き工合によつて、其の手傳ひが這入つて居る時と、這入つて居らぬ時と二つある。太陽の光線の如きものは、之は這入つて居るとも謂へ、這入つて居らぬとも謂える。空氣の如きも、這入つて居ると見れば這入つて居る、這入つて居らぬと見れば這入つて

原因をして結果たらしむものは緣

居らぬ。どつちでも見方がありますから、マア稍々これは曖昧なものです。けれども人間が田を耕して、勞力を加へて、籾から稻になり米になつた、人間の勞力は這入つて居りませぬ。それからこれを雀が食ひに來る。鳴子をガチヤ〳〵とやつて追ひます。それも米の中には這入つて居りませぬ。米を倉へ入れて鼠を追ひまはす。這入つて居るか。居りませぬ。向ふは初めから日傭賃なしに、只で勉强して二十四時間食ひ續ける。人間は日傭賃を出して、番をして居るが迚もかなはぬ。それが籾から米に變る時に、這入つて居るか、這入つて居りませぬ。籾から米に變る手傳ひはやりません。雀や鼠が食ふから番をやつて居る。上海あたりの人間は、お互ひに鼠をやつて居る。お互ひに番をしながら御互ひに盜人に行きます。

それが皆プラトヤヤの働きです。さう云ふ色々の手傳ひが、這入らなければならぬ。そこで初めて結果を結んで來れば、ちやんともとの米の二千倍に增えて來る。增えるべき要素は土、太陽の光線、水、數へて來ますと、色々のことがありますけれども、それらに手傳はせるやうにせねば、米は出來ませぬ。そこに助緣と云ふ字が使つてあります。助緣がなければそれはよく出來ない。

化學上から見た緣の作用

之をもう一つサイエンスで、はつきり申上げます。油と云ふものは、恐らく會員の方は御存知に違ひない。油も色々ありますが、私の申上げるのは、植物の種をしめつけて出て來る油、落花生、胡麻、大豆、菜種の如き皆さうでございます。あの油を今度石鹼のやうな——石鹼とは違ひますけれども——形をして居る固いものに拵えます。あのドロッとした液體の油を、固いものに拵えようと思ひますときには、水素を中に入れます。さうしますと、油は質を變化して、固い蠟見たやうなものになつて來ます。所が油の中に、水素はなか〳〵以て普通では這入りませぬ。ニッケルの粉を入れますと、水素を引入れて固まります。其の時にニッケルの粉が、蠟のやうなもの〻中に、這入つて居るかと云ふと、分解して見ますと、這入つて居らない。さうするとニッケルの粉は、何かと云ふと、水素を液體の油に結びつける所の、手傳ひをして呉れたもの、ニッケルは這入つては居らぬけれども、ニッケルが手傳をしませぬと、液體の油が固體にはならない。其の時のニッケルの粉が、プラトヤヤをやつて居る。

カタライザー

之を今サイエンスの方で、カタライザーと言つて居ります。此のカタライザーの作用は、化學ではなか〳〵大切なもので、中に這入つては居りませぬけれども、手傳ひをして呉れます。子供が學問するにも、親が飯を食はせて、學資金と云ふものを出して、カタライザーになつて呉れる。親は甚だ迷惑だけれども、我が生んだ子だから、學資でも出してやらうと云ふことになる。物質ばかりでありませぬ。何事でもカタライザー、プラトヤヤが手傳つて呉れなければ、決して結果は出て來ない。之が世諦の形でございます。世諦と云ふものは、さう云ふものでございます。

因緣所生は生滅の原則

所が此の因より緣の手傳ひで、果を出すものは、必ず生滅をするものである。これが原則、即ち因と緣とによつて、果と云ふものが出來たならば、其の果と云ふものは、永久に在るべきもので無い。必ず滅して行くものだ。之が生滅の原則に從つて居る。

生滅は空なる狀態

それと同時に、今度は必ず其のものは空なるもの Sûnyatâ 空なる狀態にあるのである。生滅の原則に合ふものは何故空なる相をして居るか。現に硝子瓶、書物、机乃至玆に三百四五十の人間と云ふものがある。之がどうして空なる相であるか。斯う云ひますと、總ての物體と云ふものは今申上げました、ヘツにプラトヤヤを作用させて出來たものである。さうすれば今度出來たものは、ヘツと恰好を變へて來る。米が籾になり籾が稻になり稻が米になると云ふ等は、まだ恰好を變へて居らない。

智愚の別

それだから愚人は之を同じものだと見る。智者は之を違ふものと見る。之は智愚の相違であつて、見方が變るだけですけれども、どんな愚者でも、どんな賢者でも、空氣が水の恰好になつては、之は變らぬと云ふことは言へぬ。如何なる者でも、空氣が水になり、水を固めたら氷になる、どうも恰好が同じだと云ふ譯に行きませぬ。籾が稻になつて米になつた。籾の時は食えぬ。米の時は食へる。併し同じ恰好をして居る。これはまだよいけれども、空氣が水になつて水が氷になる。智者は變ると云ひ、愚者は同じだと云ふか。愚者は同じだと云ひ、智者は變ると言ひませぬ。智愚の別なく變ると言はなければならぬ。

凡てのものには常態なし

さうすれば空氣と云ふものは、どんなものであつたか。どうしたらそれが水になつたか。冷したら水になる。熱したら空氣になる。もう一つ冷したら氷になると言はね

ばならぬ。さうすると空氣と云ふ氣體の相で、生じて居つたものが、滅して來て、今度は液體の相で生じて來て、さうして今度冷された時には、液體と云ふ相が滅してしまつて、固體と云ふ相が生じて來た。さうして又今度は、固體と云ふ相のものに熱をかければ、復之が固體を失つてもとの液體になり、液體に又熱をかければ、又もとの氣體に戻る。斯樣に凡てのものは、緣に隨つて形を皆變化して來て居る。凡てのものには常態、定まつた形と云ふものは一つも無い。

空は變化狀態

形と云ふものは皆變化しつゝある。それで變化しつゝあると云ふことは、卽ち空なるものだと云ふことになります。實體あるものは變化出來ぬ。實體が無いからどんなにでも變化する。そこで生滅の原則に從ふものは、凡て空なる相のものだ。空と云ひますと、無と解釋を間違へられる。無と云ふことは何にも無いこと。空はさう云ふことではありませぬ。空と云ふことは變化をして實體の無いものだ。であなた方は皆人間である。私も人間である。人間であれば、日本帝國の法律は、人間個人といふものゝ人格を認めて、其の人格に對する權利と義務がある。それに對して國家は保護すると云ふことが法律であります。けれども吾々サイエンスの眼で見れば、人間を認めるか認めぬか甚だ疑問です。

人間と空氣

人間の體を作つて居る所の水素と酸素も、空氣の中にある所の、水素も酸素も同じもの。乃至此テーブルの中にもつて居る所の、水素も酸素も悉く之は同樣である。さうすれば人間の有つて居る所の酸素水素と、それから他の空氣であるとか、或は水であるとか云ふものゝ有つて居るのと、境界が無いとして見れば、どこを以て人間と空氣との際（あひだ）をつけるかと云ふことになる。あなた方皆空氣を吸うて生きて居られる。私も空氣を吸うて生きて居る。さうすると空氣が、口若しくは鼻から肺の中へ這入つて來る。さうして肺の中から出て行きますでせう。出て行かなければ、腹が張つて大きくなつて困ります。物を食べて糞詰りになつては工合が惡い。食べますけれども中で作用を起して居る。其の間にどこに境界がつけられるか。之は境界はつけ得ない。何故つけられないかと云ふと、同じものなるが故につけられない。違うたものならばつけられる筈。椅子を食べたと云ふ人もなければ、コツプを嚙つたと云ふ者も無い。食べるや

うになつて居らぬ。肉體の中に這入ることが出來ない。

人間と牛

生れたてはお母さんの乳を飲んで居るが、少し大きくなると、人間から下つて、牛の乳を飲む。牛の肉を食べる。さうすると詰り牛と同じことだと云ふことになる。よく角が出ぬことです。それだから牛と人間は同じものです。馬鹿言へ牛には角がある。俺には角は無い。角があつたら工合が悪い。帽子を被つてヌーッと出ると仰しやるでせう。あるかも知れんがマア無いとせねばならぬ。其の牛は草を食うて牛になつた。其の牛を人間が食う。結局考へて見れば、牛も人間も同じことであり、牛も空氣も同じことである。私は斯くの如く考へて居る。人間と云ふものゝ出て來るには、人間を作るべき因があり、之に實に複雜な緣の手傳ひがある。ニツケルが水素を通じて、油の固りを作るやうな、簡單なものではありませぬ。此の果が直ぐ緣になつて、また直ぐ果を結んで來る。一寸あゝ云ふ樣な簡單な譯に行きませぬ。

新陳代謝は生滅の原則に從ふ

けれども兎に角生滅の原則に從つて居る。其の一番大きな生滅は、生れて日本帝國臣民の籍に這入つて、死んで除籍される。それからさきは閻魔大王の所へ行つて、地獄へ墮ちるか極樂へ行けるか判らぬ。極樂へ行ける者は餘り居らぬらしい。兎に角日本帝國の臣民の籍に這入つて、少し長う生きた者は、御大典で大分御褒美を頂戴したが、其の生きて居る間もよく考へて見ると、一セコンドの間に、何遍も生れて死んで居るのである。そんな馬鹿なことがあるものか、生きて居る證據には、今日出て來たと仰しやるかも知らぬが、總て人間の肉體の新陳代謝と云ふものは、生滅の原則に從つて居るのでは無いか。生滅の原則に從はなければ、食べた物は皆んな腹の中にしやちこばつて居る筈。所がしやちこばつて居らぬ。消化する。消えて化けると云ふ。昔の人は學問があつて、「消えて化ける。」なか〳〵うまい事を言つて居ります。成程消えて骨にもなれば血にもなります。色々のものに變つて居る。一セコンドの間、又それを何分かした間に、ちやんと生滅の原則が行はれて居る。すべての物は、空なる狀態にあると云ふことは、これで分りましたでせう。

（2）世俗諦から第一義諦へ

低級と高級との聯絡は如何——先づ凡ての存在を否定せよ——物體は單に集緣結合

のもの――元素――元素まで割れば凡て皆同じ――元素も未だ執着あり――アトム――原子――元素の根底破壞と原子量――物體は變化の順序原子のみ不變化――原子も生滅の原則に從ふ――プロトンとエレクトロン――原子はプロトンとエレクトロンの結合物――水素原子、ヘリウム、トリウム、ウラニウム――プロトンとエレクトロンは如何――ラジエイション――プロトン・エレクトロンは極微塵にして空中に遍滿す――凡てのものは因緣所生にして空なる狀態――生滅の原則と今日の物理學――世俗諦と今日の科學

低級と高級との聯絡は如何

約一時間因緣法を說きましたから、少しこれからパラマールトハの方に、コースを變へます。此の生滅の原則に從つて、空なるものであると云ふことが、如何にしてパラマールトハの高級なる原理に一致するか。低級と云ふことは、不完全と云ふことを言ふので、非眞理と云ふことは言はない。やはり眞理は眞理だが、其の眞理の說き明し方が低級である。小學校で言ふ所の加減乘除も、高等學校の微分積分の加減乘除も、共に眞理であるが、玆に高級と低級の差がある。パラマールトハは第一等の說であるけれども、第一等の說に至る階梯に、サムヴリテイ、サトヤの世俗諦がある。嘘は言はぬ。そこに聯絡進步と云ふものがなければならぬ。これからずつとそこへ引つぱつて行きます。

先づ凡ての存在を否定せよ

之を引つ張つて行きますに就て、先づ第一に總ての物體を、打壞して申上げぬと可けませぬ。之が壞れないから、自分は人間であると云ふことを考へるのは、日本帝國臣民として御考へになるのは當然と思ひます。けれども佛教と名づける學問の時には、さう云ふものゝ存在を、先づ認めぬやうにしなければならぬ。別段佛教には、戸籍法も民法もありませぬから、認めぬでも差支へない。又認めては過ちが出ます。さう云ふものはありやしませぬ。

物體は單に集緣結合のもの

斯う云ふものは、或る種々のものゝ緣に因つて、結合したに過ぎない。どう結合した。それは先程申した。生れた時からお母さんの乳を飲んで大きくなつて、等級が下つて、牛の乳を飲み、物を食ふ。之も碌なものは食ひませぬ。牛や雞や自分より粗末なものばかりです。自分より上等な空氣、霞と云ふやうなものを、昔の仙人は食うてゐる。大方胃が惡かつたのでせう。吾々胃が丈夫だから益々粗末な物を食う。何を食

うても構ひませぬ。さう云ふものを食うて出來た此の體。之を今ヨーロッパの學者は元素と云ふものに割つて居ります。

元素

元素と云ふものは、これは極めて曖昧模稜たるものだけれども、先づしばらく元素と云ふものに割つて居ります。酸素とか水素とか炭素とか、よいころ加減の名を附けて居りますが、名が長いのでO、H、C、Nと云ふ字を書いて、それを符牒にして居る。どうもさう云ふものがあるらしい。あると云ふことは申上げられませぬ。所が其のあるらしいものを、一般のものは、うか〳〵して、人間と云ふものゝ存在を認めたり、テーブルの存在を認めたりするのです。

元素まで割れば凡て皆同じ

元來さき申しました酸素とか炭素とか、OとかCとか云ふものは、コップにも人間の體にも建築物にもある。其の證據には火を點ければ燃えます。さうすると其の限界はどこか。限界はありやしませぬ。無いと云ふと今度どう云ふ事になるかと云ふと、元素だ〳〵と云へば、人間も空氣も建築物もテーブルも同じだ。斯う云ふ事になる。空氣の中にある所の酸素が、人間の體の中へ這入つて居る酸素と、喧嘩をしたと云ふことを私は聞いた事はありませぬ。又水の中へ來て、「どうも俺は空氣の恰好をして居る、こんなドロッとしたもので無い。」と云つて喧嘩したこともありませぬ。之が水素が二つと酸素が一つとよりますと、H_2O水と云ふ恰好になります。それで考へて見ますと、元素迄割つてしまひましたら皆同じものです。

元素も未だ執着あり

それではまだ可かぬ。それではまだ元素と云ふものに吾々が執着を起す。成程之は酸素だと云ふことに執着を起す。茲に誤りが出て來る。成程水はH_2Oであると云ふことになつたけれども、Hと云ふものと、Oと云ふものゝ存在を認めなければ、水と云ふものゝ存在は出て來ない。人間の體をさう云ふ元素迄壞しても、それだけでは可かぬ。其の元素は何から出て來たか、考へて見ると、之も生滅の原則に從はなければならぬ。炭素はどう云ふ因により緣によつて出來たか、酸素はどう云ふ因により緣によつて出來たか、考へなければならぬ。

アトム

さうして考へて來ると、最近の學者は、之はアトムと云ふものゝ寄合だと云ふことを言ひ出した。大分元素より學問が進んで、アトムと云ふものを認めて居ります。此の

アトムと云ふものは、細かい塵のやうな微塵です。サイエンスのやうな試驗法によつて、認めて居るかどうか分りませんが、印度では昔から極く小さいものを認めて居りました。アトムに當るサンスクリットの原字は、Paramánu でありまして、支那で極微塵と譯して居ります。アトムは之を今日本の學者は、原子と譯して居ります。此の原子と云ふものは、どの元素にも這入つて居ります。どの元素にも原子が這入つて居つて、其の原子の結合の仕工合分量によつて、元素の形が皆變つて來ます。之はあなた方御存知の如くであります。

原子

元素の根底破壞と原子量

さうすると元素と云ふものゝ寄合であつたと云ふことが、今度は根本から壞されて來て、凡てのものは原子によつて出來たものだと云ふことになつた。之はもうひどい。愈々人間と空氣の種類分けが出來ない位では無い。人間や空氣の中にある、酸素や水素の種類分けも出來ぬやうになつて、いづれも原子だ。私も此の金屬の時計も同じものだと云はねばならぬ。乃至此の硝子も、同じものだと云ふことになる。之を作つて居る元素には、どれだけの原子量があるか、此のニツケルの側にはどれだけあるか、人間の體を作つて居る水素の原子量は幾らと云ふ風に、其の分量と結合の仕工合によつて、元素が變つて來た。

物體は變化の順序原子のみ不變化

さうして人間、テーブル、空氣、家となつた。凡てのものが、生滅の原則によつて、變化をする。其の變化の順序として、恰好を色々に變へた。斯う云ふことになります。それだから固より人間と云ふものも認めて居らなければ、空氣と云ふものも認めて居らぬ。何にも認めない。たゞアトムと名附ける原子を認めるだけだ。

原子も生滅の原則に從ふ

所が又原子と云ふものを今度分解して、此の原子は何によつて出來た。やはり原子と云ふものゝある以上は、生滅の原則に從はなければならぬ。生滅の原則に從へば、因と謂ひ緣と云ふものに從つて、果と云ふものを結ばなければならぬ。

原子はプロトンとエレクトロンの結合物

アトムは何の因、何の緣によつて生じて來たか。さうするとアトムと云ふものは、今日解つて居る所では、プロトンと云ふ陽電子と、其の陽電子を中心として、エレクトロンと名ける陰電子が、それを廻つて居るものだ。斯う云ふことを二十年と經たぬ、十四五年前に見附けて來た。之になつて大分話が分つて來た。さうすればプロトンと名け

る陽電氣を帶びて居る所の微塵のものと、それを廻つて居るエレクトロンと名ける陰電性を帶びて居る極微塵のものと、其の二つの極微塵のもの〻結付き合うたものである。而も其の結付き工合は、プロトンと名付ける陽電子を中心として、エレクトロンと名付ける陰電子が、一つの軌道を畫いて廻つて居る。と云ふことを、近頃になつて漸く學者が見付けた。異論もあるやうですが、大體其の議論が、世界を支配して居る。先づ私共はさう信じて居ります。けれども他日、私は此の說は誤りであると、申上げるかも知れませぬ。私よりも少し學問のある人が、一生懸命考へて居りますから、受賣さへ皆さんの前でやれば私の役は濟む。さうしますと、今度は陽核を中心にして、陰電子がそれを廻つて居る。それが原子の中に幾個か寄つて居る。

水素原子、ヘリウム、トリウム、ウラニウム

水素原子は一番小さいから、一箇のプロトンと一箇のエレクトロン、乃至ヘリウム、トリウムと段々大きくなつて、ウラニウムになると、九十二の原子量を有つて居る。けれども矢張りプロトンを中心に、エレクトロンが廻つて居ると云ふことは狂つて居らぬ。

プロトンとエレクトロンは如何

プロトンとエレクトロンは、どうして出來て居るか。これになると今日の學者は、甚だ淺學にして、其の以上は追究して居りませぬ。それは今の學者が淺學なんで、永遠に分らんのではございませぬ。現に元素から原子を見附け、原子から陽電子陰電子を見出したのですから、これだけ學問があつたなら、今度プロトンは何によつて出來たか、エレクトロンは何によつて出來たか、時間さへあれば分る筈だと思つて居ります。今豫言は出來ませぬ。之が分つて來ると、又何年さきかに受賣だけは申上げます。それでも矢張り陽電子に對して、陰電子が廻つて居ると云ふ因緣所生の方則に從つて、凡てのものを作り出して居る。矢張り因所緣生の原則通りやつて來て居る。

ラジエイション

そこでラジエイション、無線電波、あなた方が、毎晩大阪の放送を聽いて居られますからよく分りますが、あの放射はどう云ふ譯で出て來るか。放射機能と名けるものは、陽核を中心に陰電子が廻つて居る。其の陰電子が或る急激なる振動に會うて、自分の有つて居る所の軌道から離れて出る。又離れて出たものがもとに戻る。洵に極微塵ですから澤山ある。澤山あるものが離れて、此方のが向ふに這入り、向ふのが此方に這入

る。又一旦出たものが、もとの自分の軌道へ這入ると云ふやうに、兎に角其の運動々作が、整然たる軌道通り行かない時に、ラジエイションを起す。其の働きが大きくなれば、凡ての動作の基礎にもなつて參ります。

プロトン、エレクトロンは極微塵にして遍滿空中にす

それでは今言つたプロトン、エレクトロンは、どんなものかと云ひますと、大きさは口に言ふことの出來ない小さいもの、何でも一ミリメートルのマイナス八乘でしたか、顯微鏡でも見られぬ小さいものです。どこにあると云へば、空氣中に遍滿して居ります。此の空氣は極微塵で一杯詰つて居る。少しの隙合もありません。

凡てのものは因緣所生にして空なる狀態

そこで一物として因緣所生でないものは無く、又一物としてそれが空なる狀態で無いものは無いと云ふことは、これで分らなくてはならぬ。これで分らなければ、私の言ひ樣も惡いのですけれども、分らぬ人の頭も惡い。

生滅の原則と今日の物理學

さうすれば生滅の原則は、今日物理學の一番究極して居る程度の、陽電子に起因する所まで原則通り行つて居る。此の原則通り働いて居りますことを、私は信用して居ります。

世俗諦と今日の科學

此の原則は佛教の原則に合うて居ります。そこまで今のサイエンスで分つて居る。此のサムヴリテイ、サトヤの程度の大分高い所まで、今の科學者は持つて行つて呉れました。此の先きまだ持つて行きませう。サムヴリテイ、サトヤは完全に現在の科學で分るものですから持つて行つて呉れませう。此の先は、今の所ではまだ淺學だから分りませんが、もう二百年もしたら分りませう。

（3）第一義諦

第一義諦は一切を認めず——維摩と文殊の問答——默するに然かず——第一義諦は言語を超越す——第一義諦は不生不滅非因非緣非果——變化と不變化——空と非空——第一義諦の空と世諦の空——差別的觀念は低級——本來自體相無し——エレクトロンを認めるは世諦の範圍——第一義諦は凡て空なる相——第一義諦と世俗諦の作用は如何——吾人の視力はラヂオの受話器よりも下等——電波はプロトンとエレクトロンの衝擊——人間の受話器と科學の定規——原理は科學の定規によられば虛——世俗諦の究極も第一義諦も本來無性

第一義諦は一切を認めず

それから後のパラマールトハの説明を申します。之は私の學力では到達しない。けれども説明だけは極く簡單です。初めから一切を認めぬ。言葉を以て現さうにも言葉と云ふものも無いのである。言ふ人もなければ聽く人も、人も物も何にも無い。總てのものは空なる狀態である。之を知ろうとしても、知ることも出來ませぬ。之は言ふのは一番樂です。もう一つ樂なのは默つて居る事です。

維摩と文殊の問答

昔佛在世の時、ヴイマラキールティ（Vimalakīrtti）と云ふ大變な大金持が、マンジュスリー（Mañjuśrī）と云ふ非常な智慧を有つた大菩薩と談判する。「如何が菩薩不二の法門に入る」菩薩不二の法門とはどう云ふ事か？　と聞いた所が、他の菩薩はゴテ〳〵言つた。マンジュスリーがヴイマラキールティに、それではあなたはどう思ふかと聞いた所が、默するに然かず

ヴイマラキールティ默つて居る。そこで「善い哉善い哉」マンジュスリーがえらい〳〵と言つて感服した。默つて居つて感心されたのは、ヴイマラキールティが初めてです。

私も餘計なことは言はん方がよい。然しあなた方が許さぬから何とか言はねばならぬ。本當は言はぬが一番よい。

第一義諦は言語を超越す

パラマールトハは言語を超越した、決して言ふべきものではありませぬ。ありませんが、其れを言はぬと分らぬ。分らぬからゴチヤ〳〵言ひます。十五分程言ひますが之は嘘です。釋迦如來がちやんと言つて御出です。「色々言ふけれども、之は言語で現せぬものだ。」と終ひに消した。さすが佛となるとうまい事を言ひます。すぽつと消やして居る。私も其の手でやります。

第一義諦は不生不滅非因非緣非果

これになると初めから生滅と云ふことを認めぬ。今度は全然前と反對になつて來る。パラマールトハは不生不滅だと云ふ。不生不滅とはどう云ふ事か。初めから出て來ぬ。出て來ぬから無くならぬ。出て來たものは無くなる。出て來ぬものに無くなると云ふことはありませぬ。因緣によつて果を結ばない。因も無ければ緣もない。非因非緣非果です。非因非緣非果のものだから不生不滅です。

變化と不變化

先程空と云ふことは變化であると言ひました。今度は不變化。變化は無常、之は常。變化するものには常の狀態はありませぬ。モヤ〳〵する時もあり、すうつとのびる時

もある。所が不變化のものは常。之は變らないもの。不變化だから不生不滅。變化だから生滅します。

空と非空

そこで今度は前の空に對して非空かと云ふと、非空と云つて居る時もあります。非空と云つて居る時もありますけれども、此の時の說明は、一寸說明せぬと非空と申上げられませぬ。大體パラマールトハも空です。「今空と云ふことは、變化すると云ふ說明であつたでは無いか。それに對し不變化であつたら非空では無いか。」と仰しやる。さうでございます。空の相があると常在して居る。相を持たずに常在して居るから、空なる狀態と云ふより外無い。非空と云へば空に非ずと形を出さねばならぬ。形の無いものが常在して居る。それですからやはり字で書く時には、空と書くより仕方がありませぬ。

第一義諦の空と世諦の空

パラマールトハも空なり、サムヴリティも空なり、たゞサムヴリティ世俗諦の空と云ふものは、變化しつゝ空なる狀態にあるものである。結合の仕工合によつて、變化しつゝある空なる狀態である。吾々の見て居る目に達する形は、目の網膜に達する所の放射の工合が、さう云ふ工合に見せて居るので、本來さう云ふ形のあるものでは無い。陰陽の微粒子電子の結合した恰好だけのものであつて、實體あるものでは無い。そんなら何が實體あるものか？　常なるものは何か？　何にも無いものが常だと云ふことになる。それが、パラマールトハです。

差別的觀念は低級

たとひ如何なるものでも、暫く因と云ふものを認め、緣と云ふものを認め、果と云ふものを認めて來た時には、そこに差別的觀念を有たなければならぬ。因と云ふものと、緣と云ふものゝ差別を認めるが故に、果と云ふものゝ差別を認めて來た。差別的觀念を有てば、佛教では一つの低級なる考へになる。なる程低級でせう。物を別に見たら低級な考へに違ひない。

本來自體相無し

本來は區別の無いものです。凡てのものは、如何なるものでも自體の相、自性相と云ふものは有つて居らない。自分の性質、相と云ふものは有つて居らない。今世俗諦の程度でも、プロトン、エレクトロンの形まで壞してしまつたら、定まつた形は有つて居らぬ。自性の形と云ふものは有つて居りませぬ。人間である、テーブルであると

エレクトロンを認めるは世諦の範圍

第一義諦は凡て空なる相

云ふ本來の形は有つて居りませぬ。元素にしアトムにしエレクトロンにしたら、もう形を見ることは出來ない。エレクトロンになりますと、一ミリメートルのマイナスの八乘、顯微鏡で見ることだも出來ない。人間の網膜には、光線が到達して來ない迄細かいものになる。

尙ほそれを認めると、そこに若干の緣を認め、それに特殊の衝動を與へると云ふと、放射能を出して來る。それだけのことをやはり認めなければならぬ。のみならず、陽電子に對して、それを廻つて居る陰電子を認めなければならぬ。これだけ見ると、サムヴリテイ(世諦)の範圍であつて、パラマールトハ(第一義諦)の範圍に這入らない。第一義諦はそれすら認めない。何んとなれば形なきものであるからです。恐らく之は無始無終、無窮にものを壞し〳〵して行つても、やはり窮極する所は無いと信じて居ります。それはプロトンもエレクトロンも壞しませう。二百年、五百年、まだ〳〵幾ら行つても、とう〳〵地球の碎けて行く所迄行つても、極まりは無い筈です。割つて〳〵割りつめるだけのことです。第一義諦と云ふものは、總て空なる相のものであります。極めて簡單明瞭に說明がつく。さうすると結びつき工合は、今申しました極微塵まで、現在の科學が碎いて呉れる。之は無窮に碎いて行くでせう。幾ら碎いて行つても、やはり變化し、因と緣が結んで居る。此の原則を碎いて行くことは出來ぬ。此の原則に違うたことを言つたら間違ひであるから、之を終ひ迄繰返して居る。段々小さくなるだけのことです。

第一義諦と世諦の作用は如何

そこで第一義諦と世俗諦、パラマールトハとサムヴリテイの關係は分つた。關係は分つたが、それが如何なる作用をし、如何なる工合になつて來るか。科學上の說明も及ばず無い。言ふことも言ふ事柄も無い。低級ならば科學位で碎いて說明が出來る。さうすればどう云ふことになつて來るか。

吾人の視力はラヂオの受話器よりも下等

吾々の目と云ふものは誠に不完全なもので、抑も形を見る所の力が洵に薄弱である。總て目に見るものは、形と色と光である。誰の目でもさうです。それが見えぬのは盲目でせう。目の恰好をして居つて、見えぬ明盲目もあります。ちよつと惡いと云つては眼鏡をかける。硝子の手傳をして貰ふだけで、見え工合はやはり同じことです。所

が目と申しますものは洵に不調法で、あなた方毎晩やつて居られる、ラヂオの受話器よりも下等で分らぬ。ラヂオの波さへえう受けませぬ。

全體光と云ふものは電氣の波でございます。電波でございます。昔は光と電波は別のやうに考へて居つた。それは淺學な爲めで、最近の學者は、電波と云ふものも、光波と云ふものも、性質の同じ波だと言ふ。波と云ふと甚だ分りにくいですけれども、圖の如く、

電波はプロトンとエレクトロンの衝擊

斯う云ふ工合に波動を作つて、向ふへ持つて行くものです。それが先程申上げました、プロトンを中心として居るエレクトロンに、特別の衝擊を與へると、軌道を離れて飛ぶ。飛んだものが引つ着く。それが放射、ラジエイションだと申上げました。其のラジエイションに外ならぬ。此のラジエイションが、近い所に飛びます時には、低速度になりますから、波が長くなつて低周波になります。低周波が起つて來ますと、極めて長波、何萬米になります。それが遠く高速度で飛びますと、波が短波になつて、高周波になります。それで吾々の目で見て居りますのは、短波では紫の光線で、それからさきは網膜が惡いから分りませぬ。それからさきに、ウルトラヴイオレツト紫外線と云つて、やかましい療養に使ひますものがあります。私も此の齒の療治の時に、玆の支部長中山さんの所で、齒科をやつて居られますので、其所で療治して貰ひました。洵によろしうございます。あれはやはり短波から出た光線であります。もう一つ短くなると、エツキス光線です。まだそれより短いのがあります。段々短くなつて、ガムマー線になると餘程短い。近頃もつと短いものを見附けた樣であります。之は他方國土から來た光明で、極く短波でございます。それから長波の方も、洵に長いものを見附けて居ります。それに遇ふと、人間の體でも動物でも、骨迄グニヤ〳〵になる光線だ相です。洵に物騷な光線です。

人間の受話器と科學の定規

そんなものは、皆人間の眼の網膜に達せぬ。受話器よりも極く幅が狹い。こゝらの放送局では、どの位のを使つて居るか、私は知りませぬ。知りませぬけれども、多分赤い線の外、インフラレツドの外位を使つて居りませう。之は聞いて見ねば分りませ

原理は科學の定規によられば嘘

ぬ。私の家にはラヂオがありませんから分りませぬ。それはどうでも構ひませぬ。餘計目に見えぬ所があると云ふことを、あなた方が覺えて居られゝばよいのです。それ位のものしか吾々は感じて居りませぬ。さうして斯う云ふ恰好だ、斯う云ふ色だと思つて居る。全體さう云ふものはありやしませぬ。波の工合でさう云ふ風になつただけです。人間の目が受ける所の受話器が、粗末なために、これだけより見て居らぬ。洵に人間と云ふものは下等なもので、道具が粗末に出來て居る。外の機械から見ると、洵に出來が悪い。其の道具で受けて、考へを定めて居るものに、うまい事行く筈はございませぬ。悉く嘘です。私がいつもサイエンスの定規に、はめて行かなければ、嘘だと云ふのはそれです。

いつも云ふ例ですが、「今日は寒うございます。」「暑うございます。」と暖寒の挨拶をする。所が寒い暑いは、銘々の體で皆違ふ。本當のことは、「寒暖計を出して何度でございます。」これなら本當に違ひない。「お暑うございます。」「お寒うございます。」と云ふのは、比較のことで、私見たやうな體には、寒さは一向こたへませぬ。肺病の人が

世俗諦の究極も第一義諦も本來無性

寒い〳〵と云つて、綿入を着て居る時に、私は單衣物を着て汗をふいて居る。それですから斯う云ふ原則と云ふものは、哲學的説明をしますと誤りが起る。人間の心を基礎とした學問では、どうしても説明が出來ませぬ。定規が間違つて居るから、原則を説明する時には、私は決して哲學的説明は致しませぬ。之は嘘でございまして、人間の網膜には、こんなものしか見えませぬ。科學の範圍は、ずうつと廣いですから、極く長い電波を受けます。

それで説明して見た所で、同じものだと云ふ事が結論です。「凡てのものは何にも變りは無いものだ。そも〳〵生滅ありと思つて居るのは、吾々が間違つて居るのだ。」斯う云ふことが言ひ得る。初めから生じても居らなければ、滅しても居らぬ。プロトンを中心に、エレクトロンが廻つて居ると思へば、暫く放射を起した時には、違つた運動を起して居る。けれども本來其の性が變つたものでは無い。況んやそれの放射さへ、何だと云ふことは、機械にかけて見なければ分らぬ。吾々に見えて居る光線より後とのものは見えませぬ。こんなものは人間だ、じつとして居るものは机だ、と云ふ風に、

何にも無い所へ勝手に筋を引いて、人間だ机だと思つて居る。ですから今中上げる本來不變化、常と云ふことは、サムヴリテイ、サトヤの究極するものでも解釋が出來る。況んや一歩超えたパラマールトハには間違ひありません。

第四　佛教と人生

（1）迷と悟

佛教は一切を正しく知る法――お經は虚妄人心を改へる寒暖計――迷悟の主體を知るには世俗諦――世俗諦から見た迷悟――世俗諦は迷悟を概別す――第一義諦から見た迷悟――第一義諦は物質も精神も認めず――精神の存在せざる證據――人體精神は單に其の結合期間――第一義諦は迷悟の區別を立てず

佛教は一切を正しく知る法

お經は虚妄人心を改へる寒暖計

さうすると、「佛教と云ふものは、それだけのことを言つたものか？」と云ふ疑ひが出て參ります。「佛教と云ふものは、それだけのことを言つたのか？　それぢや今迄聞いて居つたのと違ふぢや無いか？」斯う仰せられる方があるかも知りませぬ。處が違つて居りませぬ。佛教と云ふものは、それだけしか言はぬものです。言はぬものですが、人間の心は一般に出放題な基礎を有つて居るもので、物を見る幅が極く僅かなもので、長波の短いものと、短波の長いものが、極く僅かしか人間の目に見えぬのです。そこで誤りが出る。其の誤りを正さぬと工合が惡い。先程申上げました、佛教と云ふものは物を知る學問である。一切のものを悉く知り盡す學問であるから、誤つて知つたのでは知り盡したので無い。誤らざるやうにせねばならぬ。それで色々あの澤山のことを言はれたのは、凡て誤りを正す方法を言つたものである。こんなことをすれば誤りを正す。あんなことをすれば誤りを正す。と云ふことを言つたものです。私は明日から釋迦世尊一代の說法の中、主なる經典に就て、極く簡單に言ふ積りでありますが、誤りを正す色々な方法が、或は三角と云ひ、四角と云ひ、或は圓いと云ひ、色々書いてある。何んとか經と云ふ長いものが出て來るのは皆それです。

何れにしましても、人間の心の誤りを改へる方法は、「お暑うございます。」「お寒うございます。」と云ふより、寒暖計をすつと差し付けると、馬鹿な者が何とも言へぬや

うになつて居るのがお經です。御經は暑い寒いの寒暖計だと思つたらよろしうございます。

そこで、「寒暖計を差しつけられた所で、其の結果はどうなるか？」斯う云ひますと、「迷と云ふことがあるから、誤りと云ふことがあるのだ。」となる。それでは、「迷ひ誤りとはどんなものか。」と云ふことが起つて來る。今迄物質の説明を申上げましたが、之は喩ではございませぬ。物質に精神も皆入れて説明致しました。今度は物質、精神は精神で説明しなければならぬ。物質には誤りが無い。精神には誤りがありますから、其の蠟をたゝき壞す所に世俗諦が要ります。

迷悟の主體を知るには世俗諦

世俗諦から見た迷悟

世俗諦と云ひますと、因緣果の此の原則は變りは無い。

Bodhi　證(悟)

kleça　迷

斯う二つあります。ボヂと云ふものと、クレーシヤと云ふ此の二つは證と迷に分れる。證と云ふのは悟つた所、それで證は又悟とも云ひます。クレーシヤは迷。迷と云ふものと、悟と云ふものとを、世俗諦では認める。迷つて居るのが吾々、悟つて居るのが佛だと云ふことになつて居る。どうもさうらしいやうです。迷つて居るものは吾々だけでない。もつとえらいものも、詰らぬものも此の中に這入る。悟つて居るのは佛だけです。佛を除外して、あとの者は悉く迷つて居る。此の方がどうも大衆的で餘計あるやうです。此の大衆的は、甚だ下等な大衆的で、悟りの方の大衆に這入ればよいが、迷の方の大衆に打ち込まれるのは甚だ困ります。

世俗諦は迷悟を概別す

それで世俗諦では、いつでも證と迷とを認めて居る。「迷と云ふものはどう云ふことが迷であるか？」「無いものを有ると認め、有るものを無いと認める。正しくものを判斷する智慧を有たない。故に迷と云ふ。證はものを正しく判斷する所の、智慧を有つて居るが故に證と云ふ。」斯う云ふやうに分ける。之は世俗諦でございます。今度は世俗諦の方の説明は洵に樂です。さきのサイエンスの方では、第一義諦の説明は樂でございまして何でも無い。今度は世俗諦の説明は洵に樂です。

第一義諦

そこで今度、「第一義諦、パラマールトハの説明で、證、迷と云ふことをどんなに見

から見た迷悟

るのか？」斯う云ひますと、「初めからそんなものは認めぬ。」と云ひます。やはり「證もなければ迷も無いのだ。」と云ふ。所が説明が難しい。今迄の科學はそれでよかつた。これをウンとやつたらあなた方が、迷つて居るものだから承知せぬ。悟つて居りますと工合がよい。けれども此方が迷つて居るから困る。私共誤魔化して居るので本當は分つては居りませぬ。

第一義諦は物質も精神も認めず

吾々が物質と精神とを、認めて居ると云ふことが既に迷である。物質もなければ精神も無い。精神と名附けるものも、畢竟今言ひましたアトム等の寄合であり、結びつき工合で、人間と云ふ形を作つて、斯う云ふ動作を起して居る。精神と名附けるものは、境界極めて曖昧摸稜たるもので、朧月夜よりまだ摸稜な境界であり、霧の角を探すやうなものである。ボーッとして居る。あの霧の境界線を探して御覽なさい。迚も分らぬ。雪が降つた時に厚さは分つて居る。幅は分りませぬ。電信で氣象觀測所へ聞合せると、幅は分ることは分りませう。其の境界は分りませぬ。精神と云ふものは、霧の境界のやうなものです。どこやらもや〳〵してをる。それに迷と云ふ字が附けてあります。

精神の存在せざる證據

吾々の精神に、迷の精神と名附けるやうな、不調法なモヤ〳〵したものゝあらう筈は無い。其の證據に壞して御覽なさい。精神はどこへやら行つてしまひます。人を撲殺すると警察がやかましいから、暫時延期して、飯を食べないと死にます。死んだら日本で一寸試驗をやる譯に行きませぬ。日本の權力法律の範圍外に行きましても、世界中どこの國でも禁じて居ります。人間の住んで居る地球上では、悉く惡いと云ふことになつて居りますから、一寸やれませぬ。あなた方やつては可けませぬ。日本の法律でかたく禁止して居ります。之をたゝき壞す。殺す意思はないから、たゞ分解したらよい。それも餘り分解せんでもよろしい。手と足と首と胴と離したらよろしい。それでは面白くないから、元素に分けてしまつて、斯う云ふ硝子瓶の中へ入れてしまふ。之は窒素、之は酸素、これ位で結構です。アトム迄分ける必要も、エレクトロンまで分ける必要もありませぬ。尤も元素を增すことは、一寸人間わざでは出來ませんから、元素だけで我慢して置きます。元素まで壞して御覽なさい。面白いものになりま

す。働きも何にもせんやうになつて、もう迷はぬやうになります。昔は殺すと幽靈になつて出た。殺し方が惡いと迷ひますが、ドロ〳〵ッと來ましても大した事はありませぬ。此の頃出たら大阪の人は取摑まへて、見せ物に持つて行きなさい。大金儲けになる。それは餘談でありますが、瓶の中へ入れて御覽なさい。迷は致しませぬ。

人體は精神の單に其結合期間

人間の恰好をして、結付きますと精神になる。母の胎内を出て、人間の恰好をして、迷うて、死んで、火葬場の御厄介になつたら無くなる。さうすると結合して居る間、さういふものがあつたと云ふことになる。ですから結合物體と云ふものは、本來空のものであつたし、精神なるものも、やはり霧の限界見たやうなもので、モヤ〳〵したものが、どこかあると思つて居るだけで、實は何もありはしない。それを無いと知つたものが悟りです。

第一義諦は迷悟の區別を立てず

悟りと云ふものと、迷ひと云ふものと、何にもそこに本來區別はありませぬ。「證が即ち迷、迷が即ち證。迷ふが故に迷。悟るが故に證だ。」斯う云ふ事になる。第一義諦から見ました時には、迷もなければ證りもない。「何があるのだ。」「何にも無いものがある。」あり工合が難しい。一切のものは、空なる狀態としてあると云ふ譯です。それは心の方の哲學的說明も、科學的說明も同じことであります。第一義諦の說明の時は、科學的說明はない。さう云ふものゝ存在を認めない。哲學と云ふものは、人間の心から出て來た學問である。科學と云ふものは、物質の學問である。第一義諦は物質と云ふものも認めぬ。精神と云ふものも認めぬ。哲學も科學も認めぬ。認めぬから說明の仕樣が無い。說明の仕樣が無いから、默つて居るより外ありませぬ。

(2) 煩惱卽菩提

迷悟の同じき所以

迷悟の同じき所以—煩惱菩提體無二——見眞大師は佛言に從ふ——佛敎に發明なし—見眞大師は維摩詰所說經による——六十二見一切の煩惱惡不善業これ如來の種—見眞大師にして初めてこの言あり——和讃——本願圓頓一乘——罪障功德の體—煩惱と罪障——菩提と功德——功德の眞義——罪障は如何にして功德の體たるや

それでは今申上げました、證と迷とが何故同じものとなるか。之は結合の仕工合によつて、人間を作つたから斯う云ふ不調法な迷をやる。もう少しよい結合をやるとよ

い智慧を有つて來る。又世俗諦の説明に戻りますが、犬のやうな結合をすると、犬の智慧になる。鼠のやうな結合をすると、鼠の智慧になる。虎は虎、牛は牛、乃至もつと下つて、蚊のやうな結合になると、ブーンと云ふだけの智慧しか出ない。蠅は蠅の智慧しか出ない。あれでも相當智慧を有つて居ります。蚊でも相當智慧を有つて居ります。けれども結合の仕工合が悪いから人間をかむのです。彼奴飛行機で來よるから、ウツカリして居るとやられる。蚊にさゝれるのは此方が悪い。さゝれぬやうに網さへかぶつて居ればよい。網をかぶらずに、蚊にさゝれて、後とからマラリヤにかゝつたりして居る。其の時は人間は蚊より智慧が劣つて居る。けれども本來は人間の方が、智慧が上のやうに、上手に結合してある。ダイヤモンドのやうな結合をすれば堅い。キルクのやうな結合をすれば柔い。

煩惱菩提體無二

迷と云ひ悟と云ふも同じく、煩惱菩提體無二である。それで吾々の信じて居る眞宗の開山見眞大師は、「煩惱菩提體無二スミヤカニトク證ラシム。」と云ふことを言つて居ります。之は私個人の祖先でもありまするし、あなた方の信仰して居られる所の、眞宗の祖師で、此の人の言はれたことは、一言一句吾々は信を置いて居る。絶對信を置いて居る人です。見眞大師のやうな大學者になると、これだけの見識を有つて居る。「迷ひ悟りと云ふ馬鹿なことを言ふものは、低級な智識の者で、迷と云ふものもなければ、悟りと云ふものも無い。煩惱と云ひ、菩提と云ひ、クレーシヤとボヂと、其の實體が二つあるものでは無い。」と、愉快なことを言つた。流石は見眞大師であります。

見眞大師は佛言に從ふ

所が見眞大師と云ふ人は、發明したことは何にも無い。發明と云ふことは洵にえらい事だが、嘘の發明をすると、これ位困つた事はありませぬ。コヽの三越のエレベーターが落ちたと云ふので、えらい騒動であつた。段々調べたら何でも無かつた。全く發明であつた。あゝ云ふ發明は人心を騒がす。流言取締令で、警察に引つ張られ、とう〳〵裁判所で、罰を受けて居る。相場でも悪いものがゴテ〳〵言ふ。あゝ云ふ發明は甚だ困る。所が宗祖見眞大師は、さう云ふ悪發明は致しませぬ。善發明もせぬ人です。「私は悉く佛の教に從つて、佛の言はれた通りに言ふのだ。」と斯う云つて居られ

佛教に發明なし

ます。

全體佛教には、發明と云ふものはございませぬ。佛の言つたことを、鼠が餅の端を嚙るやうに、各宗の祖師が鼠になつて、三百六十度の餅を、あつちこつちから嚙つてゐる。吾々は其の殘りを食べるだけの力が無いから、臭いで居るだけです。各宗の祖師のやうに、食べるだけの力が無いから、自動車で鰻屋の門を通つた位の臭ぎ方をして居ります。

見眞大師は維摩詰所說經による

さうすれば見眞大師は、何によつて、煩惱菩提體無二等と云ふことを言つたか。ビマラキールチ・ニルデーシヤと云ふ御經があります。此の御經は、煩惱菩提體無二と云ふことを、說明して居ります。今日は餘り時間がございませんから、其の經に就ては申しませんが、其の經にはどう云ふことを言つてあるか。それは此の佛の種と云ふものは何か。佛と云ふものは暫く世諦因緣法によつて說けば、迷が悟りになると云ふことでなければならぬ。吾々凡夫の迷つて居るものが、澤山の智慧を得て、所謂アヌツタラサムミヤクサンボヂ（Anuttara-samyak-sambodhi）無上正徧智を得て、佛陀になつた。「さうすれば、佛陀の種と云ふものは何か。」斯う云つて、ビマラキールチが、マンジュスリーに言ひました。マンジュスリーが言ふには、「それは色々種がある。」と、ずうつと種を言つて居ります。それは明日申します。其の最後に、「要を取つて之を言はゞ、六十二見及び一切の煩惱惡不善業、之を如來の種と爲す。」と斯う言つて居る。

六十二見一切の煩惱惡不善業これ如來の種

さうすると如來の種と云ふものは、卽ち煩惱、ありとあらゆる惡不善が、如來の種だ。「惡不善は如來の種になるが、善は如來の種になるにあらず。」とも何とも書いてありませんから、「善惡何でもかんでも皆如來の種だ。」と云ふことになります。けれども「善を種だと云ふと、不善は種では無い。」と思ふから、普通の迷つて居る範圍の者に分るやうに、惡いと思つて居る極端なものをつかまへて、「六十二見一切煩惱惡不善業を、如來の種と爲す。」と言つてある。如來の種は廣いですが、一番崖の端で說明した譯です。さうすると一切煩惱が、如來の種だと云ふことは、間違ひございませぬ。

これから吾々の宗祖見眞大師は、煩惱菩提體無二と云ふ、思ひ切つた議論をやり得

にして初めてこの言あり

たので、決してクリエイト(創造)したのでも、インベント(發明)したのでも無い。發明した譯では無い。發明した譯では無いですけれども、これだけの大膽なことは、パラマールトハに到達せんと言へない。何故言へないか。世俗諦の程度では、ボヂとクレーシヤの別を認める。卽ち人間と云ふものも、犬と云ふものも認める。迷ひと云ふものも認めれば、悟りと云ふものも認める。けれども、パラマールトハになれば、悟りもなければ、迷ひもないばかりでない。本來悟るべき所の法もなければ、悟るべき所の人もない。こゝへ行きますれば、煩惱と云つても、畢竟假設的のことである。菩提と云つても、假設的のことである。「本來何か？」「本來何もさう言へないものだ。」「其の相は何か？」「唯是れ如が其の相だ。」斯う云ふことになります。

和讃

まだ面白いことを、宗祖見眞大師は言つて居ります。和讃と言ひまして、眞宗の人は皆朝夕讀んで居るものでございます。恒惱菩提體無二も、それに出て居ります。

本願圓頓一乘

本願圓頓一乘ハ　逆惡攝ス信知シテ
煩惱菩提體無二ト　スミヤカニトクサトラシム。

罪障功德の體

もう一つは、

罪障功德ノ體トナル　コホリトミズノゴトクニテ
コホリオホキニミヅオホシ　サハリオホキニ德オホシ。

煩惱と罪障

實に愉快なことを言つて居る。罪障と云ふのは罪、障りのことです。クレーシヤなる煩惱――煩惱と云ふ時には、まだ結晶して居らぬ。煩惱が結晶して、形を現して罪障となつて來ます。「あれの物を取つてやらうか。」と心に起つて居る時は煩惱で、取つてやつた時が、盜人、竊盜となる。竊盜したならば罪障となり、警察が引つ張つて行く。「あれの物を取つてやらうか。」と思つて居る間は、警察官には分りませぬ。取ると直ぐ捕まる。煩惱の時には罪にならぬ。

菩提と功德

菩提の方もさうです。菩提の時は、相を有つて居らぬ。菩提が形を現すと功德になる。功德と云ふよいものは吾々には無いやうです。

功德の眞義

けれども日本人は、功德と云ふ字の使ひ方が狹い。功と云ひ、德と云ひ、善い事をし、世を利益する業が、功德であります。みんな自分が貰ふことばかり功德と思ふて

罪障は如何にして功徳の體たるや

ゐる様であるが、人にやるのが大きな功徳であります。日本人の功徳とか、因縁とか云ふ字の使ひ方が、洵に悪いです。大功をたてた人が大徳である。だから大功大徳即ち功徳が、菩提の業であります。

さうすると、罪障が即ち功徳の體となると云ふのは、どう云ふ譯か？「之は氷と水のやうなものだ。氷と云へば水ぢや、水と云へば氷ぢや。」と、うまいことを言つて居ります。「氷多きに水多し。」さうすれば、罪障の多い者は、功徳が多い。其の和讃を聞いて、「なる程見眞大師はえらい。俺は盗人をして、監獄へ行つて、官費で飯を食はう。」それは可かぬ。障多きに徳多しだから、障を多うしてやらうと云ふ考へは可けませぬ。何故かと云ふと、障と云ふものゝ本體もなければ、徳と云ふものゝ本體も無い。比較して議論を立てた場合には、罪障と云ひ、功徳と云ふ文字が、現れて來ます。けれども多しと云ふ字に執着して、これから盗人して、刑務所へ行つて、官費で生活しようと云ふならば、人間と云ふ者を認め、罪を認め、官費の生活と云ふことを認め、刑務所と名附ける家屋を認めた。茲に誤りが起る。横着なものは、さう云ふ不了見を起します。宗祖はさう云ふやうな、馬鹿なことは言ひませぬ。「煩惱菩提體無二、罪障即ちイコール功徳である。罪多きも恐るゝに足らぬ。」と斯う云ふことを言つて居ります。

凡夫の悟を開く方法は如何

（3）信

凡夫の悟を開く方法は如何――執着の有無と罪障と功徳の別――信は一切佛法中最善の法――紙幣の流通は信用にあり――如來如實の言を斯くの如く信ず――百圓を百圓と信ずるのみ――信はよく煩惱即菩提の原理を了悟せしむ――眞宗は信の一念によつて往生極樂の緣を結ぶと說く――信はよく迷をして往生極樂の正因たらしむ

それからもう一つ進んで、「然らば吾々が、悟を開くには、如何にすべきか？」こゝで話が面白くなつて來る。今迄の學理的說明では、一向吾々が、悟を開かせて貰へぬ。吾々悟を開かねば、何にもならぬ。いつまでも凡夫の方は馬鹿で、如來の方は賢いのでは、賢い如來は割がよいが、馬鹿な凡夫は勘定が悪い。何時迄もバカ〳〵金槌の川

執着の有無と罪障と功德の別

流れでは可かぬ。「それを如何にすべきか？」と云ふのに、煩惱菩提體無二と云ふ原則に從へば、「吾々迷だと思つて居るから迷うて居る。悟つたと思ふたら悟りだ。罪障と思ふから罪障になつて居る。功德と思へば功德ぢや。」と斯う云ふ工合になつてきます。

今申す盗人すると云ふ精神は、人の物を我の物にする。それを取つてやらうと云ふ執着心から來て居るから、其れが罪になる。人に物をやると云ふことが、何でよい事か？　それは吾の方の執着心を取つて、向ふに利益を與へるから、非常によいことになるのです。此の間亡くなつた谷口さんは、百萬圓寄附された。兩三年前でしたか、野村德七さんも、百萬圓寄附された。流石富豪として、よい事をせられた。自分が百萬圓持つて居つて、惡いと云ふ者はありませぬ。稅こそ取られるけれど、稅以上取られることはありません。それを公衆に利益を與へる爲に寄附された。之は執着を、若干斷つて居る。吾々は人から物を、取らうと思つて居るのに、これはあげませうと云ふ。玆に執着を斷つて居る、非常によい心得が出て來る。吾々でも物を施すと云ふ精神はある。けれども如何せん、其の貧富の程度が、谷口、野村と云ふやうな富豪と違ふ。百萬圓與へようと思ふけれども、萬を取つて百圓もあやしいものです。それは貧富の程度が違ふのであつて、精神は同一である。昔から、「貧者の一燈長者の萬燈」と云ふが、吾々は萬燈の方に引つかゝつて居りますから、貰ふ方としたら百萬圓の方がよい。けれども其の精神は同じ事です。單に財を施すことばかりに限りませぬ。施すと云ふことは、總て執着を斷つてしまふので、其の心が非常によい事になる。たゞ施すと云つて、金を街に播いて歩いたのでは、何にもならぬ。自動車の尻から、札を落して行つたのでは、何にもならぬ。それが善い方に向つて、吾々に益をするやうなことを、考へなければならぬ。けれども動機は、自分の執着を斷つて、物をやると云ふことにあるのですから、それが非常に功德になる。だから罪障となるも、功德となるも、心の働きは同じことで、此方に物を取るか、こつちから向ふにやるかの違であります。

信は一切佛法中最善の法

そこでどうして斯うなるか？　信と云ふものが、非常に大事なものになつて來る。「信と云ふことは、どう云ふことか？」と云ふと、疑はない、信用をすることであり

ます。此の信と云ふことは、一切佛法に於て、最も善いことである。何故なればどうせ吾々は、完全に分りはしません。分らぬことも無いかも知れぬけれども、それは地球が、二千遍も三千遍も、出來て壞けて、まだまだそれでは駄目です。餘所の國が出來て壞ける。若し無量無邊の天體があれば、其の無量無邊の天體を、經廻らねばならぬ程の時間を要します。僅か五十年や、三十年の短い時間で、物の分る筈はない。さうすれば分つて居ることを、信用するより仕樣が無い。「お前等どうせ分らんのだから、如來如實の言を信ぜよ。」と言はれて居る。

紙幣の流通は信用にあり

あなた方の懷中の中には、皆若干お金を、持つて居られるでせう。野村さんや谷口さん程、あるかどうか知りませんが、あれば札で持つて居られませう。銅貨で持つて居られると重たいから、大低紙幣で持つてゐる。あの札は紙です。銅貨はあれでも、補助貨だから、一錢の値打は無いけれども、三厘や四厘の値打はありませう。札は紙です。昔のロシア、ドイツ、オーストリヤ、ポーランドあたりの札は、只のやうなものであつた。所があゝして一圓と書いてあると、どこの店でも、一圓で通つて居る。外國人は、イヤと言ふかも知らんけれども、日本人はイヤと言ひませぬ。誰一人日本銀行へ行つて、「金準備が幾らある、紙幣の發行高が幾らある。」と云ふことを、調べて來てから、紙幣を使つて居る者はない。玆の中に銀行の方が居られたら、知つて居られるかも知らぬが、それもあやしい。最近金輸出解禁がやかましいから、一寸は調べて居られるかも知らん。大抵はマアよからうと云ふ所である。外國人はよからうと云ひませぬ。それだから四十九弗八分の三であるべきものが、四十四弗半になつて居るのは其の理由です。それは日本人は信じて居る。日本の國內に於ては、「此の一圓紙幣と云ふものは、一圓金貨と換へてやる。」と云ふ。それを信用して居る。「果して換へて呉れるであらうか、どうであらうか？」と疑つた者は、誰もありませぬ。あなた方換へて呉れると皆思つて居る。外國人はさうは行かぬ。四十九弗八分の三が、四十四弗半になつて居るのはどう云ふ譯か？　外國へ日本の札を持つて行つて、「換へて呉れ。」「どつこい、換へる譯に行かぬ。」「日本の金貨は外へ出さぬから、其奴は一寸俺の所では換へられぬ。」「マア一割程負けて貰はねば困る。」とこうきます。近頃は金輸出

解禁問題で、少々騰つて居ります。日本の中では、換へると書いてあると、事實換へます。外國へ出すとそうはいかぬ。所が金貨を持つて居るより、札を持つて居る方が、輕くてよいから、お互に札を持つて居る。之は何を信用して居るか。日本の法律、日本銀行を信用して居るからであります。金貨を百圓積めば誰でも百圓と思ひますが、紙に百圓と書いてあつても百圓と思つてゐます。手形になると不渡があるから、さうは行きませぬ。チョコ〳〵さう云ふのを、掴んでござるのもあると思ふ。出して居る人は、此の會員の中にはありますまいが、あれは信が置かれない。餘程よく取調べぬと、出した所が甚だあやしい。信と云ふものは、洵に大切なもので、紙に百圓と書いたゞけで誰も取調べはせぬ。日本中の人間が、經濟學者になつて、日本銀行へ行つて、金準備を調べ、日本の兌換制度の法律を、研究しなければ、あの紙が百圓に使へぬ。そんなことは出來ませぬ。法律で定めて、發布して日本銀行が、それを正しく出して居る以上は、吾々八千萬の日本臣民は、知らないでも安心して居られるのです。

如來如實

吾々本當の事を言へば、如來ではないので、パラマールトハは分りませぬ。サムヴリティも分りませぬ。パラマールトハ最勝義、第一義であるから、第一人でなければならぬ筈です。けれども第一人であつた所の釋迦世尊が、斯う云ふから、それを吾々は、第一義は斯うなりと信じて居る。「迷と悟とは同じものだ。煩惱と菩提と、罪障と功德と體無二だ。」といはれるから、吾々は斯くの如く信じて居ると申上げる。知つて居るとは言へませぬ。何となれば、私は釋迦世尊と、同格の悟を開いて居らぬからです。

斯の如く信ずる

百圓を百圓と信ずるのみ

だから經濟學者になつて、兌換制度を調べもしない。大藏省の役人になつて、日本銀行の金準備を調べもしない。百圓と書いてあるから、百圓と信じて居る。「日本の兌換制度は、世界で一番よいのですか？　惡いのですか？」よいとも惡いとも言へない。之を極めた者は、地球に於て、釋迦世尊一人より出て來ぬ。後とは偉い顏をして居りますけれども、吾々より少しえらいものは、段々あつたらしいが、釋迦世尊の智慧に比べて見たら、どんなものでも及ばない。それ故に釋迦世尊の說を信じて居ります。

信はよく

又釋迦世尊も言つて居ります。「お前等やつても分りやせぬ。それだから如來如實

煩惱卽菩提の原理を了悟せしむ

の言を信ぜよ――應信如來如實言――お前等弟子は、如來如實の說を信ずべき義務があるのだ。」と仰せられる。私共それでよい。さうすると、信と云ふものが、總て佛教の基礎になる。此の信によつて、煩惱菩提體無二の原理を知る。其の原理を知る故に、「煩惱と菩提と同じものである。」と悟り得られるのだ。之はどの經典にもさう書いてある。明日から申上げる御經が、皆さうなつて居ります。

眞宗は信の一念によつて往生極樂の緣を結ぶと說く

吾々の信じて居りまする所の、淨土眞宗も、「信の一念によつて、往生極樂の緣を結ぶのだ。」斯う書いてございます。「それでは眞宗の教と云ふのは、第一義諦では無いでは無いか？　緣を結ぶと云ひ、極樂往生の果を得ると云ふのであつたら、因果關係があるでは無いか？　因果關係があつたら、世俗諦では無いか？」正しく世俗諦でございます。第一義諦ではございませぬ。何となれば、信じて居るものが、凡夫である以上、世俗諦より言へませぬ。其の世俗諦であるべき道理の儘、第一義諦を示して居る。佛の目から見れば、第一義諦で、吾々の目から見れば、世俗諦になつて參ります。「往生の正因を結び、往生の正因を結ぶが故に、阿彌陀如來と云ふ。卽ち無量光明如來の力と云ふものが、緣になるのだ。」斯う書いてあります。昨年講釋をしました、往生淨土論の註にも、「翌に其の本を求むれば、阿彌陀如來を增上緣とするなり。」緣の最も力の强いものだ。信によつてさう云ふことを得る。と書いてございます。

信はよく逢を為して往生極樂の正因たらしむ

同時に今申しました、煩惱菩提本來體無二のものであるから、吾々の迷ひが、信の因緣によつて、極樂往生の悟になるのだと云ふ原則が、それによつて出て來る。之は眞宗の教でございますが、眞宗の教を例に取つて申しました。

（4）　廣略相入

佛教は悉く差別と平等の兩面を持つ――第一義諦には分別なし――如來如實の言は廣略相入によつて知る――廣略の意義――世諦因緣法は廣相――根本不動の相は略相――廣略相入――一卽ち多、多卽ち一――第一義諦と世諦は互に相入す――廣に執着する弊と、略に執着する弊――廣略相入には低級高級の別無し――廣略相入と人生活動――佛教信仰の眞價値――廣略相入は佛教の原理――明日は廣略迷悟の模樣――釋迦の無礙辯に兩面あるも原理は一つ

佛教は悉く差別と平等の兩面を持つ

先程一時三十分ばかり申しましたやうに、世俗諦、第一義諦、それが因緣觀の狀態、不生不滅の本來空、何れの點から申しましても、佛教は悉く之が差別と平等と、兩方の面を持つて居る。世諦、第一義諦とある如く、總てのものが、差別平等となつて居るのです。

第一義諦には分別なし

所が之がはだ〳〵に離れて居つたら間違ひになります。世諦の方はそれでよいかも知れぬが、第一義諦の方はコツンと突き當る。第一義諦は分別の無いもの、分けることの無いもので、二箇と云ふものは、認めることが出來ない。「一卽全部だ。」と云ふのが、第一義諦でございます。それでどうしても、二箇を別々に認めたら、玆に過ちが出て來るのです。

如來如實の言は廣略相入によつて知る

さうすれば、之が互ひに其の形が、這入らなければならぬ。こゝが面白い所で、廣略相入と云ひます。これに就ては昨年淨土論で、詳しく申しました。之は往生淨土論の註では、廣略相入れると云ふことは、極樂の莊嚴の所で、言つてございます。文字はそこに出て來て居るのでございますけれども、廣略相入れると云ふことは、佛教の總ての點に、見えるものと考へられる。之によつて、佛教と云ふものを、見て行かねばならぬ。卽ち如來如實の言と云ふものは、マア廣略相入に依つて見れば、之を知ることが出來る。「此の廣略相入を知らなかつたら可けない。」と書いてあります。

廣略の意義

廣と云ふ時には差別で、幾多の品物を、こゝへ並べた時であり、略と云つた時には、ものをちゞめて一つと云つた時です。「たゞ廣と云ふものは、多數であつて、略は一箇だ。」と、數にあなた方が執着しては可けませぬ。多少ではない。差別を並べて行く時と、一緒くたにして、略と云つた時と違ひます。

世諦因緣法は廣相

そこでいつも世諦因緣法の相の時には、因によつて、緣が作用して、果を出して、ありとあらゆるものを、出して來て居る。卽ちテーブルもあれば家もある。人間もあれば着物もある。幾多のものを出して居る。其の相が一手で無い。幾多のものが、總てゴチヤ〳〵差別の相を持つて居る。地球だけでない、ありとあらゆる總てのもの、あの星までが皆さう云ふ形をして居る。之を名づけて廣の相と云ひます。

根本不動

今度は其の廣の相の、本となる所の略の相を、もう一つ見て行く。さうしますと、

の相は略相

總てのものが、アトム迄壊れる。アトムはまた核と稱する陽電子を中心に、陰電子が廻つて居る狀態である。其の陰電子が、自己の軌道を離れ、又他のものと引つつきする時に、放射能を起す。此の三つの働きを見て、もう一つ其の本を見たら、動かない相のものがある。それが卽ち略相でございます。

廣略相入

略の相と云ふものは、廣の相の外にあるのでは無い。「廣の相の儘が卽ち略。略の相の儘が廣の差別の相だ。」そこで相入れると云ふ字が使つてあります。廣の相で時計がある。書物がある。テーブルがあると認めると同時に、それが何にも無い相のものだと見るのが略の相であります。玆に約三百五六十、ちよつと四百の人間が居る。これらは皆人間なりと見た時に過ちが起る。人間が居らぬと見ても過ちが起る。人間が居らぬのでは無い。人間のやうな相をして居るのである。本來空なるものゝ形を、吾々の目が誤まつて見て居るだけの話で、さう云ふ形が認め得られぬことは無い。認めて眞なりと考へたが過りなのです。過りの無いことはと云へば、今申上げた通り、空なる略の相が、其の儘廣の差別の相であると、知るのであります。

一卽ち多多卽ち一

差別の相が卽ち一の相である。一が卽ち多。多が卽ち一である。多も眞理ならば一も眞理。一に非ず多に非ずも眞理。斯う云ふことになります。

第一義諦と世諦は互に相入す

世諦因緣法は廣の相。第一義諦は略の相。略の第一義諦の儘が廣の相。廣の因緣法を離れて、略の第一義諦は存在せぬ。略の第一義諦を離れては、廣の世諦も存在せぬ。之が卽ち廣略相入と云ふことになつて來るのです。

廣に執着する弊と略に執着する弊

これが分つて居りませぬと、分別に執着すると、人の物が取りたくなつて來る。略に執着しますと、死んでしまつた方が得では無いか。生きて居るから面倒が起ると云ふことになつて來る。生活難の爲に、親子一緒に死んでしまつた、と云ふことを新聞で見る。初めのうちは氣の毒なやうな氣がして、同情したいやうな氣がします。よく讀んで見ると、大馬鹿だなと思ひます。どうせ死ぬに決まつて居ります。生れる時に、死なずに助かつて、御苦勞に長い間、世間に迷惑を掛けて居る。初めから出ずに居ればよかつた。出たから已むを得ぬ。出た瞬間に、死ぬと云ふことは、決まつて居る。出た以上は、苟も人間である以上は、人間の務を果さなければならぬ。それを、「連れ

て死ぬのが、親の慈悲だ。」こんな馬鹿げた慈悲は無い。子供は親父より賢うなるかも知れぬ。それが嫌なら子供を、作らずに置けばよい。初めはえらい氣の毒なやうな氣がしましたが、よく讀んで見ると大馬鹿です。さう云ふものは、會員の中にある筈はありませぬ。さう云ふ者があつたら、「馬鹿野郎」と叱つてやつてよろしい。私忙しくて、一々叱つて巡れませぬから、あなた方一つ叱つてやつて下さい。あれは、まあ世間道で云へば、略に引つ着いた爲めで、「迚も此の世では可かぬ。死んだら一切責任が無くなる。」と云ふのは、略に執着し、空に執着した相で、人の物を我が物にしようと云ふのは、廣に執着した相であります。無茶な話がよく書いてあります。人間を殺してから、物を盜つて居る。殺さんでも取る位は出來さうなものだが、わざ〳〵人殺しをして取つて居る。ちやんと其の尻から手が廻つて、刑務所へやられる。之は廣に執着した結果です。人間世界の事でも、廣に執着しては惡い。略に執着しても惡い。元來廣も略もないので、皆んな認めたら過ちです。さうかと云つて、醉生夢死、何にもしないで、生きて居るか死んで居るか分らぬ。中風にかゝつて寢て居つて、水を飲んで居る。此れは役に立たぬ。何となれば常態と云ふものは無いからです。

廣略相入には低級高級の別無し

廣の相其の儘が略、略の相の儘が廣だ。之は佛教の原理ですから、何でも皆さうです。餘程下等な低級な所まで、引下して、人間の實生活に入れても、矢張り廣略相入させて置かなければ可けませぬ。原理ですから、低級から最高迄來て居ります。原理に二つありませぬ。

廣略相入と人生活動

人間に生れた以上は、どこまでも勉强して、御國の爲に、社會の爲に、自分の家の爲にならねばならぬ。慾張ること必ずしも惡くない。どつと金儲けをして、谷口さんなり、野村さんにならねばならぬ。貧者の一燈では可かぬ。長者にならぬと、萬燈は出來ませぬ。それを惜まず社會公益の爲めに使ふ。何にもせずに、貧者の一燈と云つて見ても通らぬ。ドン〳〵慾張つて、よく集め、よく散ずれば、慾張ること、必ずしも惡くない。散ずることを惜まねば、慾ばることも意義を生じてくる。非道なことをせぬやうに、正當に儲けようと思つて、二十四時間考へて居る。智慧が淺いから儲からぬ。御同樣さうだらうと思ひます。大阪には儲けたくない人は無いと思ひます。不

景氣で儲からぬ。それは智慧が足らぬからです。お經を讀んで見ると、いつでも大なる功德を得る、大なる利益を得ると書いてある。これは餘りえら過ぎて急の間に合はぬ。餘程資本金が無ければ、出來ぬことが書いてあります。吾々では一寸工合が惡い。野村、谷口を相手に書いてある。吾々には智慧が無い。大自在力が無いから、大利益は出て來ぬ。しようと思つても何にも出來やしませぬ。

佛教信仰の眞價値

すべてどんなことでも、廣略相入しなければ、廣に引つ着いても過ちであり、略に引つ着いても誤りである。廣略を離れても誤つて來る。「廣の相の儘が略。」略の相であると云ふことを知つて、廣の働きをせねばならぬ。玆に至つて、初めて本當に、吾々が佛教を信じて居る値打がある。大いに儲けて、社會公益の爲に大いに投じ、我が家を隆んにする。それには十分勢力を集め、自分に非常な力がなくてはならぬ。其の力を何か社會救濟の爲に出し、日本國家の爲に出すには、微力では可かぬ。富を有し、權力を有し、學問を有たなければならぬ。馬鹿な奴では可けませぬ。大なる利益と書いてありますが、馬鹿では利益は得られませぬ。

廣略相入は佛教の原理

其の廣の相の儘が略の相。一體吾々の體を初め、總てのものが無いのだ。廣に着せず略に着せず、執着するものを取つてしまふ。パラマールトハの儘が、サムヴリテイ。サムヴリテイの儘が、パラマールトハ。この廣略相入れると云ふのが、卽ち佛教の原理であります。此の原理が、今申上げた、如何なる低級な世道人心の所迄も貫徹して、之が作用して居る。それさへ十分あなた方に、お分りになつて居れば、此の世の中に暮して行くに、過ちなく行ける筈です。大なる利益は、一寸得られぬかも知れぬが、小なる利益位は毎日めぐつて來ます。

明日は廣略迷悟の模樣

もう十二時になつて來ましたから、これだけで、今日の御話は、お終ひにして置きます。これだけでは、佛教の大意は、盡きて居らないが、明日からは、各經に就きまして、廣の模樣、略の模樣、第一義諦の模樣、世俗諦の模樣、迷悟、生滅不生滅の模樣、高級な色々な說方をしてあるのを申上げます。

釋迦の無礙辯に兩面あるも原理は一

釋迦如來と云ふ方は、辯舌のえらかつた人で、諸佛如來は、無礙辯才を有つて居る。私共洵に辯才が下手で、突き當りましたり、言ひ損ひをします。けれども釋迦如

來は、さう云ふ不調法なことは無い。無礙辯才で、うまいことを言つて居ります。それで或は右の事を云ひ、或は左の事を言ひしてございますから、一寸二つの經の上に相違が見えます。全く違つたことを言はれたやうにも見えます。けれども靜かに考へ、今申上げた原則から見ますと、同じでございます。「右と云つたのは左でない。」と言ふことで、「左と云つたのは右でない。」と云ふことです。さう云ふ工合に讀んで行かねばならぬ。それを明日と、明後日半分位かゝつて申上げます。先づ今日は、此の位にして置きます。此の原理を、御忘れにならぬやうに、しつかり頭に入れて置いて戴かねばなりません。

第五　經典の大意

佛說は相手相應——十二部經——十二部經は經の說き工合による區別——Sūtra—Geyyam——Vyākaraṇam—Gāthā—Uddānam—Nidānam—Avadānam—Itivṛtta-kam—Jātakam—Vaipulyam—Adbhuta-dharmaḥ—Upadeśaḥ

今日は約束の通り、九時五十五分に始めまして、一寸長くかゝります。昨日大體を申上げて置きました。今日は各經に就て、經の大意を申上げると云ふことを、約束して置きました。其の通りこれから致します。

佛說は相手相應

全體佛の說法と云ふものは、相手次第に說かれたと云ふことを、第一に吾々は知らなければなりませぬ。智慧の無い者に、智慧の高いことを云つても分らぬ。それから智慧のある者に、低いことを言つても感心をしない。それだから相手によつて、相應したやうに言はなければならぬ。賢い者には、賢い者のやうに、愚なものには、愚な者のやうに、子供には、子供のやうに、年寄には、年寄のやうに、皆それ〴〵相手相應に、說かなければならぬものです。それで佛の說かれた所の經を、十二部經と言ひまして、十二通りに區別して居ります。今玆に書きます。

十二部經

1. Sūtra　　經
2. Geyyam　　歌
3. Vyākaraṇam　　豫言說明

4. Gāthā　詩句
5. Uddānam　歌喜
6. Nidānam　紐(實在の因)
7. Avadānam　名譽の行爲
8. Itivṛttakam　出來事・事件
9. Jātakam　生る
10. Vaipulyam　廣大
11. Adbhuta-dharmaḥ　未曾有
12. Upadeçaḥ　、講演

十二部經は經の說き工合によつて區別

斯う云ふやうに、十二通りに區別してありますが、之は說いてある說き工合によつて、區別したものです。全體言ひますと、何と云ふ經は、其の中のどれに屬して、どう言ふことが說いてある。と云ふことを、一々云はなければならぬのであります。之は私が淺學で全部の御經を十二通りに配列して、「之はどれになる。之はどれになる。」と云ふことはえう言ひませぬ。洵に私の淺學を恥ぢます。けれども博學の人が、今迄分けて呉れた其の受け賣りは出來ます。これから斯う云ふ區別があると云ふことの受賣だけをやります。

全體此の Sūtra と云ふものの字義を申しますると、玆に書いてあるのは、本當に經典としての譯よりは、寧ろ字義を書いて居ります。スートラと云ふのは、絲と云ふことです。主に之は經(たてゝ)でございます。又大體に糸と云ふ字です。經と云ふのはたていとと云ふ字である。「南北を經と云ひ、東西を緯と云ふ。」スートラ卽ち經。よく譯して居ります。偶然のことながら、支那でも孔子の說かれたものをやはり經と云ふ。やはり尊とい時には、此の字を使つたものらしうございます。今一括して十二部經と云つた時のスートラと、十二分の一の時のスートラと、スートラの意味が違つて居ります。十二部經の時は、佛一代の經を概括して言ひますけれども、十二分の一のスートラは、主として小乘經に使つて居ります。大乘經には使つて居りませぬ。

Geyyam 之は歌であります。歌と云ふと、今日で云へば色々の歌謠類で、讃嘆をしま

す時、音樂に合して歌ふ歌を書いてあるのであります。

Vyākaraṇam 之は豫言であるとか、説明であるとか、兩樣に使ふ字でありますが、多く豫言に使はれて居ります。「將來お前は斯う云ふことがあつて、斯う云ふ工合になるのだ。」と云ふやうなことを言ふ場合に使はれて居ります。

Gāthā と云ふのは、文字を句法で切りまして、丁度日本の歌であるとか、支那の詩に當るもので、ガートハーばかりの經文もありますが、大抵佛語の間にはさかつて來るのが普通であります。さう云ふ時には、ガートハーの中に屬するから、引離して讀まなければならぬ譯です。博學の人も面倒臭いから分けなかつた譯です。

Udānam 之は直譯では、工合が惡うございます。直譯すると、ウッダーナムと云ふことは、喜ぶと云ふことになります。大體上へ向いて息をすると云ふ事です。驚いて、「えらいことだ！」と云つて、上へ向いて息したら喜ぶ義になります。下向いて息を出す時は、喜ぶ義にならぬ。驚いた時は上へ向く。看板を上へ向いて、馬鹿見たやうな顏をして、皆んな口を開いて見て居ます。あの時には自分は喜んで居ります。

Nidānam 之はスートラと、少し意味が違つて居つて、ニーチャとダーチャと引つ着いたのですが、糸でなくて紐である。ものを括る義になつて居る。因と云ふものが、實在して居ると云ふことを言つたので、Cause of existence と云ふ義でございます。

それから Avadānam 之は名譽の行爲と云ふことになりまして、Avs に da をつけまして、慰めるとか何とか云ふ義にもなりますし、總て物語類を、アヴダーナムと云ひます。物語には色々あります。何やら王の物語や、何々の物語、佛教のものにはございませぬけれども、一般のものに澤山ございます。佛教でもそれに倣つて、昔斯う云ふ偉い人の物語があると云ふことを出して、物語類と云ふものがあります。餘談に亘りますけれども、一寸申上げて置きますが、ヒトーパデーシヤと云ふのがございます。之は友を得ることを論議したものでございます。之は今私の所の光壽會で、飜譯したのが出て居ります。それを參考に致しまして、大乘にずつと前から連載致しましたから、御覽でございませう。之は馬鹿な人間を、賢うすることを書いたもので、之を讀んで賢うならぬ者は、餘程大馬鹿です。大抵の大馬鹿は、ヒトーパデーシヤを讀

むと、賢うなる譯でございます。

Itivṛttakam 之は出來事、Occurrence, Event と云ふ字でございます。斯う云ふことが出て來たと云ふ、出來事を書いたものです。

Jātakam 之は生れると云ふことで、佛本生經、或は本生譚と譯して居ります。釋迦如來の此の世界に出て來られた以前、過去に他の世界に於て、色々現れて居つたと云ふ、詰り之は未來記に反對した過去記でございます。

それから其の次が Vaipulyam 之が本當に吾々の一番大事な御經でございます。廣大なと云ふ字です。それで此のヴイプリヤムは、總ての經典の一番頭になるものでございます。今日これから申上げますのは、皆んな此のヴイプリヤムの階級に屬するものです。私は全部の御經を、皆は得う擧げませぬ。けれどもこれ位のものは、ヴイプリヤムに屬する位の事の受賣はやります。

Adbhuta-dharmaḥ 未曾有の法と云ふ字です。さう云ふと之は大變立派なやうでございますけれども、大したものではございませぬ。多くやはり小乘經が、此の字を使つて居ります。

それから Upadeśaḥ 之は講釋する、說く、議論すると云ふことが出て參ります。色々の意味が出て參りますが、字は論議と云ふ義を含んで居ります。經にもウパデーシヤがございます。釋にもウパデーシヤがございます。それで論をウパデーシヤと云つたのもあります。普通論はシヤーストラと云つて居ります。

第六　解深密經

原字——十二部經總括のスートラ——原字の意義——玄奘譯と菩提流支譯——結と密との字義上の關係と經題の意味——法相宗に於けるこの經典の地位と其の說相——新譯——五卷八品——舊譯——五卷十一品——主要點——無自性相品——無自性相——三通りの見方——遍計所執——依他起性——圓成實——佛說は一乘法のみ——高低は見やうにより等しく大乘經典

原字

十二部經總括のスートラ

Sandhi-nirmocana Sūtra

先づ第一に申しますのは、サンドヒニルモチヤナと云ふ御經でございます。此の時

のスートラは、十二分の一のスートラではございませぬ。十二部總括したスートラでございます。ありとあらゆる經を、皆スートラと云つて居ります。十二部經の別名でなく、十二部經を概括した總名の時のスートラでございます。

スートラ

原字の意義

此のサンドヒニルモチヤナを譯しますと、Sandhi は、結びとか結合でございます。Nirmocana は、解くと云ふことでございまして、結合を解く、括つてあるものをほどく、と云ふことで、之を解深密經と、玄奘は譯して居ります。

玄奘譯と菩提流支譯

此の經は支那にまだ澤山ございますが、主なるものは、玄奘の譯した解深密經で、之を新譯と云ひます。Bodhiruci（菩提流支）の譯した深密解脫經は、舊譯と云ひます。此の二つでございます。兩方とも却々よく譯してあります。ボディルチは印度から來た人であります。玄奘は支那人で、印度へ行つて勉强した人でございます。兩方とも立派な譯でございますが、どこにも結ぶと云ふ字が出て來ませぬ。そこで私共非常に困りました。

結と密との字義上

どう云ふ譯で、元來結と譯さなければならぬ字を、密と譯したか、色々 Sandhi と云ふ字につきまして、辭書を見ましたが、此の結ぶと云ふ義にも、しつかり結んで置くのと、ゆつくり結んで置くのと、結びやうがあります。靴の紐でもゆつくり結んで置くとほどけます。此の密と云ふ字は、秘密と云ふ時には包んでかくした。緻密と云ふ時には分子がこまかくよく引つ着いて居ると云ふことになり、粗密と云つた時には、あらいものと密なものとなる。顯密と云ふと、顯れたものと、かくれたものとなる。支那の密の字には、色々の字義がございまして、此の場合深密と云ふ字を使つたのは、深は形容詞でありませぬから、密が深くなつて居ると云ふことです。これの爲めに誤まつたのです。深くなつて居るといはれたから、秘密の義の如く考へたのでありますが、さうではございませぬ。結合が非常に緻密になつて居ると云ふことです。深く密に極くかたく結合して居つて、淺いものでない。其の結合の深く緻密なものを、これから分解し、碎いて見ようと云ふのが、此の經題の意味です。

經題の意味と關係の

法相宗に於ける經典の地位と其

法相宗と云ふ御宗旨がある。奈良の興福寺なんか法相宗でございますが、此の御宗旨の間で、之は洵に重大な經典になつて居ります。我が淨土眞宗の方では、餘り此の

の說相

御經は、正依の經典として使ひませぬ。單に學問としては、之は別でございます。併し却々意味の深い經典でございます。凡て吾々は、吾々位で無い、も少し上等の所へ行きましても、ものに執着し喰つ付いて行く。喰つ付く所の心を、根底から破壞してしまはぬと可けませぬ。之はそれを言つてある經典でございます。今から此の經典に就て講釋します。今日は二時間、總て斯う云ふ形式で行きますから、左樣御承知を願ひます。

新譯

この經典は、先に申しました樣に、新譯や舊譯や色々ございます。どちらでやつてもよろしうございますけれども、まあ普通玄奘の譯しました新譯が、親しうございますから、新譯で私共やつて居ります。さう致しますると、全體新譯が五卷になつて居りまして、五卷のうちが支那で品と呼んで居りますが、八品に分れて居ります。

五卷八品

卷一、序品第一。勝義諦相品第二。心意識相品第三。
卷二、一切法相品第四。無自性相品第五。
卷三、分別瑜伽品第六。
卷四、地波羅密多品第七。
卷五、如來成所作事品第八。

いづれも要らぬことを書いた所は、一字もありませぬ。けれども其の中で、最も主なる所だけを、申上げて置きませぬと、此の經一卷講釋して居りましても、法相宗では一年位論じて居ります。そんなにかゝつて居つたら、地球が廻轉しますから、輕くやつて置きます。

無自性相品

舊譯

此の中で一番主なるものは無自性相品でございます。

之が深密解脫經の方になりますと、少し品の立て方が變つて居りまして、八品が十一品になつて居ります。即ち、

五卷十一品

卷一、序　沙門都釋曇寧造。序品第一。聖者善問菩薩問品第二。聖者曇無竭菩薩問品第三。聖者善清淨慧菩薩問品第四。慧命須菩提問品第五。聖者廣慧菩薩問品第六。
卷二、聖者功德林菩薩問品第七。聖者成就第一義菩薩問品第八。

卷三、聖者彌勒菩薩問品第九。
卷四、彌勒菩薩問品之二。聖者觀世自在菩薩問品第十之一。
卷五、聖者觀世自在菩薩問品之二。聖者文殊師利法王子菩薩問品第十一。

と分かれて居ります。

主要點

此の中にどう云ふ事が言つてあるかと申しますと、「總て一切の法と云ふものは皆空なるものだ。」と云ふことを矢張り之も言つて居ります。「形の無いものだ！」空なりと云ふ字を、直かに使はずに、「自性無きものだ！」、之は面白いことを言つて居ります。

無自性相

無自性相

と申します。自性が無いと云ふことは、「自分の性質なり、自分の相と云ふものは有つて居らない。總てのものには形は無いのだ。世諦因緣法を以て、之を說いても形は無いものだ。第一義諦に形の無いと云ふことは勿論だから、やはり無自性相である。」

「之は水容（ミヅイレ）である。之はコップである。之はお盆である。」と云ふ相は持つて居ない。「水容、コップ、お盆と云ふものはありはせないのだ。」斯う云ふ譯でございます。

三通りの見方

それで凡てのものゝ見方が三通りある。其の三通りは斯う云ふ工合になつて居ります。

遍計所執
依他起性
圓成實性

遍計所執

此の無自性のものが、「遍計所執のもの、依他起性のもの、圓成實性のものだ。」斯う云ふことです。

どう云ふことかと云ひますと、遍計所執と云ふのは、凡夫の具備して居るもので、即ち吾々のやうに智慧の足らぬものは、無いものを有ると思ひ間違つて居る。「之は瓶、之はコップ、瓶はいつまでも瓶、コップはいつまでもコップ、空氣と違ふものだ。」斯う思つて居るのが遍計所執です。これは大分下等なもので、少し上等なものはさう云ふことは言ひませぬ。

依他起性

氣の利いたことを言つて來たのが依他起性です。之は、「ありとあらゆるものは、凡

て縁によつて起つたものだ。」それは昨日申しました「他縁に依つて起つたものだ。」例へば瓶の如き、斯う云ふものを作るのには、人間が色々の事をしなくてはならぬ。縁に依つて出來た、絶對の相と云ふものはあるもので無い。縁に依つて幾多の相を現すので、因と縁の動作によつて果を出すのである。だから因縁所生と云ふ俗諦を示すのが依他起性です。之は大分上等になります。

圓成實性

次に圓成實性と書いてあります。圓成實と云ふのが、舊譯には第一義と書いてあります。どう云ふ譯で、玄非が第一義を、圓成實と譯したか、之は一寸玄非に聽いて見ぬと分りませぬが、パラマールトハと云ふ字に違ひはございませぬ。完全無缺に出來て居る嘘の無いと云ふ字です。缺けて居つたら圓とは云へませぬ。出來上つて居るから成、半成品や未成品では可かぬ。實と云ふのは嘘で無い。完全に出來上つて嘘で無いと云ふ中に、第一義諦が掲げてある。ボヂルチは第一義と譯して居ります。之は佛智になつて居りまして、吾々の世の中、娑婆では之は無い。斯う云ふ具合に間違つたものから最も上のものまで「本來自性と云ふものは無いものだ。」斯う云ふことが現して

佛說は一乘法のみ

あります。

この經は如來は一乘 ekayāna 一つの乘り物であると說いてある。「佛は一つの大乘 (mahāyāna) を說いて居る。けれども聞くものが色々解釋するものだから、それにひつかかつて二乘となり、三乘となる。言つたのは一つだけれども、聞人が聞損つて二乘になつたり、三乘になつたりする。佛は一乘しか說かぬけれども、衆生の聞方によつて、二乘に執着し、三乘に執着をして來るのだ。それだから無上菩提には一寸行かれぬ。」と斯う書いてあります。皆有上菩提だから具合が惡いのです。之が先づ此の經の說相でございます。

高低は見やうにより等しく大乘經典

どちらかと云ひますと、その書いてある所の程度が少し低いやうに思はれます。一乘を說くと言ひますと、同じヴイブリヤムの中には、這入つて居りますけれども、ヴイブリヤムの中では、やゝ低いやうに古からの學者が皆申します。併し矢張り低いやうに思はれると云ふのは、誤りかも知れませぬ。佛には高い低いはございませんから、たゞ一つの說法です。之を低く見たものが低いと云ふだけで、高く見たら高く見えま

す。私共高いとも低いとも思ひませぬ。昔から低いと言つて居ります。見様によつては低いかも知れませぬ。あなた方が御覽になつたら如何御覽になりますか。まああなた方におまかせします。

第七　勝鬘獅子吼經

原字――經題――原字の意義――皇后の戸籍――在家の婦人中の傑物――求那跋陀羅譯十五章――章題――この經の說相――勝鬘は女の除外例――自性清淨章――十經は各矛盾相違し乍ら互に廣略相入す――印度原典を缺く――如來藏自性清淨客塵煩惱所染――勝鬘經の骨子――如來藏と客塵煩惱――この經が一乘大方便方廣經としての眞價値――鏡と塵――鏡も塵も本來清淨――離解の法――勝鬘の說法と佛の隨喜――二法の了知は勝鬘及同位の菩薩にして吾々凡夫には分らず

今度はまた御經を變へます。迚も今日はやゝこしうございますが、先づ代表的のものを、十程申して見ようと思つて居ります。二百も三百も言つたら迚も追つつきませぬ。話す方もかなはないし聞く方も適はぬ。

原字

Śrīmālā-devī-Siṁhanāda-Sūtra

經題

之は勝鬘獅子吼一乘大方便方廣經と、書いてございますが、一乘大方便方廣と云ふことは、原本にはございませぬ。或は之のある原本があつたかも知れませぬ。經題には勝鬘獅子吼經とだけしか出て居りませぬ。或は略してあるのだらうとも思はれます。

原字の意義

Śrī は勝れた、芽出度い、mālā は花輪のやうな飾り、devī 之が面白いのでございますが、支那に譯してございませぬ。譯しますと天女。deva は男天、devī は女天でございます。梵語では m が來ましたら男、i が來ましたら女でございます。Siṁhanāda は獅子が吼える。獅子が吼えると、百獸が縮かんでしまふと云ふことから、佛の說法して居られる時には、外の者が屏息してしまふと云ふ義です。

皇后の戸籍

之は天女と云ふデヴイと云ふ字が、使つてございますが、實際は生きて居る人間でございます。あの人の生れた所は、Śrāvasti（舍衞國）で、Prasenajit（勝軍王）と云ふ王様の女（ムスメ）です。さうしてアユダ國の友稱王、之は多分ミトララージャと云ふ字かと思ひますが、原文は分りませぬ。共の友稱王の皇后さんになつた人です。

在家の婦人中の傑物

之は迚もえらい女です。釋迦一代の中には、出家の女にも、えらいのがありますが、在家の女で、これ位えらいのはありませぬ。出家の女でも、これには一寸齒がたちませぬ。在家の男で偉いのは、Vimalakīrtti（維摩）で、日本でも此の人から學んだ人が大分多いと思ひます。

求那跋陀羅譯十五章

これには求那跋陀羅（Guṇabhadra）の譯があつて、可なり古い譯でございます。さうして十五章に譯して居ります。之は品と云はず章と云つて居ります。

章題

如來眞實義功德章第一
十受章第二
三願章第三
攝受章第四
一乘章第五
無邊聖諦章第六
如來藏章第七
法身章第八
空義隱覆眞實章第九
一諦章第十
一依章第十一
顚倒眞實章第十二
自性淸淨章第十三
眞子章第十四
勝鬘章第十五

斯う分けてございます。

この經の說相

これによりますると、先づ勝鬘が、佛に色々の言葉を、言はれた後に、佛から、「勝鬘お前の心得て居る所を言つて見い。」と言はれた。さうすると其の勝鬘が、「然らば私自分の心得を申上げませう。」斯う言つて、心得を言つたのが、此の經でございます。迚も私共讀みましても、實にやゝこしい、難しい分らぬ御經でございます。

勝鬘は女の除外例

あの分らぬことをスラ〳〵と言つた。女として見ると、餘程えらい女だと思ひます。私は男に生れて來まして、女を馬鹿にしてかゝつて居ります。併し斯う云ふ方に出會ふと、一寸馬鹿に出來ませぬ。斯う云ふ除外例の先生があるのですから、油斷がなりませぬ。其の中で最も大事な所は斯う云ふ所でございます。

自性清淨章

十經は各矛盾相違し乍ら互に廣略相入す

自性清淨章

あとも大事でありますが、主として之の自性清淨章に、其の主張を言つて居ります。さきには無自性相、今度は自性清淨。或は無自性と云ひ、或は自性清淨と云ふ所が面白い。之を一寸申上げて置きます。斯う云ふ工合に、これから申上げるところの、十程の御經は皆違うて居ります。コントラヂクト(矛盾)して居り乍ら、一つの道だと云ふ。深密解脫經では無自性だと云ひ、これでは自性清淨だと云つて居る。これが昨日序言で申上げました、所謂廣略相入のものでございます。佛教は決して一手のものと云ふやうな、詰らないものではございませぬ。ありとあらゆる相のものは何でもない。何でも無いものが自性清淨である。みんな斯うなつて居りますから、昨日申しました三日聞かなかつたら聞き損ふ。無自性を聞いて、自性清淨を聞かなかつたら、半分しか分らぬことになります。

印度原典を缺く

之は印度原文がございません。支那譯ですが、面白いことがあります。

如來藏自性清淨客塵煩惱所染

第一に斯う云ふものを、出して來ました。

如來藏自性清淨
客塵煩惱所染

勝鬘經の骨子

如來藏と客塵煩惱

如來藏と云ふものを、出して來て、「如來藏と云ふものは、自性清淨のものであるが、客塵煩惱の染む所だ。」之が勝鬘經の骨子であります。

あたまで何も無いと言ひませぬ。「如來藏」即ち如來の藏と云ふ意味になります。これは原字がございませんから分りませぬ。求那跋陀羅が藏と譯したのは、何と云ふ字であつたか、原字が分りませぬから、藏の字の引つ着いた講釋はえう致しませぬ。支那で藏と云ふ字は、求那跋陀羅の譯した時は、藏識と云ふやうに、「包んで居る」、「おさめて居る」と云ふ意味に解釋するのが普通でございますから、まあさう解釋して置

きます。如來の藏と云ふものは、本來清淨なもの。なる程泥の如來はありませぬ。ドブ泥如來と云ふのは、三千佛名經にも書いてありませぬ。本來自性清淨なものである。所が客塵煩惱の染める所となつてゐる。さうすると、「此の如來藏と云ふものは、どんなものか？」「吾々の心もやはり如來藏。」こゝが面白いところです。如來藏と云ふと、有難い御佛壇にあるものを、如來藏と思つて居る。之れは如來藏ではありませぬ。あれは紙に繪を畫いたり、木や金や石で形を拵えたものに過ぎない。如來の心、卽ち如來藏。吾々の心、卽ち如來藏。あらゆるもの皆、如來藏。卽ち自性清淨なものである。「それなら吾々何で惡い了見が出るか。」「客塵煩惱の染む所だ。」上に引つ着いて居る。あなた方糸を染めるのを御覽になつても分ります。糸にある色素が引つ着いて居る。自性清淨の如來の上に、煩惱が引つ着いて居ります。

この經が一乘大方便方廣經としての眞價値

これだけならば、極めて低級な說明。敢て勝鬘夫人を煩はす必要はない。誰でも言ひます。さうで無いから、吾々は迚も勝鬘夫人に及ばぬ。「自性清淨、客塵煩惱の染む所。」と云つて、客塵煩惱、自性清淨、如來藏それで面白くなつて居る。そこがヴイ

プリヤム一乘大方便方廣經の値打であります。同じ如來藏が、「或る時には自性清淨と見え、或る時には客塵煩惱と見える。何故か？」如來は本來あるものであり、凡夫は無いものである。無いものがある如き相をして居る。染められた相を、吾々は見て居る。染められるもの、染めるもの何にもない。初めからさう云つてしまふと、吾々の存在と云ふものと、無關係になつてしまふ。それでは蒙を啓くことが出來ぬ。一應許して、客塵煩惱を認め、如來藏自性清淨を認めて、兩者同じものとするのであります。

もう一つはつきり之を說明して差上げますれば、此の硝子の鏡の上に塵（ごみ）が着いて居る。鏡の上に、塵が着くと鏡は見えませぬ。大阪の街を步きますと、直き塵が着きます。モヤ〳〵〳〵と、大阪などは、客塵煩惱が澤山あつて、カラーを每日替えねばならぬ。most expensive（甚だ不經濟）な大阪である。所が靜かに考へて見ると、あの鏡になつて居るものは、何で出來て居るか？　さうすると、鏡と云ふものを碎いて、考へますれば、昨日も申上げた、最初 Silicon（珪素）でよろしうございます。シリコンと云ふ元素を壞すと、アトムとなる。もう一つ碎いてしまふと、プロトン、エレク

トロンとなる。あの上に附着した塵を、考へて御覽になると、大阪あたりの塵の中には、炭素を含んで居ります。アトムがどれだけかの分量ございます。其の炭素のアトムを碎いて見ると、やはりプロトンと、エレクトロンをもつて居る。今ラヂエイションを起すと、そこに力が出て來ます。

昨日申上げました、本來のものは、陽電性の微粒子と、陰電性の微粒子に外ならぬものだ。さうすると鏡は自性清淨なものと思はれてゐるけれども、本來陽電性の微粒子と、陰電性の微粒子が、因緣所生して出來たものならば、それに引つ着いた客塵煩惱も、やはり同じく、陽電性の微粒子と、陰電性の微粒子の、結びついたものだ。そこで一寸客塵煩惱の塵を見ると、鏡と大變違ふやうに見えるけれども、靜かに本來の相を見たら、何んにも變りはありやしませぬ。「客塵煩惱の染むる所、如來藏自性清淨。」染めて居る所の煩惱も、亦復自性清淨になつて來ます。況んやそれを、もう一つ後ろ迄飛び込んで見て、アトム、プロトン、エレクトロン迄認めない、第一義の如來藏迄行つた時には、何にもありやしませぬ。それを知つて居るから、吾々が勝鬘夫人に、頭があがりませぬ。

鏡も塵も本來清淨

女でも偉い人があるなと思つて居ります。

それで最後に勝鬘は、えらいことを言つて居ります。「此の難解の佛法を說く。」さう云ふやゝこしいものは洵に難解です。私共本當に分つては居りませぬ。一應言はぬと、今日が通らぬから言ひますが、私共それが分つて居つたら、こゝらにウロ〳〵して居らずに、疾うに極樂へ行つて居ります。

難解の法

『勝鬘夫人難解の法を說き佛に問ふ。佛卽ち隨喜して、是の如し是の如し。』と、佛は大變讃めて居る。『お前の言ふ通り、お前の言ふ通り。自性清淨心が、客塵煩惱の爲めに、染み汚れて居ると云ふことは、「了知すべきこと難し」さう云ふことを、知ると云ふことは、洵に難しい事だ。』

勝鬘の說法と佛の隨喜

「二法あることも知ること難し」二法と云ふのは、有爲法無爲法。自性清淨と云ふことも難ければ、此の心が煩惱の染む所となるのを、了知すべきことも亦難し。「斯くの如き二法は、汝及び大法を成就する所の、菩薩摩訶薩乃ち能く聽受す。諸々の餘の聲聞は、唯ゝ佛語を信ぜよ。」『實に難解なものだ。如來藏と云ふのも、自性清淨と云

二法の了知は勝鬘及同位の菩薩にして吾々凡夫には分らず

ふのも、客塵煩惱の染む所と云ふのも、皆之は難解なものだ。それの解るのは、お前及びお前と同樣の、大菩薩のみが、聽くことが出來る。私の言ふことを聽いて、受けることが出來るのだ。それより以下の二乘の輩は、聽くことだも出來ぬ。言つてやつても解らぬ。さう云ふことぢやと信じて居れ。』と、私共解つたやうに言つて居るが、もう一つ追究せられると、グラ〳〵してしまふ。解りやしませぬ。解つたら極樂へ行つて、こんな所には居りませぬ。あなた方もさう思つて居つたらよろしうございます。「解らぬものだ。」「了知し難し。」釋迦如來が、了知し難いと言ふのだから、嘘はございませぬ。

第八　說無垢稱經

原字――玄奘譯――この經と日本佛敎――原字の意義――毘マラキールテイ――鳩摩羅什譯十四品――玄奘譯十四品――原典を缺く――この經の說相――一丈四方の部屋――病氣見舞と諸弟子の拒避――文殊の見舞許諾と維摩の一喝――八萬四千由旬の椅子と不可思議解脫――毛孔に四大海水を入る――菩薩不二法問――文殊の默默と維摩の感嘆――不二法問は言說文字を超越す――如來種性とは如何――如來種性は不可思議解脫にして善惡を認めず――二乘は無上正徧智を證得せず

原字　Vimalakirtti-nirdeça-Sūtra

玄奘譯　說無垢稱經　玄奘譯

鳩摩羅什譯　之は澤山譯があります。主なるものを擧げて置きます。

維摩詰所說經 Kumārajīva（鳩摩羅什）譯

この經と日本佛敎　之は却々面白い御經で、禪宗等の人で、講釋せられた人もありますし、他宗の人も、講釋せられて居ります。勝鬘經と此の御經と法華經、此の三經は、聖德太子が、最初宮中で、推古天皇の御前で、御講じになつたと云ふ歷史がございます。日本に佛敎の渡つた最初の時から、ヴイプリヤムの御經の中で、大變重んぜられた御經でございます。尤も毘マラキールテイ、ニルデーシヤは、これ以外にも譯がございますが、代表的なのが、之でございますから、斯うやつて置きませう。

原字の意義

此の Vimalakīrtti は人の名でございます。玄奘が無垢、淨と譯して居ります。垢を離れる。無垢と云ふのは、離垢でございます。Vi と云ふ字は、別けると云ふ字ですから、離れるの方が、よいと思ひますが、文字の意味は、無垢の方が、よろしうございます。それから Kīrtti は、名前と云ふことであります。稱は稱へると解釋してはいけませぬ。名稱と熟字した時には、稱へるではございませぬ。毘マラキールテイは、垢を離れた、無垢の名前だと云ふことで、Nirdeça は說くと云ふことです。

毘マラキールテイ

毘マラキールテイと云ふのは、どう云ふ人かと云ひますと、Vaisāli 國の、Licchavi 種族の、大金持でございます。迚もえらい大金持で、日本で申しましたら、大阪の野村さんのやうな、あゝ云ふ大金持でございます。さうして大變學問あり、智慧のある、釋迦如來の御弟子が、皆んなやりこめられたおそろしい偉い人でございます。これには其の諸弟子をやりこめて、さうして自分の法を說いたことが、書いてあります。洵に面白い御經で、私、上海で一遍講釋したことがございます。もう一遍光壽會の方に、講釋してもよろしうございます。これから經に就て申上げます。

新舊各十四品

無垢稱經玄奘譯の方は、十四品に譯してあります。それからクマーラジーヴの舊い方の譯も、矢張り十四品に譯してあります。これは非常によい譯でございます。それからもう一つ支謙の譯があります。鳩摩羅什の譯によりますと、

鳩摩羅什譯十四品

佛國品
方便品
弟子品
菩薩品
問疾品
不思議品
觀衆生品
佛道品
入不二法門品
香積品
佛教の大意

菩薩行品
見阿閦佛品
法供養品
囑累品

斯うなつて居ります。

玄奘譯十四品

玄奘譯の說無垢稱經の方は、

卷一　序品第一
　　顯不思議方便善巧品第二
卷二　聲聞品第三
　　菩薩品第四
卷三　問疾品第五
　　不思議品第六
卷四　觀有情品第七

菩提分品第八
不二法門品第九
卷五　香臺佛品第十
　　菩薩行品第十一
卷六　觀如來品第十二
　　法供養品第十三
　　囑累品第十四

原典を缺く

よく似て居ります。餘り違つて居りませぬ。

原文があると、非常に面白いのでございますが、惜しい事には此の原文がございませぬ。

この經の說相

どう云ふことを說いたかと申しますると、非マラキールティと云ふ大金持が病氣した。風邪でも引いたのでございませう。此の先生は偉い先生ですから、たゞ風邪は引かぬ。病氣を化導に使つてやらうと考へた。えらい大金持になりますと、何でも得す

るやうに考へる。どう云ふ工合に化益するかと云ふと、俺は此處に寢て居つて、佛に願つて、私の病氣見舞に、御弟子に來て貰ふ。其の御弟子を、ギュッとまゐらせて、感心した所で、法を說いたら、一層感心するであらう。

一丈四方の部屋

それから先づ第一に、其の大金持は、一丈四方の部屋のベッドに、他の一切の道具を除けて寢て居る。一つ寢てサア來いと云ふ譯です。

病氣見舞と諸弟子の拒避

さうすると釋迦如來之を知つて、「井マラキールティが、病氣で寢て居るから、見舞に行つてやらねばならぬ。」御弟子の名前を、一々擧げると、面倒でございますから擧げませぬ。「お前行つて來い。」「私は行けませぬ。此の前えらいことつちめられました。理窟では適ひませぬ。彼れはたゞの病氣ではございませぬ。何とか彼んとか言つて、とつちめられるから嫌でございます。」誰も行かうと云ひませぬ。

文殊の見舞許諾と維摩の一喝

それでは可かぬ。「マンジュスリー（Mañjuçrī）お前行け。」マンジュスリーは偉い先生で、智慧のかたまり、智慧の結晶體のやうな人ですから、「佛の御力を藉つて、私參りませう。」マンジュスリーは、病氣見舞に行つた。さうすると文殊師利の後ろについて、「文殊師利、彼れが行つたら、井マラキールティとつちめられるに違ひない。どう云ふことを言ふか行つて聞け。」お弟子に限らず、ありとあらゆるものがついて行つた。行つて見ると、一丈四方の部屋の中に、ベッド一つ置いて寢て居る。ついて行つた連中で、舍利弗尊者はえらい。「何でこんな金持の癖に、家來も使はずに、ベッド一つに寢て居るか？」と思つた。「お前何しに來たか」グシャッとやつて居る。「腰掛が無いから困つて居るか？　お前は病氣見舞に來たか、腰掛けしに來たか？」うつかりあゝ云ふ人の、病氣見舞に行つたら可けませぬ。えらい目に遇ひます。

八萬四千由旬の椅子と不可思議倂脫

「今俺が椅子を取寄せてやる。マンジュスリー！　お前はもうありとあらゆることを知つて居る。どこか綺麗な椅子はないか？」「さうぢやなあ、此の界隈には、立派な椅子は無いが、東方何ぼう〳〵の所に――こゝらにある望遠鏡も屆かない遠方の世界。私等當分行かれぬ世界――そこにどえらい椅子がある。」と言ひます。それが八萬四千ヨジヤナ（由旬）の幅も高さもある大きな椅子です。由旬は日本のどの位になりますか、まあちよつと六七里位の距離です。しつかりした數は出て居りませぬ。そ

れ位の幅や高さのあると云ふ大きなものです。それをマンジュスリーが取寄せた。どう云ふ運送法で、持つて來たか分りませぬ。大方飛行機にでも乘せて來たのでせう。仰山なこと取寄せて、一丈四方の部屋に入れた。愚昧なものは、「あんな大きな椅子。八萬四千ヨジヤナの立體が、此の一丈四方の中へ這入るか。」と疑ふでせう。賢いものは、這入ると思つて居る。這入らぬものを、誰が取寄せますか。大阪の商人さんは、皆んな賢いから、算用して知つて居る。間に合はぬものは、取寄せやしませぬ。それを直き入れてしまつた。そこが面白い。それを不可思議解脫と云ふ。昨日も一寸此の御經に面白いことがあると云ふことを、申上げて置きました。なる程不可思議解脫です。一丈四方の中へ、八萬四千由旬の椅子が、無數に這入ると云ふことは、不可思議解脫せねば這入りませぬ。一丈四方の部屋が大きくなるか、椅子が小さくなるか、私淺學にして分りませぬ。けれども一丈四方が大きくなり、椅子が小さくなつて、這入つたと思ふ。そこが不思議で、どう云ふ譯で大きくなつたか、小さくなつたか分りませぬ。

毛孔に四大海水を入る

それ位の事は何でも無いことで、それから毛孔の中にありとあらゆる海の水を、入れたと書いてある。毛孔が大きくなつたか、海が小さくなつたか分りませぬ。陽電性の微粒子と、陰電性の微粒子に、變つてしまつたら、大抵のものは中へ這入ります。若し世諦因緣法の範圍で入れることが出來るならば、骨折らずに入れられます。けれども之は因緣法の範圍を出て、第一義諦で入れて居ります。之は私共一寸藝が出來ませぬ。之が廣略相入して居る所です。此の經は餘程面白いことがございます。時間がございませぬからざつと申上げて置きます。

菩薩不二法門

文殊の絨默と維摩の感嘆

さうして說いて居る所は、菩薩不二の法門です。

菩薩不二法門

之は何であるか。色々マンジュスリーの尻について來た、御見舞の連中に、「お前どう思ふ。お前はどう思ふ。」皆が非マラキールティの寢臺の下から、首を上げて答へて居ります。「可かん〳〵。」何ぼう氣張つて言つても、六十點位より呉れぬ。「マンジュスリー！　お前どう思ふ。」默つて返辭をせぬ。何んにも言はぬ。さうすると、非マラ

キールティびつくりして、「善い哉〳〵、マンジュスリー、お前は餘程えらい。」と讃めてゐる。默つて居つて、讃められたのはあれだけです。餘計な事を言ふから尻尾を掴まれる。「默然として答へず。」と書いてあります。大抵これから難しいことを人が言つたら、之でやつてやらうと思ひます。どの位難問が出ても、默つて寢て居ると、大抵降參して歸る。

不二法門は言說文字を超越す

そこで此の不二法門は、言說文字を以て、現すべからざるものだ。不可思議解脫ですから、言說文字に引懸つたら、解脫は出來ませぬ。一丈四方の中に、八萬四千由旬の立體は、這入りませぬ。それが無量無數に、這入る譯はありませぬ。そこが不二法門の面白味であります。

如來種性とは如何

さうして段々言つて來た末に、もう一つ面白い事がある。「マンジュスリー、お前は何でも彼んでも知つて居るが、如來とはどう云ふものか。如來の種と云ふものはどう云ふものか？」。

如來種性

如來の種性は不可思議解脫にして善惡を認めず

を問ふ。さうしたら「一切煩惱惡不善業悉く是れ如來の種なり。」と答へて居る。之は昨日一寸申上げました。「一切煩惱惡不善業が如來の種だ。」そこで皆んなびつくりした。舍利弗尊者以下二乘の聲聞弟子が、「これでは迚もいかぬ。吾々は煩惱を斷じようと思つて居つた。既に煩惱を斷じ終つて居る。煩惱を斷じてしまつた者は、到底如來になれる見込は無い。」それは一切煩惱惡不善業が、如來の種、其の種を取つてしまつて、如來になれつこは無い。「永く我は如來たるの見込は無い。」と書いてある。之がやはり不可思議解脫の義でございます。煩惱と云ふものを認め、菩提と云ふものを認めたら、一丈四方の中へ、八萬四千ヨジヤナの立體は這入りませぬ。煩惱は實體無き空のもの、菩提も空のものである。空の中に空は這入る。どんな狹い所へ行つた所で這入ります。之が不可思議解脫の所です。善もやはり如來の種。何故惡不善業が如來の種だと云つたかと云ふと、如來の種は善だと云ふと、彼等が考へ違ひをすると可かぬから惡だと云つた。如來の種としては、善も惡も初めから認めて居りませぬ。之が此の經の說相でございます。

この經では、二乘 Çrāvaka, Pratyekabuddha 聲聞緣覺と云ふものは、Anuttara-Samyaksaṁbodhi を證ることは出來ない。如來になれないと云ふ議論でございます。

二乘は無上正偏智を證得せず

第九　入楞伽經

原字――菩提流支譯――實叉難陀譯――原字の意義――求那跋陀羅譯――求那跋陀羅譯四卷、菩提流支、實叉難陀譯各十卷――楞伽島と肉食人種――怪物羅刹王羅婆那――釋迦羅婆那王を說伏す――この經には原本あり――初めの一卷は怪物相手、後の九卷は大慧相手――九卷の品題――偈頌一卷――この經の說相――有見――無見――斷常二見――內道と外道――一字不說――楞伽經と禪宗

原字

Laṁkāvatāra Sūtra

入楞伽經

菩提流支譯　Bodhiruci（菩提流支）舊譯

實叉難陀譯　Çikṣānanda（實叉難陀）新譯

之はランカーヴタ一ラと云ふ御經でございます。

原字の意義

laṁkā-avatāra

aが二つついて居ります。ランカーアヴタ一ラであります。之はランカーと云ふ所へ行つた、這入つたと云ふことで、入楞伽と譯して居ります。楞伽はランカーの音の儘でございます。地名でございますから、譯はつけられませぬ。之も澤山譯がございます。三つ程譯がございますけれども、普通使ひますのは、ボヂルチの譯と、實叉難陀の譯でございます。もう一つ舊い所の譯に、

求那跋陀羅譯

Guṇabhadra（求那跋陀羅）

があります。さきの勝鬘經を譯した人でございます。唐の玄奘以前を舊、以後を新譯と云ひます。實叉難陀は、則天武后の時の人でございます。舊い求那跋陀羅の分は、少し不完全で、四卷に譯して居ります。「楞伽阿跋多羅經」と云つて居ります。菩提流支と實叉難陀のは、共に十卷ものでございます。

求那跋陀羅譯四卷　菩提流支實叉難陀譯各十卷

之は迚もやゝこしい御經で、場所はランカーと云ひますが、これは今のセイロン島でございます。其の頃はランカー島と云つたものでございます。こゝは昔から人間を

楞伽島と肉食人種

食べるものが居る所だと云つて、恐れた所でございます。どうも分りませんが、熱帶では、昔は人間を食つて居つたものらしうございます。シベリヤやあちらの北の方は、野蠻なことは、南に負けませぬけれども、人間を食べることは無い。熱帶は皆食つた。ランカーの島でも、食つたのでございます。ずつと向ふへ行きまして、ニューギニヤの島では、今日でも人間を食ひます。臺灣の生蕃は、首は取りますが、食べないやうでございます。昔は食べたかも知りませぬ。私共色々のものを食つたことがございますが、これだけは食つたことがございませぬ。どんな味がするか知りませぬ。

怪物羅刹王羅婆那

こゝは Rāksasa と云ひまして、怪物の居る所と言つて居る。印度の三角に尖つた所に、海峽がございます。ちよい〳〵島がございます所を、船でつなぎまして、橋が架る所だけ鐵道で、聯絡して居ります。どうにも行けぬ所だけは、船でつないで居ります。私も通つて見た事がございます。其の間の海峽に眞珠が出る。印度で mani（摩尼）と云つて居ります。此の摩尼珠は、非常に尊いもので、ダイヤモンドと、ならび稱せられた寶石であります。よい工合に取れる時もございますけれども、昔から北風に吹きつけられて、ランカーの島に船が行きますと、捕虜になるのは厭ひませぬけれども、撲殺して食つてしまふ。「向ふへ行つて惡風に吹かれて、ランカーの島へ行つて食はれたげな。」と云つて、恐れてランカーの島へは、誰もえう行きませぬ。そこには頭を十有つて居る、羅婆那王と云ふ怪物が居ります。昔からさう云ふ說があると見えます。十頭のラークシヤサが居る。忙しい先生もあつたもので、一つの口でさへよい加減に忙しいのに、十も口があつたら忙しいことでせう。又人間を食ふには、十位首をつけて置かんと可けぬのでせう。

釋迦羅婆那王を說伏す

最初其の十頭のラークシヤサ、羅婆那王を說き伏せて居る。佛になると上を飛行機で行きますから、羅婆那王に「汝知るべし。」と書いてあります。十の頭に耳が二つづゝ合計孔が、二十あいて居つたから、よく聞こえたでせう。最初の間は、羅婆那王でよかつた。けれども段々話が難しくなつて來ると、怪物の親方では可かぬやうになつた。

この經に

大慧と譯してありますが、Mahāmati と記憶して居ります。この方が其の後ずつと

は原本あり

説法の相手になつてゐる。此の御經は原本があります。光壽會で飜譯しますと、私が譯さねばならんのですが、閑が無くて懈けて居ります。

初めの一卷は怪物相手後の九卷は大慧相手

此の大慧と云ふ菩薩が、佛の説法の相手に出て居ります。「大慧汝まさに知るべし。」と云つて、十卷のうち初め一卷が、怪物相手で、あとは皆大慧相手です。

九卷の品題

羅婆那王勸請品（怪物相手）第一　集一切法品第二之一　集一切法品第二之二
二　集一切法品第二之三　無常品第三之一　無常品第三之二　現證品
第四　如來常無常品第五　刹那品第六　變化品第七　斷食肉品第八
陀羅尼品第九

偈頌一卷

其の後に一卷

偈頌品第十之一　偈頌品第十之二

偈頌は伽陀です。

この經の説相

之は全體何を言つたものか、ゴチヤ〳〵ゴチヤ〳〵と、色んなことが説いてあります。此の大慧と云ふ先生は、其の邊に居つた人か、ついて來たか、飛行機で來たか、それは知りませぬ。兎に角今迄佛の説かれた、ありとあらゆることの質問を、皆んなこゝで寄せて、總ざらへをやつて居ります。佛が斯う〳〵言はれた、之はどう云ふ事か。斯樣々々言はれた、外の外道は斯う云ふことを言ふ。どう違ひますか。色んなことを言つて居る。之を一々言つて居りますと、地球に六廻轉や七廻轉やらさねばならぬ。一時間やそこらの時間では駄目でございます。

大體を見ると、凡てのものは、

有見　有　見

無見　無　見

斷常二見

の二つがあります。凡てのものを有なりと見るのと、無なりと見るもの。常住と見るのと、無常と見るもの。兩方の極端がございますが、兩方とも間違つて居ります。

之も昨日申上げました。有るのでも無い。無いのでも無い。眞中でも無い。之は亦どこでも引つ着いたらいかぬ。此の有見無見を、色々の言ひ方で、ずつとたゝき破つてあります。これを斷常二見と云ひます。

内道と外道

もう一つは外道。内道は佛教で、佛教以外の道が外道。佛教以外の道、ありとあらゆるものが外道です。「それに色々佛教と、同じことのやうに見えることがある。それは同じやうな事を言ふけれども、斯う云ふものは間違ひである。それに喰つ付いては可かぬ。信じては可かぬ。」とたゝき壞してあります。

一字不説

これで面白いのは、やはり文字を説かぬ、「一字不説」と云ふことです。「我は菩提樹の下に於て、無上道を成じてより今日に至る。これから涅槃に入るまで、一字も説かぬ。一語も言はない。言語文字を認めない。」斯う云ふことを説いてあります。

楞伽經と禪宗

そこで楞伽經を禪宗の人が、喜んで讀みます。「文字に拘泥し執着したら、過ちが出來るのだ。」斯う云つてあります。禪宗では、「文字に引つ着いて可かぬ。大悟徹底するのであつて、文字を認めることは皆誤りである。」斯う言つてあります。此の經あたりから、禪家の議論の根底が、出來て居ります。今并マラキールチ、ニルデーシャ（維摩經）によりましても、サンドヒ、ニルモチヤナ（解深密經）によりましても、兎に角「二乘と云ふものは、長くアヌツタラサムミヤクサムボヂの心は發せぬもの、如來になれぬものだ。」と云ふことを書いてございますが、これには「彼れも亦追て目が醒める時があるのだ。目が醒めずに、寢て居る間は、如來になれぬ。けれども目を開いたら、又光も見えるだらう。」と書いてある。道樂息子の御父さんたちは――醒めぬこともありますが――大抵醒めるだらうと思つて居ります。之は却々大切な御經でございます。一字不説と云ひまして、禪家では非常に重んずる經でございます。

今迄のは議論ばかりのものでございますが、今度は一寸違うたものを申上げます。今日は難しうございます。御聽きになる方も苦しうございませうが辛棒して下さい。

第十　般舟三昧經

原字――巴利語の音――支婁迦讖譯――Pratyutpanna の意義――この經の說相――samādhi の意義――品題――日々の行狀を說く代表的經典

原字　Pratyutpanna buddhasammukhā-vasthita-samādhi sūtra

般舟三昧經

巴利語の音

えらい長い御經でございますが、之は巴利語の音を、寫したものでございます。之も古い譯は、支那の譯のうち、可なり舊いもので、後漢の時、蘇州か南京か、上海近邊で譯したものでございます。上海の出來ぬ前、吳の時の譯でございます。

支婁迦讖譯

Pratyutpanna の意義

Pratyutpanna と云ふことは、現在存在すると云ふ字義でございます。之を支那の譯者は、常行と譯して居ります。Existing of present moment と云ふ字義でございます。

この經の說相

之はどう云ふことを言ふたのか？今迄のは、皆有とか空とか、無とか不可思議解脫と言つて居りますが、今度は全然さう云ふことゝ違つて、日々吾々は何をなすべきか？常に行ふべきことは何か？常に行つて、サマーデイを取るのは、どう云ふサマーデイを取るのか？常に取るべきサマーデイは何か？之は憶念彌陀佛と云うてある。憶念彌陀佛が吾々の日常なすべき所のサマーデイだ。

Samādhi の意義

サマーデイ（Samādhi）と云ひますことは、定と云ふ字が書いてありますが、禪定と譯してあります。兎に角、心を一所に止めて、散亂させないと云ふ字です。日常心を一所によせて、散亂させないのは、何に心をよせて、散亂させないがよいか。それは憶念彌陀佛。阿彌陀佛を念ふと云ふ所へ、心をよせて、散亂させないやうにやつて置くのが、一番よろしい。御經は短い御經でございます。

品題

卷上　問事品第一　行品第二　四事品第三　譬喩品第四
卷中　無著品第五　般舟經四輩品第六　般舟經授決品第七　般舟經擁護品第八　般舟經羅耶佛品第九
卷下　請佛品第十　無想品第十一　十八不共十種力品第十二　勸助品第十三　師子意佛品第十四　至誠佛品第十五　佛印品第十六

日々の行狀を說く代表的經典

斯う云ふ風になつて居ります。

之は唐の善導大師の、觀念法門にも引いてあります。Bhadrapāla 賢護を相手に、佛が說いて居ります。之は日々の行狀を說いた、代表的のものでございますが、經文は餘り親しい經文ではございませぬ。

第十一　金光明最勝王經

原字――原字の意義――義淨譯――原本有り――鎭護國家の妙典――十卷三十一品――この經の基礎は三品――辨天は財を施さず――鎭護國家の功德――國王の德の第一は武備

今度は又一寸變ります。

原字　Suvarṇa-prabhāsottamarāja sūtra

金光明最勝王經

原字の意義　Prabhāsottamarāja の o は s と u の引つ着いたものです。suvarṇa は金、prabhāsa は光、uttama は最勝最上と譯してあります。ut には、最と云ふ義は無いのです。ud と云ふ字が、勝の義でございますから、英語で est を尻につけて、最大級になると同じく、梵語の方では tama をつけて最勝としたので、この場合udの dは、tamaの t に會して、連聲法によつて、前者が後者に同化され、uttama となつたのであります。

義淨譯　之は義淨三藏が譯して居ります。舊い譯もございますが、舊い譯は完全でございませぬ。そこで私共は、義淨譯の金光明最勝王經を、使つて居ります。

原本有り　之は原本を有つて居ります。只今光壽會でそれをすつかり書出して、私が飜譯する準備をして居ります。まだ譯しにかゝつては居りませぬ。初め三頁ばかり開いて見ましたが、知らん字ばかりありまして、びつくりして居ります。

鎭護國家の妙典　これは又非常に面白いお經で、此の經は、鎭護國家の妙典といはれて居ります。全體の法門は、餘り難しいことは書いてございませぬ。やはり空が主でございます。之は長いもので、三十一品十卷になつて居ります。

十卷三十一品

序品　如來壽量品　分別三身品　夢見金鼓懺悔品　滅業障品
最淨地陀羅尼品　蓮華喩讚品　金勝陀羅尼品　重顯空性品　依空滿願品　四天王觀察人天品　四天王護國品　無染著陀羅尼品　如意寶珠品　大辨才天女品ノ一　大辨才天女品ノ二　大吉祥天女品　大吉祥天女增長財物品　堅牢地神品　僧愼爾耶藥叉大將品　王法正論品　善生王品　諸天藥叉護持品　授記品　除病品　長者子流水品　捨

身品　十方菩薩讃歎品　妙幢菩薩讃歎品　菩提樹神讃歎品　大辨才天女讃歎品　付囑品

この經の基礎は三品

斯う云ふ風になつて居ります。それで全體、此の基礎になりますのは、分別三身品、それから金勝陀羅尼品、重顯空性品、此の三品、空の義を顯して來まして、之が基礎になるものでございます。如來の三身を說き、さうして空の義を說きました上に――之はどれでも皆書いてあります。實は此の經ばかりでございませぬ――そこにもう一つ面白いのは、「ありとあらゆる天やら神さんが出て來て、此の經を讀んで居るものを保護する。」と云ふことが書いてあります。法華經にも相當書いてございますが、迚もえらいものでございます。いづれ此の經はずつと飜譯致しまして、飜譯致しましたものを、會員の方に講義して參りますするが、今日はあつさりやつて置きませう。

辨天は財を施さず

之は今日申上げなくてもよいことでございますが、大阪あたりにちよい〳〵あることでありますから申して置きます。之に大辨才天、辨天さんのことがあります。Sarasvati と云ふ、Mahābrahman（大梵天）の皇后さんです。之は金を貰ふ時に、阿呆が貰ひに來る。「大辨才天女品の中には、學問したければ、學問を授けてやる。智慧が欲しければ智慧を授けてやる。」と書いてあるが、金をやるとは書いてありませぬ。大吉祥天なら、金をやらうと書いてありませう。阿呆者が辨天さんに金を貰ひに來る。仕入れて居らぬ品物を、買ひに行くやうなものです。眞宗の人はそんな所へ貰ひに行きませぬ。それより帳面でもしつかりつけた方が、よつ程儲かります。餘宗の人は、やらうとも云はぬものを、「呉れえ〳〵」と云つて、仰山參ります。眞宗の人には無いが、大阪二百萬の中には、さう云ふ馬鹿な人が、まだあると云ふことだけ言つて置きます。

鎭護國家の功德

一寸申し後れましたが、此の經の功德を說きまするうちに、「王さんが此の經を聞くと、大變功德になる。鎭護國家の功德がある。其の第一に、兵力が强くなり、外國が侵して來ぬ。」と終始一貫して言つてある。之が此の經のえらい所で、釋迦如來の如來たる所以もそこにある。此の頃我國にも、兵力を彼れ是れ云ふ馬鹿な者が居る。それはまだ金光明經を聞かぬものです。

國王の德

私共は大なる兵力維持論者です。兵力を以て暴を加へるのは可かぬ。暴を加へに來

武備の第一は

たものに、暴を加へさせぬやうにする所に兵力がいる。兵と云ふものは、動かしては可かぬ。動かさずして、向ふを歸服させるやうにせぬと可かぬ。私等お蔭で大きな體をして居ります。どこへ行つても向ふから逃げる。胴體が大きいからです。こんなものが來て、あばれたら叶はぬと云ふのでせう。……所がこまいものに對しては直き馬鹿にする。兵の要領はこゝにあります。國に武備があれば、敵國が侵しませぬ。此の經を護持したものは兵力が強くなる。兵力が強くなつたら外國が侵して來ぬ。それが國王の功德の第一に置いてある。吾々の所の會員には、さう云ふ馬鹿なことを言ふ人はありませぬが、近頃は一部の若い者、肺病でひよろ〳〵して居る樣な者が、兎角軍備を馬鹿に致します。

第十二　能斷金剛經

原字――玄奘譯――鳩摩羅什譯――菩提流支譯――眞諦譯――眞宗法門とこの經の地位――原字の意義――この經の眞價――この經の難解なる所以――この經の說相

――如來は我執有情執無し

原字　Vajracchedikā prajñāpāramitā sūtra

能斷金剛經

玄奘譯　玄奘三藏

鳩摩羅什譯　Kumārajīva（鳩摩羅什）譯

菩提流支譯　Bodhiruci（菩提流支）譯

眞諦譯　Paramārtha（眞諦）譯

眞宗法門とこの經の地位

玄奘三藏は、能斷金剛般若波羅密多經と譯して居ります。クマーラジーヴ（鳩摩羅什）、ボヂルチ（菩提流支）、及び眞諦の譯があります。普通金剛經と云つて使ひます。私共此の御經を始終使ひますが、此の御經によらないと、眞宗の法門を顯すことが出來ませぬ。此の御經は、洵によい御經でございますが、同じことを、何遍も言つてあるので、よく見ないと解りにくい事もございます。

原字の意義

vajra と云ふことは、ダイヤモンドと云ふことです。cchedikā は、之を斷ること、

この經の眞價

diamond cutting（ダイヤ切り）となります。がダイヤは、ガラスよりずつと堅うございますから、却々斷れませぬ。指にはまつて居るのを、ちよつとやつてみても解ります。Prajñā は智、Pāramitā は渡す、一緒にして智度と云ふことになります。

何故此の經が値打があるか？之はありとあらゆるものを、皆んなたゝき壞してしまつたところにあるのです。別に般若心經と云ふものがございます。即ち Prajñāpāramitā hṛdaya Sūtra で、之は般若經六百卷の、エッセンスを書いたものです。私の講釋したものもございますから御讀み下さると分ります。其の般若心經等でも、色受想行識、及び其のうつるもの、其の境界を、皆たゝき壞して、「一切皆是れ空なり。」と云つた。所がまだそれではいかぬ。矢張り空なりと云ふけれども、空なりと思ふ心が殘つてはいかぬ。我が心が空だと知つた。が其の心だけではいかぬ。「如來は斯樣に說いた。」如來が殘る。色んなものが殘る。そいつをもう一つたゝき壞さなくてはいけない。「私は今日斯樣に聞いた。」それが可けませぬ。「今日聞いた。」と云ふが、大體言つた人は無い筈であり、さう云ふ場所もない筈である。そこへ引つかゝると間違ひであります。それを取つてしまふのに、非常に骨が折れる。實際私共却々除れませぬ。やはり引つ着く。餘程氣を附けて取つて居るが、却々除れませぬ。その難しいことは、恰もダイヤモンドを斷るやうに、難しいと云ふことから、能斷金剛と云ふのであります。

この經の難解なる所以

此れは陰電子の微粒子と、陽電子の微粒子に分けるやうに、一寸いきませぬ。第一義諦は、直覺せねばならぬのですから、世諦因緣法では取れませぬ。此の經は世諦因緣法より、第一義諦に直面して說いてあります。非常に解釋がしにくい。文字は極めて解釋し易い御經でございますが、意味がどうも取れませぬ。之は私嘗て講義した事がございます。原本もはつきりございますし、文字も極めて易く、從つて飜譯も、金光明最勝王經等よりは、樂でございますから、いづれ其のうちに一遍飜譯致しまして、又何かの機會に講義しようと思ひます。今日は時間がございませぬ。簡單にやつて置きます。全體どう云ふことを言つたかと云ふと、最も重大なのは、「大抵の事は打ち壞しても、如來だけは認めようとする。如來と云ふことを認めたら、認められる如來があり、認める我があるから、やはり執着して居る。其れを壞して行かねばならぬ。」か

う云ふことであります。

この經の說相

それでは結局此の經は、どう云ふ事が言つてあるか？、Subhūti 善現と云ふ御弟子が、說法の相手でございます。「如來は阿耨多羅三藐三菩提、無上正徧智と云ふことを、悟つたことがあるか？」と佛が問うて居られる。善現曰く、「さう云ふことは、私承つたことがございませぬ。」と言つて居る。それから、「如來は一切衆生を、濟度したと云ふことがあるか？」「さう云ふことは承つて居りませぬ。」それから、「一切法を說いたと云ふことがあるか？」「さう云ふことも、承つて居りませぬ。」さうなければならぬ。一切衆生を濟度したと云ふことになると、「如來は我執あり、有情執あり。」と云ふことを言つて居る。玆が面白い所であります。以下ずつとならべてありますが、一遍に申します。

如來は我執有情執なし

如來が一切法を說いたと云ふと、說いたものと、說いた人となければならぬ。さうすると如來自身、我と云ふものを認めなければ、說くと云ふことは出來ぬ。であるから我執に引つかゝつて來る。「一切衆生を濟度した。」と云ふことを認めるならば、如來は我と云ふものを見て、濟度される衆生と云ふものを、見なければならぬ。今度は有情に引つ懸つて來る。如來は我執有情執が無いものだから、濟度せられるものも無ければ、することも無い譯である。阿耨多羅三藐三菩提も同じ事で、こゝまで來なければ、究極した所に行かれませぬ。「能斷金剛。」それを口で言ふことは、何とでも言へます。けれどもダイヤモンド、カツチングで骨が折れます。得てひつかゝります。いづれもう一遍此經だけを講釋します。あと二十分よりありませぬから、今日はもうゆつくりやれませぬ。却々面白い御經でございます。

第十三　大薩遮尼犍子授記經

原字――授記の義――大薩遮尼犍子の義――この經の譯者――この經と諸宗派――尼犍子は外道――品題――說法の場所――外道も佛敎――耶蘇敎も佛敎――諸外道皆同佛法一橋梁――諸宗旨の未究極と佛說の尊重――王論品と其の說相――舍利弗と尼犍子の問答――目連と佛の問答――摩訶迦葉と尼犍子の問答――諸弟子不可得云々の疑を質す――一切のもの凡て佛敎一乘法

今度は極めて面白い代表的の御經を申します。

原字

Mahāsatya-nirgrantha-putra-vyākaraṇa-Sūtra

大薩遮尼犍子授記經

授記の義

vyākaraṇa は授記と譯してありますが、豫言と云ふ意味のある字でございます。佛が Acknowledgement を與へる。それが毋ヤーカラナで、「お前は必ず佛陀になる。阿耨多羅三藐三菩提を悟ることが出來るものだ。これから未來何時の世に於て佛になれる。」斯う佛に言つて貰ひませぬと、阿耨多羅三藐三菩提が悟れませぬ。それのないものは嘘です。吾々は、「他力の信心によつて、極樂に往生する。」と釋迦佛から毋ヤーカラナを受けて居ります。それで私共は安心して、「無上正徧智が悟れるのだ。」と思つて居りますから、横着をきめて居ります。けれどもさうで無いものは、言つて貰はぬと駄目です。

大薩遮尼犍子の義

Mahāsatya-nirgrantha-putra は人の名でございます。それが毋ヤーカラナを、受けたことが書いてあります。

この經の譯者

此の經は菩提流支が譯して居ります。所が Bodhiruci が二人ありまして、今日申すのは、曇鸞大師と同じ時代の、舊いのでございます。唐にも一人ありますが、それとは違ひます。

この經と諸宗派

普通此の經は、どの宗旨でも、使つて居らぬ御經でございます。私は非常に尊い大事な御經だと思つて、始終讀んで居ります。從つて少し長く二十分ばかり、此の經の要領を申します。

尼犍子は外道

マハー・サトヤ・ニルグランタ・プトラと申しますと、外道の人でございまして、佛教の人でございませぬ。佛教以外の宗旨、今日で言へば耶蘇の碩學と云ふやうな人で、尼犍子は、Nirgrantha と云ふ一つの外道の祖師でございまして、非常にえらい人で、それの名前が Satya と云ふのでございます。サトヤと云ふのは、巴利語でサッチヤと言つて居ります。之は昨日申しました、道理と云ふ字で、諦と譯しました。眞實の道と云ふ時に、實諦と申しますが、茲では人の名です。

之は斯う云ふ順になつて說いてございます。十卷あるものでございまして、

品題

卷第一　序品第一　問疑品第二　一乘品第三之一
卷第二　一乘品第三之二　詣嚴熾王品第四
卷第三　王論品第五之一
卷第四　王論品第五之二
卷第五　王論品第五之三　請食品第六　問罪過品第七
卷第六　如來無過功德品第八之一
卷第七　同　第八之二
卷第八　同　第八之三
卷第九　同　第八之四
卷第十　詣如來品第九　說法品第十之一　同　第十之二　授記品第十一
信功德品第十二

說法の場所

之はどう云ふことを言つたかと云ひますと、鬱闍延國で、之は說かれて居りますが、洵に面白い。吾々も此の御經によつて、非常に利益を受けました。

外道も佛教

第一に佛が、マンジュスリーを相手に、「菩薩と云ふものは、斯う云ふ功德があるものだ。」と斯う云ふことを言はれまして、十波羅密をすつかり說いて居られますが、之は普通どの經にもございます。其の中最も吾々の驚きましたのは、此の世界に、ありとあらゆる所の外道と名づけるものがある。Sañjaya, Nirgrantha 等と云ふやうな、佛教以外の教がある。併し乍ら之は如來住持力の故に方便である。「種々異學の相を行ずと雖も、皆同じく佛法にして、一つの橋梁、度るに更に餘の濟りなし。」斯う云ふ氣持のよいことが、書いてあるのは、此の御經だけでございます。

耶蘇教も佛教

さうでございますから、私は此の御經によつて、耶蘇教も卽ち佛教であると信ずる。「あれは洵によいことを教へた所の教である。たゞ究極をして居らぬ所があるけれども、一方としては實に結構なことを教へた。之は佛教の中の一つである。」斯う私は信じて居る。何によつて信じたかと云ふと、此の經によつて斯くの如く信じたのである。

諸外道皆同佛法一橋梁

此諸外道善男子等　雖行種々異學相
皆同佛法一橋梁　度更無餘濟故

諸宗旨の末究極と佛説の尊重

皆さんは、此佛説を重んじて居らぬといけませぬ。之を誤まつた者は邪道です。「耶蘇教、マホメット教、皆佛教に行く所の一つの橋梁、外に濟るものは無い。」よいことを言つてある。外の宗旨の方は究極して居らぬから、斯う云ふことはえう言ひませぬ。佛教と云ふものは、外のものを全部入れて居りますから、「何でも佛教の一部分だ。尊とい教だ。」と思つて信仰して居ります。「究極はして居らぬけれども、一部分として完全なもの。」斯う私は信じて居ります。

王論品と其の説相

斯う云ふことを、佛が説かれて居る時に、サトヤ、ニルグランタ、プトラと云ふ外道の大論師が、嚴熾王と云ふ王さんの所へ來て、王さんに政を論じて居る。王論品と云ふのがそれです。此王さん亂暴な先生で、無茶をやる人ですから、ニルグランタは、「專制をして可かぬ。」と云つて、世間道を説いて、其の後とで、「なる程ニルグランタ大師！　あなたの言ふことは、實に結構な説ぢやが、此の世界に於て、どう云ふ人が偉いだらう。」「何はどうか。」と云つて、ずつとならべて、「あれはいけませぬ。あれは斯う云ふ説であります。之もいけませぬ。之は斯う云ふ説であります。」と一々説を

擧げて、最後に王さんが、「私はどうや。」と言つた。其の王さんとても勢のよい人で、人を殺す、亂暴をやるから、「あなたは亂暴するから可かぬ。あなたは馬鹿です。」と言つた。そこで王さんが怒つた。「俺を馬鹿だとは怪しからぬ、叩き殺す。」と言つた。ニルグランタは、「斬るなら斬られるから待つて下さい。あなたを馬鹿だと云つた私も馬鹿だ。」「さうかお前も馬鹿か？どう云ふ所が馬鹿か？」「馬鹿者に本當のことを言つた私が馬鹿でした。」と言つた。却々面白い問答です。それで王さんびつくりした。「俺が惡かつた。確かに俺が馬鹿だつた。」なる程、馬鹿者に本眞のことを言つたら馬鹿にされる。馬鹿者に、「貴樣馬鹿だ。」と云ふと怒る。「賢い」と云つてやると、本當か知らんと思つて喜ぶ。馬鹿者は、おだてんと可けませぬ。あなた方、馬鹿の相手をなさる時は、煽てぬと可かぬと思ひます。本當を言つては可けませぬ。「世界で誰が賢いか？」「釋迦如來と云ふ人があつて之が賢い。」と云つて、釋迦如來の賢い功德を讃嘆して居ります。サトヤニルグランタ、外道の大論師から、「これだからえらい。これだからえらい。」と讃嘆せられて居る。「こんなに偉いお前が、其の位偉いと云ふの

なら、そこへ一緒に行かう。」斯う云つて佛の說法の所へ、ニルグランタは、王樣と一緒に出て來て居るのです。これから後とに、一乘究竟の非ヤーカラナの値打が分るのです。そこで「一切外道佛法なり。」と云ふ、迚も大きな所を出して居ります。けれども法門に就いては、斯う云ふ工合になります。

舍利弗と尼犍子との問答

ニルグランタと王樣が、一緒にやつて來ると、第一に聽いたのが、佛の會座にある所の、舍利弗尊者です。これは偉い先生です。之が斯う云つて聽いた。「サトヤニルグランタ、あなたは何しに此處へ來たか。佛を見る爲めに來たのか、それとも法を聞くが爲めに來たのか？」其の時に、サトヤニルグランタは、「私が佛世尊の所へ來たのは、佛を見る爲めでもなければ、法を聞くが爲でも無い。一切法の爲に、佛の所へ來たのでも無い。シヤーリプトラ！如來と云ふものは、見ることも知ることも出來ぬ。一切知る者無し。……」すつと長い間說いて來て居る。さうして、「法の爲に來たのでは無い。來ないで來る。一切道不可得不可見。如來故に如來を見に來たり、法を聞きに來るか。」と言つて、ポンとやつた。

目連と佛の問答

其の次に Maudgalyāyana（目連尊者）は、又ガーンと來よると思つて、「世尊此のサトヤニルグランタと云ふ人は、全體外道の人です。佛教の人では無い。如來の弟子で無い。其の者がどれだけの衆生を敎化して、無上道心を發させて居りますか。」佛がマウドガリヤーヤナにいはれるには、「此のサトヤニルグランタは、色々の形を以て、一切衆生に無上道心を發させる。今一々言うたら大變だが、少分を說いてやらう。總て外道の姿をしやうが、何の姿をしやうが、如來は一切の相、一切のものによつて、無上道心を起させるやうにして居るのだ。」といはれて居ります。

摩訶迦葉と尼犍子の問答

最後に Mahākāçyapa（摩訶迦葉）大弟子が、ニルグランタに問うて、「お前は何故無量の諸佛を供養し、無量無邊の功德を具足成就して、無上道を證らぬか。それだけ値打があつたら、外道の姿をせんでもよいではないか？」此の答が非マラキールチ、ニルデーシヤと同じやうに、奇拔にやつて居ります。さき申しました、能斷金剛經と同じやうな答をして居る。「大德カーシヤパー！私は若し菩提と云ふものを見、此の菩提と云ふものを、證ると云ふことがあつたら、私は無上道を得るだらう。」と。さうし

諸弟子不可得云々の疑ふす

たら、カーシヤパーが、「どうもサトヤ仙人には、無邊の衆生、阿耨多羅三藐三菩提を、既に得たものもあり、これから得るものもあり、今現に得る者もある。出來ぬことは無いではないか、出來相な話では無いか。」サトヤニルグランタ曰く、「それはお前のやうに、無邊の衆生が、阿耨多羅三藐三菩提を成ずると云ふが、それは驕慢の衆生が、出放題な考へをして居る。そんなことはありやせぬ。何を以ての故か。カーシヤパー！第一義諦の上に於ては、菩提と云ふものは不可得のものだ。菩提と云ふものは無爲。一切の爲を離れて居る。菩薩も亦不可得。不可得の菩薩が、不可得の菩提を得ると云ふことがあるか。」それでもう默つてしまつた。

所が外の御弟子が承知しません。カーシヤパーは、「不可得のものが、不可得のものを、證ると云ふことがあるか？」それで解つた。偉い人はよいが、下廻りが解りませぬ。それから下廻りの者が、「どうか吾々の疑念を解いて下さい。今の問答では分りませぬ。不可得の者が、不可得の法を證ると云ふことがあるかと言はれて、解つたやうにして居りますが、私解りませぬ。ニルグランタ、それはどうなります。」「それぢやお前等の程度に話してやる。ニルグランタは、將來かく〳〵かく〳〵の如來になるのだ。」と云ふ、佛が非ヤーカラナを授けて居ります。其の非ヤーカラナがあるが故に、此の經をマハー・サトヤ・ニルグランタ・プトラ・非ヤーカラナ・スートラと云ふのです。

一切のもの凡て佛教一乘法

これで以て初めて、「佛教以外の者も、一切佛教である。佛教以外のものも、即ち佛教の一法として、之を取扱ふ。それによつて、一切衆生を教化するものである。」と云ふことが、此の經によつて分ります。「菩提と云ふものは、不可證のもの不可得のものだ。菩薩と云ふものも、不可得のものだ。」と云ふ、此の一乘の法を說いてあります。

第十四　大方廣佛華嚴經

原字――佛陀跋陀羅譯と實叉難陀譯――般若譯普賢行願品――說明の困難――說法の場所と人間離れの所以――複雜廣大の法相――avataṁsaka の義と華嚴との關係――品題――菩提樹下の說法――其の說相――菩光明殿の說法と其の說相――三十三天の說法――夜摩天の說法――兜率天の說法――他化天宮の說法――菩光明殿第

二回說法――第三回說法――重閣講堂の說法――佛教の構造に就て――說法聽聞者の戶籍帳――この經の主題は信――十進法――普光明殿第二會の說相――第三會の說相――この經は廣略相入す――廣略相入は大乘經典の特徵――信即成佛――釋迦佛の說法は一品のみ――如來現相品の說相――普賢菩薩が立役者――佛も菩薩も內證の智は同樣――普賢の原字――普賢の意義――普賢の願行――願は行を伴うて初めて成就――この經の結歸は普賢行――入法界品の說相――善財童子の發心と普賢菩薩――善財の質問と普賢の回答――普賢行の要點と阿彌陀如來の資本――智者は利用し愚者は害用す

原字

佛陀跋陀羅譯と實叉難陀譯

Buddhāvatamsaka Mahāvaipulya Sūtra

大方廣佛華嚴經

之は舊い所では、Buddhabhadra の譯がございます。六十卷に譯して居ります。唐の Ṣikṣānanda の譯して居りますのは、八十卷ございます。先づ此のシクシヤーナンダの譯と、ブツダバドラの譯とが、普通でございます。

般若譯普賢行願品

もう一つ一番終ひの入法界品とも謂ひ、普賢行願品とも謂ひますが、之を特に四十卷に、唐の Prajñā が譯して居ります。之を普通日本では、六十華嚴八十華嚴四十華嚴と謂つて居ります。其の中で、唐の則天武后の時の、シクシヤーナンダの八十卷の譯が、一番完備して居りますから、それを私共使つて居ります。入法界品になりますと、プラジュナーの四十卷があるだけで、完備して居りますから、それを私共使つて居ります。

說明の困難

大體此の經は、斯う云ふ風に、洵に卷數の大きなものであつて、一寸手つ取り早く說明するのに困難でございます。そこで今日は、少し時間がかゝるだらうと思ひます。兎に角八十卷行かねばならぬのですし、少し書かせても頂かねばなりますまいから、大分厄介でございます。

說法の場所と人間離れの所以

全體此の經は、一寸人間離れがして居ります。人間離れがして居ると云ふのは、どう云ふことかと云ひますと、之を說いた場所も、甚だ難しい所で、外の經は、王舍城の耆闍崛山であるとか、舍衛國の祇樹給孤獨園で說いたとか、色々說いた所が、印度の

中にございます。けれどもこの經は、印度の中で無い所で、說いてございます。たゞ一つ世主妙嚴品と云ふ、初め暫らくの間だけは、菩提樹下の說法になつて居ります。後とのは普光明殿の說法とか、他化天會とか、須彌山頂會とか、夜摩天會とか、兜率天會と云つて、人間世界より外の世界であります。一寸人間離れがして居ります。併してこれは釋迦如來の、無上正徧智を證した所の相が說いてあるのです。

複雜廣大の法相

それで法を說きました法の相は、洵に大きなものです。大きなものと申しましても、たゞ文面が大きいと云ふだけでなしに、組織が頗る複雜廣大なものであります。なる程マハーヴイブルヤムの名のある通り。ヴイブルヤムは、昨日廣大なと云ふ字だと申しました。廣大の上に、尙ほ大がついて居ります。洵に大きなものが、容れてありまして、殆ど限界がつけにくい。一寸人間の頭では想像が出來ぬ。組織が複雜廣大になつて居ります。簡單に無量無邊とやつても、分ると思ひますが、さうは行きませぬ。

avataṁsaka の義と華嚴との關係

今此の經典の意味を申します。avataṁsaka と云ふ字は、之は華で拵えた所の輪です。耳につける耳輪も、やはりアヴタンサカと云ふ字を使ひます。兎に角輪です。何故、此の輪と云ふ字が書いてあるのを、華嚴と譯したか。華嚴と譯しますと、華で拵えた所の莊嚴と云ふことです。華の輪と云ふことが、どうして華の莊嚴と云ふことになるか。當り前ならば、花環と書かなければならぬ筈である。そこの所の意味が、私には解りにくうございます。昔から斯う謂つて來て居りますから、さう云ふ字があるのでありませう。Vyūha が莊嚴の意味に使つてあります。卽ち其の頭に、gandha (香)と云ふ字をつけて、gandhavyūha を、香の莊嚴と言つてあります。香水の香、花の香が、ガンダであります。それから致しますと、ヰューハに、莊嚴と云ふ義があるのであります。所が斯う云ふアヴタンサカと云ふ字を以て、莊嚴と譯しましたが、華の輪は綺麗ですから、莊嚴の義にはなりますけれども、私の梵語の學力未熟にして、十分申上げることが出來ませぬ。誰か梵語のよく分る人に、御聞きになるより仕樣がございませぬ。

品題

世主妙嚴品　如來現相品　普賢三昧品・世界成就品　華藏世界品
毘盧舍那品　如來名號品　四聖諦品　光明覺品　菩薩問明品

淨行品　賢首品　昇須彌山頂品　昇須彌頂上偈讃品　十住品
梵行品　初發心功德品　明法品　昇夜摩天宮品　夜摩宮中偈讃品
十行品　十無盡藏品　兜率天宮品　兜率宮中偈讃品　十回向品
十地品　十定品　十通品　十忍品　阿僧祇品　如來壽量品
諸菩薩住處品　佛不思議法品　如來十身相海品　如來隨好光明功德品
普賢行品　如來出現品　離世間品　入法界品

菩提樹下の說法

これだけでございます。これだけが一品二卷三卷のも、一卷に二品這入つて居るのも、色々ございます。迚も之をコツ〳〵やつて居つた日には、地球の一廻轉や二廻轉では可けませぬ。一括してやります。

全體此の世主妙嚴品、如來現相品、普賢三昧品、世界成就品、華藏世界品、毘盧舍那品、これだけが、菩提樹の下、印度の中で說かれてございます。詰り此の吾々の世界で、說かれたことになつて居ります。

其の說相

之は何を言つたかと言ひますると、吾々の信ずべき所の物柄、信ずべき所の法は、斯う云ふものだ、と云ふことを、これだけの間に說いてあります。

普光明殿の說法と其の說相

それから其の次に、如來名號品、四聖諦品、光明覺品、菩薩問明品、淨行品、賢首品、これだけが、普光明殿と云ふ所で、說いてあります。之は信と云ふことを、玆で言つてあります。

三十三天の說法

それから今度は、昇須彌山頂品、昇須彌頂上偈讃品、十住品、梵行品、初發心功德品、明法品、之は三十三天で、說いたものでございます。

夜摩天の說法

昇夜摩天宮品、夜摩宮中偈讃品、十行品、十無盡藏品、之は夜摩天と云ふ天で、說いたのでございます。

兜率天の說法

兜率天宮品、兜率宮中偈讃品、十回向品、之が兜率天の說法です。

他化天宮の說法

それから十地品、此の一品だけは、他化天宮で說いたものです。

普光明殿第二回說法

それから復たもとに戻つて來て、十地品、十定品、十通品、十忍品、阿僧祇品、如來壽量品、諸菩薩住處品、佛不思議法品、如來十身相海品、如來隨好光明功德品、普賢行品、如來出現品、

これだけを一括して、普光明殿で說いた。普光明殿第二回の說法です。

第三回說法　重閣講堂の說法

離世間品も、普光明殿で說いた。第三回の說法です。

入法界品、又印度へ戻つて、重閣講堂で之を說かれた。

斯う云ふ風に分れて居ります。

佛教の構造に就て

それで、之を一括して申しますと云ふと、之は佛教の構造を、形に於て示したものです。迚も言へませぬ。非常に大きな字で現してあります。言ひませぬと、無責任のやうで可けませぬから、一寸やつて見ませう。

說法聽聞者の戸籍帳

之を聽きに來て居る人の名でも、三枚程書いてあります。之が說法聽聞者の戸籍帳です。それからあとの世主妙嚴品と云ふものは、斯う云ふやうな偉い者が寄つて來た。第一に寄つて來た人が、釋迦佛はまだ何とも言はぬ間から、佛の功德を讃嘆して賞めて居る。何たら天王と云つて、天から降つて來たやうな先生ばかりで、此の世界にうよ〳〵して居る米食虫でないやうな、手輩が仰山居ります。だから此の御經は、米食虫だけの御經でありませぬ。化物の一丁目見たやうな、阿修羅、迦留羅、緊那羅、摩睺羅伽、鳩槃茶、之等は、皆化物見たやうな先生です。何を食つて生きて居るか知らぬが、却々やゝこしい連中で、難しい事を言つて居ります。大分學問しよつたのでせう。皆んな「智慧不思議なり。遙に衆生の心を知り、種々の方便力云々。」と云つて如來を讃嘆するのです。而しこゝらは大したことはございませぬ。

この經の主題は信

其の次に今度如來名號品から後とでございます。之は信ずると云ふことを言つてあります。信ずると云ふことは、洵に此の經の主なる問題で、信と云ふものが、總ての基礎になるもの、信は功德の母であり、一切の法を生み出すものであると云ふのであります。其の信によつて、受けるべき所の結果が、三十三天　夜摩天　兜率天　他化天と云ふ天宮の說法になります。卽ち菩薩と云ふものゝ階級を、五十二階級に分けて、一つ一つに何たらの德がある、何たらの德がある、と皆十宛で行きます。

十進法

外の御經は七とか八とか十二とかで行きますが、華嚴經はメートル法のやうに十進法で、一つことを云ふのに、之について十の義がある。其の一つに就いて十ある。いつも十の二乘で來ますから、非常な數字になつて來ます。之が菩薩の階級でござい

ます。無上正偏智を悟るに至るまでの間に、色々の功徳を積んで來る。其の功徳が書いてある。

普光明殿第二會の說相

それから次に、普光明殿の第二會になつて參ります。こゝは一寸變つて、普賢行の大分極まつた所へ來る。無上正徧智の所へ來ます。

第三會の說相

それから第三會の普光明殿。離世間品。之はそれからあとの作用を出したので、悟つたら何もせずに、晝寢をして居つたのでは、何にもなりませぬ。悟つたら悟つただけの藝をせねばならぬ。吾々飯を食う。飯を食うて寢て居つたら、病氣になつて死んでしまふ。やはり食うだけ働かなければならぬ。晝寢をして居つたら、菩薩の値打は無い。それからは一切衆生を、化益するとか、何とかせねばならぬ。それを書いてある。此の入法界品は、大きな品でございますが、一寸別でございます。

この經は廣略相入す

總て此の經と云ふものは、廣と略とあります。之が此の經の面白い所であります。廣と云ふのは、此の間から度々申しますやうに、總てのものをならべて行く時です。略と云ふのは一つです。第一日に其の事は申上げました。此の經は正しく廣と略と、相入れて居る。今申上げるやうに、色々樣々に、十進法で大きなこと、仰山なことを言つて置いて、「それが一つだ。一つのものが多であつて、多のものが一つだ。」ちやんと廣略相入して居ります。此の天宮の三つのものが、悟を開かずして、進んで行く所の、廣の相を說いた。それから前のは、略の相を說いた。それから悟つた後の働きを、廣で說いて、今度離世間品で、略の相を說いた。斯う云ふ具合に、廣略々々と來て居ります。

廣略相入は大乘經典の特徵

何故廣略で、斯うやつて說かなければならぬか、と云ひますと、之がさき申しました、マハーヴイプルヤムの特徵で、廣大で、ゴチヤ〳〵混雜して居るだけでは、値打が無い。廣大な相の儘、一つの毛孔になります。三千大千世界を、毛孔の中に入れる。昨日非マラキールチ、ニルデーシヤで申した通り、一丈四方に、八萬四千ヨジヤナ立方の椅子を容れる。椅子が小さくなつたか、部屋が大きくなつたか、どつちか知りませぬが、廣の相の儘略になり、略の相の儘、廣になる。大きさは增えもしなければ、減りもしませぬ。こゝにヴイプルヤムの特徵がございます。先づ佛一代の說法で、これ位道具を大きく陳列したのはございませぬ。

信即成佛

それから信と云ふものに就て、總ての責任を有たせる。信ぜよ。信じた時が、即ち悟つた時だ。と、信を以て、成佛までもつて來るのであります。

釋迦の說法は一品のみ

もう一つ、此の經の特徵に、面白い所があります。それは何か。これだけ長い澤山の說法の間に、如來現相品たゞ一品だけ、釋迦佛が說いた。あとは全部、外の人が言つて居る。色々の人が言つて居る中で、主力は文殊普賢に歸して居る。其の中最も主力は、普賢菩薩に歸して居ります。

如來現相品の說相

如來現相品と云ふのは、どういふものか。釋迦如來大寂定によつて、華嚴三昧を顯し、大光明を放つて、私は此の通りえらいことを思つて居る、と云ふことを御示しになつた。えらい人は、それで解つたが、後の者は、其の光明を見て、あれは全體どう云ふ譯の、光明でございますか？　と四十通りの質問を出した。其の四十通りの質問に、ポツ〳〵答へて來て居ります。其の答へた人は、色々ございますが、主として普賢菩薩が、其の四十通りの質問に、答へて居ります。普賢菩薩は、同じく自分も、華嚴三昧に入つて、三昧力を以て、それに答へて居る。

普賢菩薩が立役者

全體此の經は、さう云う譯で、普賢菩薩が、立役者になつて、此の經を說かれた。續きまして、文殊師利、共に手强い先生です。次いで法幢菩薩、法慧菩薩、金剛幢菩薩、金剛藏菩薩等が說いて居ります。さうして釋迦佛は、默然として聽いてござる。「よいことを言ふ。善男子。よいことを言ふ。」それを隨喜し、允可しつつ聽いて居られる。之が此の經の說相でございます。

佛も菩薩も內證の智は同樣

どう云ふ譯で、さう云ふ風に、說いたかと云ひますと、佛の悟と、普賢菩薩、これはまだ無上菩提を證らずして、所謂蕾の將に開かむとして居る、一生補處と謂ひます。其の普賢菩薩と、內證の智慧は同樣だと云ふことを顯すのです。釋迦佛が顯しただけでは、普賢菩薩の智慧が、どの位の程度か分らぬから、佛の說法すべきだけのことを、全部說法させて、默つて聽いて居る。洵に言ふ通り、其の通り、偉いものだ。と云つて佛が讚めて感心すると、佛の言はれたのと、普賢菩薩の言はれたのと同じことだ、と云ふことになります。暫くそこに階級はつけるけれども、內證の智慧と云ふものは、同じものである。廣の相の前には、佛と菩薩の區別をする。略の相の前には、無上菩

提と同じものだ。さう云ふ譯になつて居ります。

普賢の原字

Samantabhadra

之が普賢の原字でございます。

普賢の意義

サマンタは廣い、バドラは賢い、どこでも皆な賢いから普賢と名づける。少々馬鹿な所があつては、普賢と名附けぬ。それは一方賢で、三百六十度賢でない。サマンタバドラで無いのです。

普賢の願行

此の普賢菩薩が、どう云ふことを言つて居るかと云ふと、私は非常な願があり、また行がある。即ち自分の願と、自分の行動がある。之は大變な願を立てゝ居るのです。大願を發して大行を實行して居る。

願は行を伴うて（初めて成就

願だけ發しまして、行が伴はぬと、何の役にもたちませぬ。「私は非常なお金持になる。私一生の間に、三十五億圓の金持にならう。」願は發しましても、毎日寢ころんで居つたのでは、一文も出來ぬ。行之に伴はぬと役に立ちませぬ。どこぞに金でも落ちて居らんか。あつちブラ〳〵、こつちブラ〳〵、終ひには自動車にしかれる樣なことになる。願に行が伴はなかつたら、力が伴はぬ。願に力が伴はなかつたら、何にもなりませぬ。斯樣な方法によつて、大なる利益を得る。斯樣にすれば斯うなる。そこに智慧の力が伴はなければ、たゞブラ〳〵しても何にもならぬ。吾々の所の願は大抵欲望希望であるとか、空想妄想であるとかです。サマンタバドラの行は、それでは可けませぬ。願が行として、ちやんと力を有つて居ります。智慧の力を有つて居りますから、願が行として行はれて來ます。

この經の結歸は普賢行

此の經は長く書いてございます。けれども要する所、此の經は普賢行、叮嚀に云ふと、普賢願行が主力だ。斯うごらんになつたらよろしうございます。仰山書いてありますけれども、結歸する所は、普賢願行で、之が初めから終ひまで、一貫して居ります。

入法界品の設相

それからさつき殘して置きました、入法界品。之は一寸また種類が變つて居ります。之は一面には、普賢行願品とも申します。之はどう云ふことを言ふかと云ふと、善財童子と云ふ人があります。此の名前を、印度の言葉で、調べて來うと思ひました

が、一寸時間がございませぬでした。童子と書いてありますから、餘り年寄ではないでせう。多分 kumāra の譯だと思ひます。クマーラの意味は、尊い家の息子さん、若さんと云ふ字でございます。

善財童子の發心と普賢菩薩

此の人は、無上菩提の志を起し、眞つさきに、文殊師利の所へ行つた。「文殊師利、私は無上菩提の心を發した。どうしたら無上菩提が得られるだらう。」さうしたら、文殊師利は、「それはまことに奇特なことである。此の世界に於て、斯くの如き心を發すと云ふことは、非常に結構なことである。が併し、それに就て、疲れたり、厭になつたりするやうなことでは可かぬぞ。どこまでも精進して、勉强せんけりや可かぬぞ。」更に言葉をつゞけて、「先づ自分の言うて聞かせることは、これだけだが、どこそこに、何と云ふ先生がある。却々よいことを言つて呉れる。此の先生の所へ行つて聞け。」そこへ行くと、「それは結構な事だ。」頻りに賞めて色々言つて、「もう一つと云ふことになると、私には分らぬ。何某と云ふ人が、これからさきにあるから、あの人の所へ行つて聞いて來い。」又そこへ行く。又そこで色々言つて呉れて、次へ行け、次へ行け、段々〳〵五十四人廻つて居ります。卽ち人間の數が、五十四人と、場所が、五十五になつて居ります。文殊師利の所へ、二回出て居りますし、今一ところで、二人に言つて居る所がありますから、之を一人に攝めると、五十三人であります。其の說法は、五十四回になります。五十四回聽きまして、其の最後に、サマンタバドラの所へぶち當つた。此處で普賢行を聽いたのです。可なり長いこと聽き廻つて、結極最後に普賢行を聽いた。之が結論になる譯であります。

善財の質問と普賢の回答

「どうしたら無上菩提が得られるか？」と聽いたら、サマンタバドラ、普賢と謂はれるだけあつて、馬鹿な事は言はぬ。却々賢いことを言つて居ります。

願我臨欲命終時
盡除一切諸障碍
面見彼佛阿彌陀
卽得往生安樂國
我既往生彼國已

現前成就此大願
一切圓滿盡無餘
利樂一切衆生界

普賢行の要點と阿彌陀如來の資本

長いものでございますが、要點はこゝでございますから、これだけ出して置きます。斯う云ふ賢いことを言ひます。「普賢行と云ふものは、色々えらいことがある。私は此の大願を發し、大行を具足するが、私が命終の時に臨んだら、ありとあらゆる一切の障りを、除いてしまふ。彼の阿彌陀に、面のあたり會うて、安樂國に生れる。何の爲めに生れる。我既に彼の國に生れ已れば、現前共の儘普賢行願の、大きなものを成就する。一切悉く圓滿に盡して餘りなし。皆んな此の願を具足させてやり、一切衆生界を利樂せしめる。」賢いことを言つてあります。こゝらでゴソ〳〵やつて居つては、碌なことは無い。彼の國、阿彌陀佛の國へ行つて、向ふの資本を借りて、ウンとやらう。さすがサマンタバドラだけに、よいことを言ふ。吾々でも少々の財産では、まあゴソ〳〵位出來ますけれども、そんなことではどうもならぬ。銀行から何億圓と云ふ金でも借りたら、どんなことでも出來る。斯う云ふ理窟を、サマンタバドラは考へた。全體五十四人グル〳〵廻つて、結論阿彌陀如來をたのんで資本を借りて、無上菩提を證しようと云ふ。之が華嚴經の說相でございます。

智者は利用し愚者は害用す

此の普賢行願品は、さう云ふ譯で、五十五通り色々申上げた結論が、そこに行きます。共の道中道行きは、甚だ面白い。或は御醫者さん、船頭さん、それから怪物見たやうなもの、色んな者に會ふ。色んな者に會ふと云ふことは、ありとあらゆる人物は、皆な吾々の爲に、善知識になる。吾々の爲めに、教師になつて呉れるのだ。智者は之を利用し、愚者は之を害用する。愚者は如何に尊い人に會うても、共の人から教訓は得られぬ。智慧ある者は、誰がものを言つても、それが益になる、と云ふ證據になります。目下のものに、ものを問ふことを耻ぢない。下聞を耻ぢず。下のものにでも尋ねると、自分より或る點よいことを知つて居る。聞いて廻るうちには、とてもえらい得があります。何でもちやんと聞いて、自分の無上菩提の心を發す教訓を得る。あなた方でも、ものを人にお聽きなさい。得をして、決して損は致しませぬ。下らぬことで

も爲になるように聽きさへすれば、それでよいのです。先づ此の御經は、きりがございませんから、これで措きます。今度は又違つた御經をやります。

第十五　妙法蓮華經

原字――鳩摩羅什譯――原字の意義――大乘佛教に於けるこの經の地位――一乘の妙典――唯有一乘法――不可思議の奇瑞と諸弟子の勸請――二乘は方便にして假說的――唯一佛乘のみ――方便――四十餘年未だ眞實を顯はさず――今初めて眞實を顯はす――舍利弗の授記――摩訶迦葉等諸阿羅漢諸聲聞の授記――凡夫往生の證據――品題――信受說法者の功德――信受說法者を守護す――如來壽量品の說相――觀音菩薩普門品――普門の義と觀世音――普門品と妙法蓮華經の關係――普門品の說相――法華經全卷觀音の働き――一乘法と彌陀法と觀世音菩薩

原字　Saddharma puṇḍarīka Sūtra

妙法蓮華經

鳩摩羅什譯

之は洵にたつとい御經でございまして、Kumārajīva（鳩摩羅什）が、妙法蓮華經と譯して居ります。之は直譯であります。

原字の意義

Saddharma は法、puṇḍarīka は蓮の名前でございます。蓮の最も上等な花の咲くものを、プンダリーカと云ひます。padma と云ひますと紅い蓮。蓮の華にもよいものと、悪いものがありまして、puṇḍarīka と云ひますのは、最も上等な華のある蓮のことです。一番よいと云ふからよいのでせう。支那にはそんな字がありませぬから、仕方がないので、蓮華と、字の通り譯した。

大乘佛教に於けるこの經の地位

之は日本に於ては、天台宗日蓮宗が、基礎にして居る所の經典でございます。此の經は、支那でも印度でも、非常に尊んだ所の經典であります。大乘佛教を信ずる者で、此の經を尊ばぬ教はない。之は先づ一乘の妙典と申します。併し之は華嚴經のやうに、廣大な面積のものではございませぬ。八卷に譯してありますが、私も度々此の經を、讀んだことがございますから、申上げて見ます。

一乘の妙典

一乘の妙典とは、どう云ふことを言つたか。第二の方便品に、奇拔なことが言つて

唯有一乘法
不可思議の奇瑞と諸弟子の勸請

あります。釋迦一代の說法の中、最も大切なことであります。日蓮宗の人に聞いてごらんなさい。口を極めて讃嘆する所であります。「十方佛土では、唯一乘の法があるばかりで、二乘三乘あるもので無い。」と云ふことです。

十方佛土中唯有一乘法無二亦無三

全體此の御經を說かれるのが非常に面白い。大光明を放つて、不可思議の奇瑞を現した。皆びつくりした。大變なことを說かれるだらう。釋迦佛は、一大事因緣の爲に、此の世に出て來たのであるから、之を說く爲めに、特別の奇瑞を現した。それから、どうか佛に說法して戴きたいと云ふことを、佛に請ふ。所が佛は却々說法しない。三遍請うて、三遍說法をしない。「何故して下さらない。」「せぬことはないが、恐らく私が說法したら、皆んなが驚いて信を生じない。信を生じないと、却つて其の人が、罪を受けるから說法せぬ。」所が五百人の驕慢の比丘衆があつて、佛の唯有一乘法の說法を、聽くことを好まなかつた。それがのいてしまふのを待つて居られた。さうすると五百の比丘衆は、自分はさう云ふ法は、聽きたくないと云つて歸ります。それが歸つたら、モウあとの者には、言つてやつてもよいと云つて說かれた。

二乘は方便にして假說的

「全體今日まで聲聞、緣覺、卽ち聲聞乘、緣覺乘の二つの小乘がある如く、說いて居つたのは、私がお前等を、引つ張つて來る所の、一つの方法として、言つて居つたのである。決してそんなものが、存在すべき筈のもので無い。」昨日申しました、非マラキールチ、ニルデーシヤ、あの御經には、「聲聞乘緣覺乘卽ち二乘と云ふものは、丁度無上菩提の種が、斷れてしまつたやうなものである。如來の種と云ふものは、どんなものだ、煩惱である。煩惱をたゝき斷つて居るから、無上菩提が得られぬ。」と云つて、二乘の者が、悲しんだと云ふことを申しました。ランカーバターラでは、「之は寢て居るやうなもので、追つつけ目が覺めるであらう。道樂息子だから、追つつけ改心するだらう。」と云ふことを、申し上げました。それをもう一つ敷衍した。「さう云ふことすらない。菩薩と云ふも、假說的なら、聲聞緣覺も假說的で、唯一乘法のみあるのである。一乘とは何か。一佛乘だ。佛より何んにもないのだ。」そこでみんなびつくりした。これからぼつ〳〵階段を、上つて行かねばならぬ。學問の程度が違ふ。行け相にない。

佛と吾々とは非常な違ひである。地球から海王星迄より、まだ遠いと思つて居つた。そこへ、「そんなものはありはせぬ。たゞ佛だ。」之れではびつくりします。後から聞くと、當り前と思ひます。其の事ばかり、朝から晩まで、聞かされて來て居るから、驚きはしませぬ。今迄きびしい階級制度で、今度は一番下の者が、一番上に擧げられたのですから、びつくりもしませう。「之はえらい事だ。未曾有のことだ。」と言つた。それに就きまして、非常に面白い譬が出て居ります。方便品には、火宅の喩があるし、信解品には、長者窮子の譬を出すなどして、非常に面白い譬喩が出て居ります。之も亦妙法蓮華經を、講釋する時に、詳しく申します。今日は要點だけにして置きます。

唯一佛乘のみ

「唯佛乘があるのみだ。唯一つのものであるけれども、娑婆世界に在る所の、惡衆生の輩は、馬鹿な癖に、根性が曲つて居る。愚昧な上に、こりかたまつて居るから、ぼつ〳〵下から說いてやつた。」之が卽ち方便品に書いてある、佛方便力である。茲で方便と云ふ字を、序でに申上げて置きます。

方便

Upāya　之れは手段方法と云ふ字義を、持つて居ります。自分が目的を立てる。此の目的を如何にして遂行すべきかと云ふ智慧が、ウパーヤであります。戰をする時には如何にして勝つべきかの、戰術戰略がウパーヤで、卽ち目的を遂行する時の、手段の智慧であります。

四十餘年未だ眞實を顯はさず

だから釋迦佛は、「一乘法を說かんが爲には、如何にすべきか。三乘を說いた。三乘を佛の方便と云ふ。其の前私は四十年の間、眞實の事は言はなかつた。」斯う釋迦佛が說いて居ります。

今初めて眞實を顯はす

四十餘年未レ顯二眞實一

「我は阿耨多羅三藐三菩提を、ビツパラ樹の下で、悟つて以來四十餘年、本當の事を言はなかつた。現に今言はうと思つても、五百人はびつくりして、逃げて行つたでは無いか。今初めて之をお前等に、說いてやるのである。」それで此の經が一乘の妙典と云つて、非常に尊い經だと云ふ譯になる。

舍利弗の授記

それから先づ第一に出たのが、大智舍利弗（Çāriputra）之は佛の御弟子の中で、智慧第一と云はれてゐる人です。其の舍利弗が、「私共阿耨多羅三藐三菩提の位が、得ら

れますか。」「素より得られる。本來これ〳〵の時間の後には、悟を開いて、如來になる。」と授記を受けた。

摩訶迦葉等諸阿羅漢諸聲聞の授記

つゞいて出て來たのが Mahākāçyapa（摩訶迦葉）それから Subhūti（須菩提）Kātyāyana（迦栴延）Mahāmaudgalyāyana（目蓮）と云ふやうな、大弟子大阿羅漢は無論、まだ阿羅漢にならぬ聲聞の弟子、阿難尊者を筆頭にして、皆同じく Vyākaraṇa 卽ち昨日申しました受記を、受けて居ります。

凡夫往生の證據

さうすると、「そればかりでは可かぬ。凡夫はどうなる。凡夫も何とかして貰はぬと、大智舍利弗や目蓮はよいとして、下廻りが助からぬ。」そこで凡夫の筆頭之は本當の凡夫ではありませぬけれども、佛の姨母さん、Mahāprajāpati。これは佛の阿母さんです。生母の Mahāmāyā と云ひますのは、佛を誕生して直ぐ亡くなつた。佛を御育て申した人は、其の妹卽ち姨母さんでございます。それで、「私は姨母に對して、母の思ひがする。」と仰しやつて居りますが、法華經は、佛七十五六の時の說法だから、百近くのお婆さんです。それが女弟子の一番頭であつた。男ばかり受記を受けて、女が受けませんので、「女はどうでせう。」「マハープラジャーパチ！お前もさうだ。お前も無上正徧智を覺る。」佛の奧樣――皇太子妃であつた Yaçodharā が、二番の御席にある女弟子です。之が、「私は何とかなりませぬか。」「お前も何とかなる。」如來の下にある、ありとあらゆる者が、皆記別を受けた。それから見ると、一切衆生皆な無上正徧智を、悟ると云ふ證據になる。之は一番尊とい御經であります。

此の經も長い御經で、色んなものが、迚も仰山引つついて居ります。華嚴經程仰山ありませんが、一寸やつて見ます。

品題

序品　方便品　譬諭品　信解品　藥草諭品　授記品　化城諭品
五百弟子受記品　授學無學人記品　法師品　見寶塔品　提婆達多品
勸持品　安樂行品　從地涌出品　如來壽量品　分別功德品
隨喜功德品　法師功德品　常不輕菩薩品　如來神力品　囑累品
藥王菩薩本事品　妙品菩薩品　觀世音菩薩普門品　陀羅尼品
妙莊嚴王本事品　普賢菩薩勸發品

信受說法者の功德

これだけゴチャ〳〵引つ着いて居ります。今の受記以外、要する所、此の經を信じ、之を人に說き、自分に忘れずに受持して居つたならば、これだけの功德があるのだと云ふことを、ずつと書いてあります。

信受說法者を守護す

それからありとあらゆるものが皆、此の經を信じ、之を受持し、此の妙法蓮華經によつて、修行をして居るものを、皆護ると云ふえらい手合が出て居ります。

如來壽量品の說相

それから如來壽量品には、抑も釋迦佛は、此の世界に於て、阿耨多羅三藐三菩提を、取つたと思つて居るけれども、そんなおろそかなもので無い。「私は過去久遠無量劫、勘定の出來ぬ程昔、佛になつて、無上正徧智を悟つて居る。お前等を濟度する爲めに、假りに相を示した。如來の壽命は無量である。」と云ふことが書いてあります。色々なことが書いてありますが、此の經の主力は、一乘法と云ふ所にあります。

觀音菩薩普門品

一寸こゝで申上げて置きます。どの宗旨でも、禪宗でも使ひまするし、日蓮宗天台宗は無論でございますけれども、他でも皆使ひますが、觀世音菩薩普門品と云ふのがございます。之は私も一度普門品だけを、上海で講釋したことがございます。これに觀世音菩薩の功德を、讚嘆して居ります。今日はざつと申します。

普門の義と觀世音

大抵皆御存知でせうが、普門と云ふのは、ありとあらゆる所、どこにも皆門があると云ふことで、つまり初めから門が無いと云ふことになります。門と云ふものは、高塀が其の兩側にあるから門になる。三百六十度開けたら、初めから高塀も門も無い。何故そんな譯の解らぬことを、言つたかと云ひますと、觀世音菩薩が、如何なる相、如何なる方法、如何なる角度の所へも、自分の力を以て現れて、一切衆生を引つぱると云ふことです。

普門品と妙法蓮華經の關係

此の觀世音菩薩の功德の所は洵に面白い。一寸之は妙法蓮華經に、關係が無いやうです。妙法蓮華經の、妙の字も書いてありませぬ。此の法華經を、護つてやるとも書いてありませぬ。之を信じた者に、功德を與へるとも何とも書いてありませぬ。そこに非常な面白味があります。どう云ふことが書いてあるか。

普門品の說相

佛がアクシヤヤマテイ（Akṣayamati）と云ふ菩薩に對して、「お前は此の會座に居る所の、觀世音菩薩の功德と云ふことを知つて居るか。知つて居れば、觀世音菩薩を禮

拜せよ。」「どうか私に、觀世音菩薩の功德を、說いて下さい。禮拜します。」「然らば說いてやる。」と釋迦佛が、口を極めて譽めて居ります。「觀世音菩薩は、斯う云ふことをやる。」とてもえらいこと譽めて居ります。あれ位譽めて貰つたら、餘ッ程えらいのでせう。それから終ひに、アクシヤヤマティが、自分の頸に懸けて居る所の、瓔珞を取つて、觀世音菩薩に供養致します。其の供養の瓔珞を、觀世音菩薩が受けて、二つに分け、其一つを、釋迦佛に、今一つを、其の時現れた多寶如來に、再び供養する。と云ふことが、書いてあります。

法華經全卷觀音の働き

何故之に法華經を受持したものを、保護するとか何とか云ふことを、書いて無いのだ。後とは皆んな書いてあるのに、普門品一卷だけありませぬ。私不思議に思つて居りましたが、それから往生淨土論を書かれた、Vasubandhu と云ふ菩薩が印度にあります。支那では天親菩薩とか、世親菩薩とか譯して居ります。此の人が、妙法蓮華經優波提舍と云ふ書物を書いて居ります。此の書物によりまするとと、此の妙法蓮華經の全部が、觀世音菩薩の働きになつて、一切衆生を擁護して、救濟すると云ふことを云つたものだ。と云つてあります。成程それで分りました。觀世音菩薩普門品全部が、妙法蓮華經となつて、さうして衆生を擁護し、救濟して居る譯です。それですから特別に其の事を、言はない所に妙味がある。全部それだから言ふ必要が無い。やはりヴスバンズ菩薩位偉くなると、偉い見方をするなと感服して、私は讀んで居りました。

一乘法と彌陀法と觀世音菩薩

これに就て一つ面白い事がある。觀世音菩薩の戸籍は、どこにあるか。阿彌陀如來の總理大臣をして居る極樂の菩薩である。さうすると極樂の菩薩の觀世音が、それだけの能力をもつて、妙法蓮華經の働きを現して居るとすれば、釋迦の說いた所の一乘法は、彌陀法であつて、彌陀法は卽ち釋迦の一乘法である。彌陀の願力一切衆生を、攝取すると云ふことは、妙法蓮華經の一乘道であつて、其の働きをする人が、觀世音菩薩と云ふことになります。どう云ふものか、昔から法華と念佛は、日本の佛敎史では、喧嘩して居つたものです。私共見ると喧嘩せぬやうに讀みますが、讀みややうが惡いから喧嘩するのでせう。先づ此の經は之で終りです。

第十六　大般涅槃經

原字――原本無し――法護譯――涅槃經の特徴――說法の場所と時――涅槃の意義――佛の入涅槃と諸弟子の疑念――如來常住――長壽品と如來常住――武器を以て法を護れ――一切衆生悉有佛性――一闡提の意義――一闡提と佛性――一闡提に對する正說と邪說――一闡提が善根を生ずるは光明の緣――本能心卽如來心は微妙な作用――煩惱心は菩提心たり得る基礎――涅槃經は釋迦一代の結經――眞宗の教義と涅槃經

原字　Mahāparinirvāṇa-Sūtra

原本無し　之は譯さずに大般涅槃經と謂つて居ります。之が又迚もえらい御經です。原本があれば申分無いのでありますが、之も譯本よりありませぬ。

法護譯　この大涅槃經を Dharmarakṣa が、四十卷に譯して居ります。よい譯でありまして、文字の解釋のしにくい所は一つもございませぬ。

涅槃經の特徴　之はどう云ふことを言つたものかと云ふと、

如來常住
一切衆生悉有佛性

之が涅槃經の特徴であります。

說法の場所と時　全體時代を申しますと、Kuśinagara の、娑羅の樹の並んで居る下で、佛が將に此の世に別れむとする時に說いた、經典でございます。

涅槃の意義　涅槃とは彼の世に去ることを申します。原字は消えると云ふ義です。消えるから、靜かな寂滅の義を出し、安靜の義を出して來ます。ニルヴーナに這入つたら、動作をとめてしまふ譯です。そこで吾々なら死んだと云ふ所を、佛はニルヴーナに入つたと謂つて居ります。

佛の入涅槃と諸弟子の疑念　そこに居つた所のありとあらゆる人間は、佛のニルヴーナに這入らんとするのを、見るものですから、何故釋迦佛は、吾々を捨てゝ、早く亡くなつてしまふか。僅かに人間の命八十年は、短か過ぎはしませぬか。其の當時八十年は、短命であります。經

迦佛の姨母さんが、まだ生きて、女の親方をして居る位ですから、百年位は當り前のことです。佛にしては八十やそこらは、餘りに短命でありませぬかと、疑念の起るのも尤です。此の頃は四十の厄年で、死ぬのが多いでせう。それを直面して見て居るからやかましく言つた。

如來常住

佛言く、「如來は斷じてニルヴーナに這入らない。そんなことを言ふのは、了見違ひであつて、如來は常住して居るものだ。けれどもかの五濁惡時の惡驕慢のものに、ニルヴーナを示してやるのだ。抑も私は此の世に出て來たので無い。常住して居つて、這入りもせぬ出もせぬ。何が故にニルヴーナに這入ると云ふか。」面白い事を言つて居る。蛇が鼬と、鳥が梟と、同居して、炭火の中から氷が出ることがあつても、如來がニルヴーナに這入ると云ふことは無いと、斯う云はれたのです。

長壽品と如來常住

それで第一番に、長壽品と云ふのがあります。此の長壽品の所に、「如何が如來常住と云ふか。如何が長壽金剛不壞の身と云ふか。」と迦葉菩薩が問うて居る。それに對して、如來と云ふのは、斷じてさう云ふものでないと答へてあります。此の長壽品に、

武器を以て法を護れ

一つ面白いことがありますから、申上げて置きます。

佛が答へて言ふのに、「全體私が斯う云ふ所の悟を開き、斯う云ふダイヤモンドのやうな、堅い壞れない身になつた原因を、お前に言つてやる。昔、私は國王であつたことがある。其の時に私は、大變佛法を信じて居つた。時に持戒の比丘があつた。其の比丘の教を聞いて、他の多くの破戒の比丘、及び外道等が、迫害を加へた。そこで私は、其の比丘を擁護する爲めに、劍や矛を執つて、非常に澤山の者と戰つた。さうして私は戰つて、創を受けて死んだ。其の功德によつて、今日私の斯う云ふ身が出來た。其の比丘は、私の先代の迦葉佛であつた。」と言つて居りますが、これから末世になつて、法を護る者は、五戒を護持するやうな、腰拔では可かぬ。此の法を護る者は、弓矢刀の武器を以て護れ。と言はれて居ります。昔石山城で、私共の祖先及びあなた方の祖先が、一緒になつて、十三年間織田信長と戰つて、降らなかつたのは、此の涅槃經の主義です。武器を持たずには、此の佛法は護れぬ。所が立派に佛教を說かなければならぬ家で、佛教の慈悲門ばかり言ふから、皆腰拔けになつてしまふのであります。

一切衆生悉有佛性

それで如來が常住して居る。如來常住はよろしいが、今度此方はどうなりますか。と云ふと、こつちの方は、一切衆生悉有佛性で、吾々の方には皆んな佛性があるのです。佛性とは如何なるものかと申しますと、不增不減。斯う來て居ります。之はもう毎度申上げる通りでございます。よく之を讀んで見ますと、佛の性質と云ふものと、如來と云ふものは、同じものでなければならぬ。如來が常住して居つたら、佛の性質も常住せねばならぬ。それが一切衆生に這入つて居るのだから、一切衆生も常住せねばならぬことになります。一切衆生が壞れてしまつては、佛性も壞れてしまふわけです。不增不減であるが故に、佛性常住し、佛性常住するが故に、如來(衆生)常住する斯うならなければならぬのであります。

一闡提の意義

そこで此の一切衆生悉有佛性に就て、問題がありまして、玆に Icchāntika と云ふものがあります。文字の通りに讀みますと、どう云ふ譯で斯う云ふ字を使つたか分りませぬ。これを無信無性と譯して居ります。此の字は、願とか欲とか願望とか希望とか云ふ意味の字で、これから無信無性と云ふ義は出て來ませぬ。私のサンスクリットの力では、得う理解しませぬが、今迄のにさう書いてございますから、私も其の通り讀んで行きませぬと仕方がございませぬ。

一闡提と佛性

此のイツチハンテイカと云ふものが、全體佛性があるか無いかと云ふ問題が、大變やかましい問題で、一切衆生悉有佛性であつても、佛性は大信心であり、大信心は佛性と名づけるのだから、無信と云ふものは、佛性が無いと云はなければならぬ。無信無佛性の筈のものが、無信有佛性であるならば、佛性は信心と名づけられぬ。之は非常に疑問のある所で、涅槃經四十卷の中、三十卷ばかり此の講釋をして居ります。それによれば、「有佛性非なり、無佛性亦非なり。」と云ふことになります。今之をかいつまんで書いて申上げます。

一闡提に對する正說と邪說

一闡提等未生善法便得無上菩提是人亦名謗佛法僧。
一闡提等捨一闡提於異身中得無上菩提是人亦名謗佛法僧。
一闡提等能生善根已相續已相續不斷得無上菩提當知是人不謗三寶。

一闡提はまだ善と云ふことを出さないけれども、佛性があるが故に、無上道を得ら

れると云ふたら、其の事は嘘である。善を起さぬ者は、無上道が得られると云へぬ。それなら一闡提と云ふものは、其の一闡提をやめにして、又今度生れ更つて、別の身になつて、さうして無上菩提が得られると云ふものは之も謬りだ。何となれば、一闡提其の者に、佛性が無くして、數遍生れ更ると、佛性が出來ると云ふことは、あるべきで無い。それではどう云ふのが本當か。一闡提が能く善根を生じ、其の起した善根を相續して斷たない。それで無上菩提が得られるのだ。之が本當の信だから、一闡提無佛性と云ふは非である。

一闡提が善根を生ずるは光明の緣

其の一闡提なるものが、善根を生じて、其の善根を相續するが故に、無上菩提が得られるのだ。それでは全體どうして、一闡提の者が、善根を生ずるか。無信無性のものと云へば、木や石と同じである。そんなものが善根を生じよう筈はない。それをやはり涅槃經の中に斯う書いてある。大涅槃は光明で、衆生の毛孔の中に這入つて、衆生の心を改へる力があると書いてあります。此の時の光明と云ふのは、光線のやうなラジエイションと見てよろしうございます。光明卽ち智慧でありますから、又智慧の働きと見て宜しうございます。或は法門と見ても、どんな見方をしても、同じことですが、いづれにしても、何か緣に觸れて來る時に、段々浸潤して來て、善根、善い心が出て來るのだ。善心が生じて來るから、善法を聽くやうになる。善法を聽けば、善根を生じて相續する。それでございますから、無佛性と云ふも誤りでせう。一闡提の儘で佛性があると云ふも謬りでせう。あるべき筈のやうに働作するが故に善根を生じて來るのだ。斯う云ふことになります。

本能心卽如來心は微妙な作用

けれども本來其の佛性を、導いて來るものは何か。本能心である。本能心以外佛性はありませぬから、本能心が如來になるべき筈のものであります。けれども此の本能心の狀態の儘の時は、如來心とは言へない譯で、それが善根を生じ、相續して、斷えないやうになつて來て、本能心が初めて、如來心と名づけられるから、一切衆生悉有佛性が出て來る。玆に非常な微妙な所がある。本能心が卽ち如來心だと云ふと、惡い事仕放題だと云ふ偏見が起つて來る。如來心となれば、偏見は起つて來ませぬ。惡い事をして居る時は、煩惱心で、菩提心で無い。同じものであつても、其の時は煩惱心

の相を現して居るから、何にもなりませぬ。

煩惱心は菩提心たり得る基礎

此の間申上げた、エレクトロンとプロトンと一緒になつたアトム、その原子の位置を變へさへすれば、空氣を黃金にすることは、容易なことであります。元素を打壞して、其の原子を色々に結び付けると、空氣も黃金になる。それを直ちに、空氣は皆んな黃金だと、言つて見て居つても仕方がございませぬ。長岡さんが、水銀を金にすることをやつたから、水銀が金になれば、追々空氣も金になりませう。そうなると自分の家の領分だけ、尤も地面は國有だが、其の領域内の空氣が皆んな金になつて、大變な金持ちになれます。煩惱心の儘菩提心と云ふ議論は、煩惱心が菩提心たり得るところの、基礎を有つて居るが故に、煩惱心は菩提心と名づけ、佛性と名づけ、如來の體と名づけられるのであります。

涅槃經は釋迦一代の結經

全體此の涅槃經は、釋迦世尊最後の說法であります。佛は常住不變と云ふけれども、五濁の惡衆生は、ニルヴーナの相を見て居ります。再び佛の說法を聽くことは出來ませぬ。佛の方も再び說くことは無いので餘程用心して說いて居ります。それですから、維摩經や金剛般若經では、ゴン〳〵なぐつて居りますが、涅槃經では無茶苦茶になぐつて居りませぬ。馬鹿な手合はもう一遍聽く譯に行きませぬから、こんな手合が迷はぬ樣に、周到な用意が配られてゐる。之が卽ち釋迦一代の結經でございます。

眞宗の敎義と涅槃經

此の御經は一番大切な御經で、天台大師が一番よく使ひます。眞宗では、普通の御坊さんは、使ひませぬけれども、吾々の所の宗祖見眞大師は、涅槃經をウンと引いて來て居ります。眞宗の敎義は、涅槃經によらぬと出て來ませぬ。大變大切な經典でございます。一代の結經でございますから、之を使はぬと出來て來ませぬ。

第十七　無量壽經

原字——無量壽經は眞宗の基礎——この經は釋迦出世の本懷——聽者は菩賢大士の德に邂ふ——阿彌陀如來本願の本末——信疑の別——信は佛敎一貫の基礎——この經の終りの文句——釋迦如來の義務遂行と彌勒以下吾人の義務——如來の勅命——彌勒の責任——出世本懷經——一切諸佛說法義務經